秋田県文化財調査報告書第411集

樋　口　遺　跡

ー一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧー

２００６・３

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７cm、凝灰岩。

樋口遺跡

とよ　ぐち　い　せき

―一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ―

２００６・３

秋田県教育委員会

槍　扇

木　製　品

序

本県には、これまでに発見された約4,600か所の遺跡のほか、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、一般国道７号琴丘能代道路をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造を目指す開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道７号琴丘能代道路建設に先立って、平成15年度に能代市で実施した樋口遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査では、平安時代の斎串や刳り物などの木製品が大量に出土し、当時の祭祀が執り行われた場所であったことが分かりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査並びに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、能代市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成18年３月

秋田県教育委員会
教育長　小　野　寺　清

例　　言

1　本書は、秋田県能代市扇田字樋口に所在する樋口遺跡の発掘調査報告書で、一般国道７号琴丘能代道路建設事業に伴い、平成15年度に行った発掘調査の成果をまとめたものである。

2　調査成果については、既にその一部が公表されているが、本報告書を正式なものとする。

3　本書に利用した地形図は、国土地理院発行の1 / 50000地形図「能代」「森岳」と、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所提供の工事路線計画図(1 / 1000)である。

4　土層断面等の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版　標準土色帖」2002年版に拠った。

5　グリッド杭の打設は、株式会社東亜測量設計に委託したものである。

6　本書に使用した空中写真は、デジタルビジネス秋田に委託したものである。

7　第５章の自然科学分析で、第１節 放射性炭素年代測定は株式会社パレオ・ラボに、第２節 テフラ分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に、樹種同定は株式会社吉田生物研究所に委託したものである。

8　木製品の保存処理は、株式会社吉田生物研究所に委託した。

9　本書の執筆は山田　子と高橋忠彦が行い、編集は高橋が行った。

10　本書を作成するにあたり、次の方々から御指導・御助言を賜った。記して感謝申し上げます。

小口雅史　小島芳孝　鈴木靖民　播摩芳紀　藤沼邦彦　三上喜考　山崎和夫〔敬称略、五十音順〕

凡　　例

1　遺構番号は、種類毎に略記号を付し、種別を問わず検出順に通し番号とした。ただし、精査の結果、遺構でないと判断したものについてはこれを欠番とした。

2　遺構図及び本文に用いた遺構の略記号は下記の通りである。

ＳＴ：捨て場　　ＳＤ：溝跡　　ＳＡ：杭列

ＳＫ：土坑　　ＳＫＰ：柱穴様ピット

3　土層番号は、遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構覆土には算用数字を使用して区別した。

4　遺物図には、土師器・須恵器・石製品と木製品それぞれに遺構内・遺構外を問わず通し番号を付した。写真図版の遺物に付した番号は、この番号に対応する。

5　遺物図に使用しているシンボルマーク、スクリーン･トーンの凡例は次の通りである。

●・・・灯明に使用された土師器の坏

▽・・・口縁が意図的に打ち欠かれた土師器の坏

・・・黒色処理された土師器の坏

目　　次

巻頭図版
序
例言・凡例 …… ii
目次(挿図･表･図版目次) …… iii･iv

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1

第２章　遺跡の環境
　第１節　遺跡の位置と立地 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観 …… 9
　第２節　調査の方法 …… 9
　第３節　調査の経過 …… 11
　第４節　整理作業の方法と経過 …… 11

第４章　調査の記録
　第１節　基本層序 …… 12
　第２節　検出遺構と出土遺物 …… 16
　第３節　遺構外出土遺物 …… 29

第５章　自然科学分析
　第１節　放射性炭素年代測定 …… 67
　第２節　テフラ分析 …… 68

第６章　まとめ …… 72

写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　路線と遺跡 …… 2
第２図 遺跡の位置 …… 3
第３図 遺跡周辺の地形分類 …… 4
第４図 樋口遺跡周辺の遺跡 …… 8
第５図 遺跡周辺の地形 …… 9
第６図 基本層序 …… 13
第７図 遺構配置図 …… 14
第８図 捨て場の位置と広がり …… 15
第９図 ＳＴ27捨て場 …… 16
第10図 ＳＴ27出土遺物(１) …… 17
第11図 ＳＴ27出土遺物(２) …… 18
第12図 ＳＴ27出土遺物(３) …… 19
第13図 ＳＴ27出土遺物(４) …… 20
第14図 ＳＴ27出土遺物(５) …… 21
第15図 ＳＴ27出土遺物(６) …… 22
第16図 ＳＴ27出土遺物(７) …… 23
第17図 ＳＴ27出土遺物(８) …… 24
第18図 ＳＴ27出土遺物(９) …… 25
第19図 ＳＴ30捨て場 …… 26
第20図 ＳＥ08井戸跡、ＳＫ01･04･05土坑… 30
第21図 ＳＤ22溝跡、ＳＡ28･31･32杭列 … 31
第22図 ＳＫ06･29土坑、ＳＫＰ12～17･21
柱穴様ピット …… 32
第23図 ＳＴ30出土遺物(１) …… 33
第24図 ＳＴ30出土遺物(２) …… 34
第25図 ＳＴ30出土遺物(３) …… 35
第26図 ＳＴ30出土遺物(４) …… 36
第27図 ＳＴ30出土遺物(５) …… 37
第28図 ＳＴ30出土遺物(６) …… 38
第29図 ＳＴ30出土遺物(７) …… 39
第30図 ＳＴ30出土遺物(８) …… 40
第31図 ＳＴ30出土遺物(９) …… 41
第32図 ＳＴ30出土遺物(10) …… 42
第33図 ＳＴ30出土遺物(11) …… 43
第34図 ＳＴ30出土遺物(12) …… 44
第35図 ＳＴ30出土遺物(13) …… 45
第36図 ＳＴ40出土遺物(１) …… 46
第37図 ＳＴ40出土遺物(２) …… 47
第38図 ＳＴ40出土遺物(３) …… 48
第39図 ＳＴ40出土遺物(４) …… 49
第40図 ＳＴ40出土遺物(５) …… 50
第41図 ＳＴ40出土遺物(６) …… 51
第42図 ＳＴ40出土遺物(７) …… 52
第43図 ＳＴ40出土遺物(８) …… 53
第44図 遺構内出土遺物(１) …… 54
第45図 遺構内出土遺物(２) …… 55
第46図 遺構外出土遺物(１) …… 56
第47図 遺構外出土遺物(２) …… 57
第48図 遺構外出土遺物(３) …… 58
第49図 遺構外出土遺物(４) …… 59
第50図 火山ガラスの屈折率 …… 71

表　目　次

第１表 周辺遺跡一覧 …… 7
第２表 柱穴様ピット一覧 …… 29
第３表 土師器など遺物一覧 …… 60～64
第４表 木製品一覧 …… 65･66
第５表 ^{14}Ｃ年代測定結果 …… 68

図　版　目　次

巻頭図版 檜　扇
木製品
図版1-1 遺跡遠景(西から)
1-2 遺跡近景
図版2-1 ＳＴ27捨て場
2-2 ＳＴ30捨て場
図版3-1 ＳＤ22溝跡
3-2 ＳＤ22溝跡
図版４ 出土遺物(１)
図版５ 出土遺物(２)
図版６ 出土遺物(３)
図版７ 出土遺物(４)
図版８ 出土遺物(５)
図版９ 出土遺物(６)
図版10 出土遺物(７)
図版11 出土遺物(８)
図版12 テフラ

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

一般国道７号琴丘能代道路建設事業は、一般国道７号の自動車専用道路として、山本郡琴丘町から能代市を通過して山本郡二ッ井町に至る全長33.8kmを整備する事業である。昭和58年に一般バイパスとして事業化されていたものが、平成元年度に高規格道路網の整備促進の一環として自動車専用道路に規格変更された。平成４年に八竜ＩＣから能代南ＩＣまでの4.1kmが、平成13年に琴丘森岳ＩＣから八竜ＩＣの13.0kmが暫定供用区間として開通している。さらに平成６年に能代南ＩＣから能代東ＩＣの6.7kmが、平成７年に能代東ＩＣから二ツ井ＩＣの10kmの区間延伸が決定した。

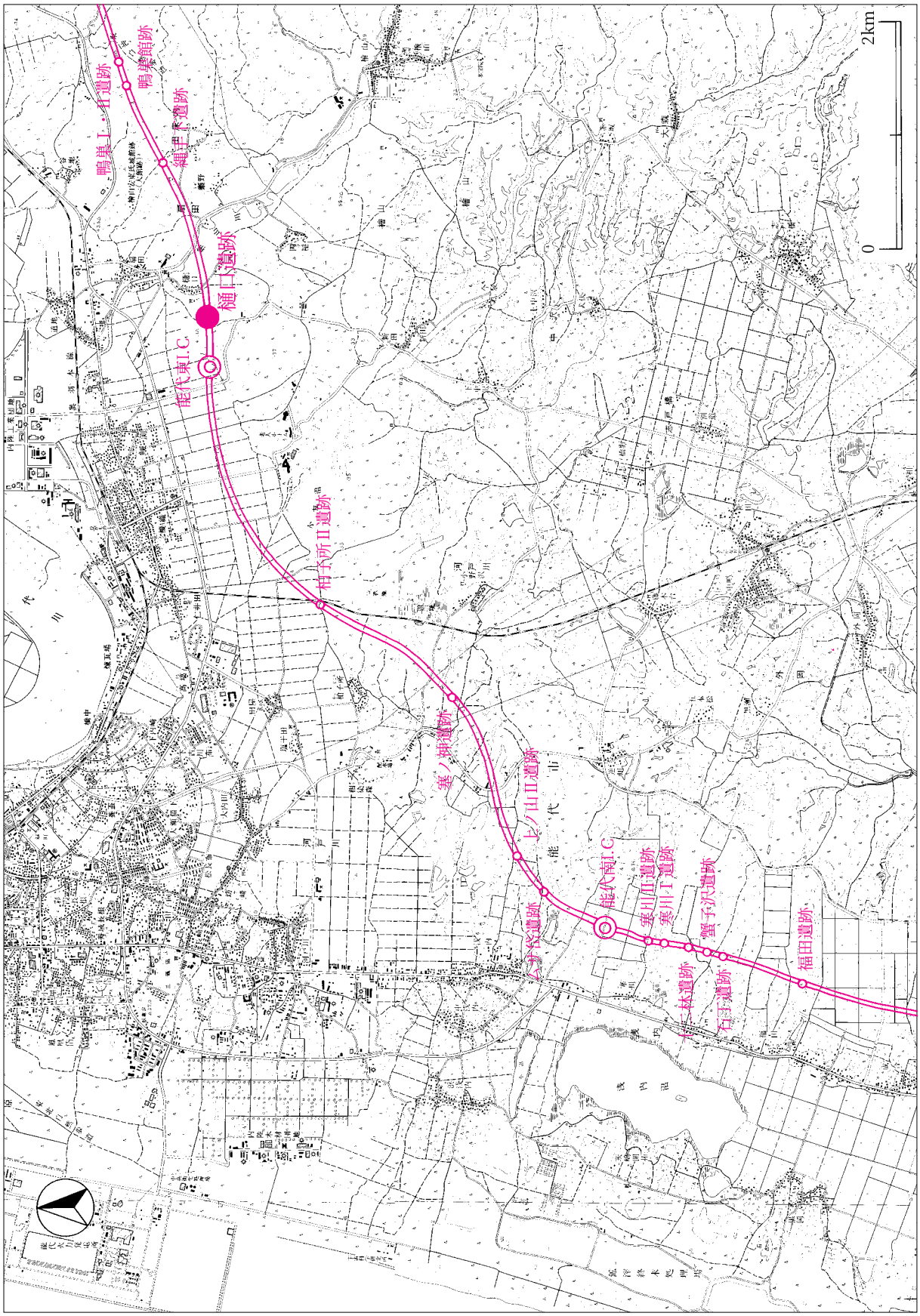
これら計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、国土交通省から秋田県教育委員会に、埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、平成13年から能代東ＩＣから二ツ井ＩＣ間の計画路線内の遺跡分布調査を行った。その結果、新発見の遺跡として、樋口遺跡をはじめとして縄手下遺跡など６遺跡が確認され、今後は遺跡の確認調査が必要であること、さらに確認調査の結果によって取り扱いの協議が必要であることを回答した。この分布調査の結果をふまえ、秋田県埋蔵文化財センターは、平成14年６月25日から７月19日に樋口遺跡の確認調査を実施し、工事区内の調査面積を確定した。以上の経緯に基づき、秋田県埋蔵文化財センターは、工事に先立って平成15年５月20日から８月８日に発掘調査を実施した。

第２節　調査要項

遺跡名称	樋口遺跡(とよぐちいせき)
遺跡略号	３ＴＧ
所在地	秋田県能代市扇田字樋口58－１外
調査期間	平成15年５月20日～８月８日
調査目的	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前発掘調査
調査面積	1,500㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	山田　子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主事）
	足利直哉（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
	楢岡　淳（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
総務担当者	藤原康悦（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　副主幹）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所・能代市教育委員会

参考文献

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財報告書第324集


鴨巣館跡
鴨巣上・下遺跡
縄手下遺跡
縄手口遺跡
能代東I.C
柏子所Ⅱ遺跡
塞ノ神遺跡
上ノ山Ⅱ遺跡
能代南I.C
塞川Ⅱ遺跡
塞川下遺跡
蟹子沢遺跡
大林遺跡
石手遺跡
福田遺跡
0
2km

第1図　路線と遺跡

第２章　遺跡の環境

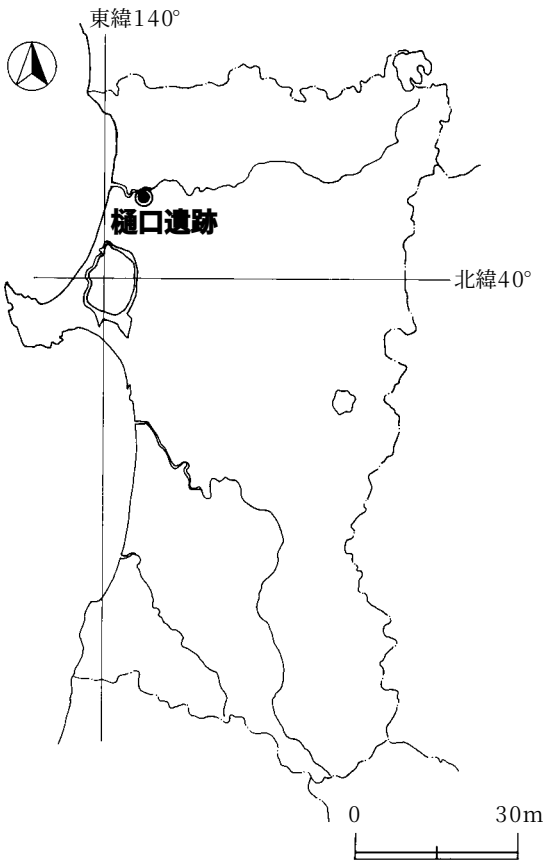
第１節　遺跡の位置と立地

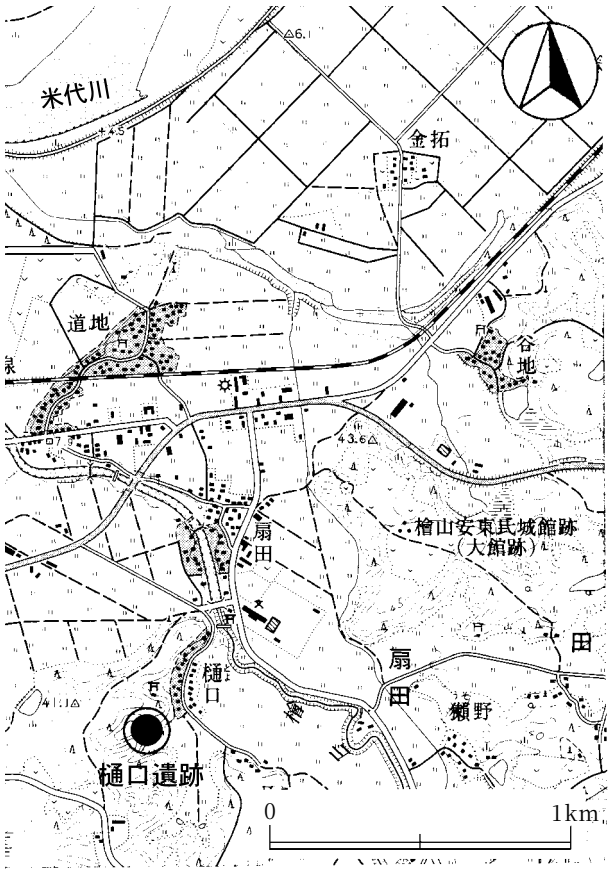
樋口遺跡は、能代市役所から南東6.1km、ＪＲ東能代駅から東南東2.1kmに位置している。

能代市は、秋田県北部の日本海側、米代川の河口付近に立地していて、能代市の北側には奥羽脊梁山地から分岐する標高1,000m以上の白神山地、南側には同じく奥羽脊梁山地から延びる標高50～170mの台地・丘陵地が連なり、中央に開けた低地を、米代川が蛇行しながら東から西へ流れている。

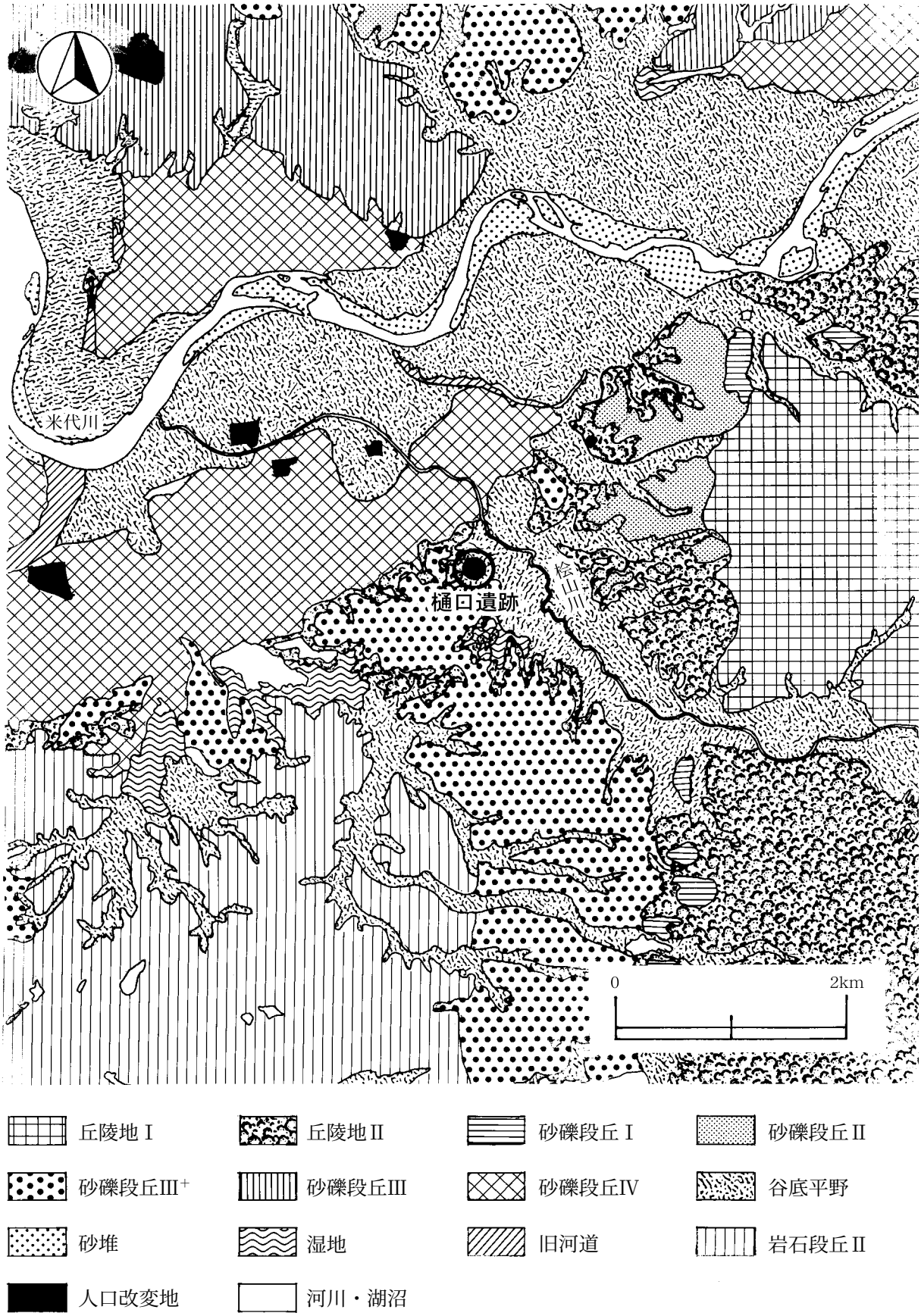
遺跡のある扇田地区は能代市の南側にある志戸橋野台地の北端にある。台地上は広い平坦面であるが、縁辺には開析谷が樹枝状に発達しており、谷から続く低地には米代川の支流である檜山川が南東から北西へ流れている。樋口遺跡は、志戸橋野台地北端の開析谷の、斜面地から低地部分にある。

遺跡周辺の表層地質は、志戸橋野台地上では潟西層の礫および砂、場所により火山灰を含む更新世後期の堆積物であるが、台地の開析面は潟西層の下位に堆積している更新世前期の笹岡層のシルト岩・細粒砂岩が露頭している。檜山川低地では完新世に台地が開析されて堆積した沖積層の礫・砂がち堆積物が主体を占めている。





第2図　遺跡の位置



第3図　遺跡周辺の地形分類

第２節　歴史的環境

能代市とその周辺の遺跡は、米代川右岸の東雲台地や左岸の浅内台地・成合台地を中心に、旧石器時代の遺跡から中・近世まで数多くの遺跡が存在する。ここでは、旧石器時代から中世までの遺跡を概観する。

能代山本地域で旧石器が確認されたのは、昭和40年代に冨樫泰時氏によって、個人コレクション中に旧石器が見いだされていたが、1983年に行われた浅内台地の此掛沢Ⅱ遺跡(1)がこの地域の旧石器時代の本格的な調査となった。此掛沢Ⅱ遺跡の旧石器は、柳葉形と先端部が幅広のナイフ形石器に米ヶ森型台形石器が供伴するもので、ＡＴ降下前後と考えられている。また、東雲台地の館下Ⅰ遺跡では杉久保型のナイフ２点、成合台地にある逆川遺跡(2)では、石核、石刃が出土している。同じ台地では平成２年に、鴨子台遺跡が調査され、細石刃を中心とする一群とそれに先行する一群が確認されている。平成15年に調査された縄手下遺跡は、樋口遺跡からわずかに１kmほど北東にあり、旧石器時代後期のおよそ27,000年前ほどの土坑が検出され、これに伴ってナイフ形石器や台形様石器が出土している。

縄文時代になると、単独の出土ではあるが、草創期に位置付けられる刃部磨製石斧が先の鴨子台遺跡で出土している。早期には、寒川Ⅰ遺跡(3)で赤御堂式土器を主体とする土器群とともに竪穴住居跡や陥穴と考えられる平面形が円形で底面中央にピットを持つ土坑が確認されている。

前期になると遺跡数が増加する。中でも東雲台地にある杉沢台遺跡は、昭和55年に国営能代開拓建設事業に伴って調査され、円筒下層ｃ式の大形住居を中心とする集落跡が見つかり、大型住居研究の契機となった。遺跡は昭和56年に国指定史跡になっている。他にも、前期の遺跡では、大沢台地ある根洗場遺跡(円筒下層ｃ・ｄ式期)、東雲台地の八森坂Ⅰ・Ⅱ遺跡(4)(円筒下層ａ式期)などがあり米代川右岸にある遺跡である。一方米代川左岸にも数多くの遺跡群がある。幟山丘陵にある上ノ山遺跡では、発掘調査は行われていないが、開田工事によって、多量の遺物が採集されている。円筒下層式直前の土器が出土していて、遺物の出土量からしても大規模な集落跡であった可能性がある。このほか、米代川左岸の志度橋台地には新田沢遺跡や蟻ノ台遺跡群(7)、小友遺跡群(8)があり、浅内沼東岸の成合台地には寒川家ノ下遺跡、福田遺跡(9)、此掛沢Ⅲ遺跡がある。

中期になるとさらに遺跡数は増加する。米代川右岸では、前述した館下Ⅰ遺跡がある。遺跡は東雲台地の南縁の標高30mほどの舌状部分に立地し、昭和53年の発掘調査により平面形が楕円形を呈する住居跡からなる円筒上層ｃ・ｄ式期の住居群と、円形で石囲炉を持つ住居跡からなる大木10式期の住居群が確認されている。この他前述の上ノ山遺跡でも、円筒上層ｂ・ｃ式土器や大木10式土器などがまとまって出土している。左岸には、円形の竪穴住居跡とフラスコ状土坑が確認された腹鞁ノ沢遺跡(13)があり、浅内台地には、大木９～10式土器を出土する古屋布遺跡、大木７ｂ式土器を出土する相染森遺跡(14)、寒川Ⅱ遺跡などが存在する。

後期には、東雲台地に真壁地遺跡(15･16)がある。昭和58年の調査では十腰内Ⅰ式期の竪穴状遺構や土坑群が確認されたほか、当該期の深鉢形土器とともに多数の三脚石器や土偶、鐸形土製品などが出土している。このほか、同台地には四郎兵衛堤遺跡(17)、二林台遺跡、大内坂の遺跡群(19～21)がある。米代川左岸の大台野台地には外堤遺跡があり、賀曽利Ｂ式の土器が出土している。成合台地の寒川Ⅰ遺跡では後期中葉の３軒の竪穴住居のほか、土坑墓や土器棺墓が確認されており、同台

地上には後期中葉の蟹子沢遺跡(22)、後期前半の石丁遺跡(23)、成合遺跡の各遺跡群が所在する。後期後半には浅内台地の北端部に柏子所Ⅱ遺跡(30)がある。平成14年の発掘調査では、由利本荘市の上谷地遺跡についで２例目となる水さらし場遺構が検出されている。水さらし場遺構は、後期終末から晩期初頭にかけてのもので、構造材を敷き詰め、集めた沢水を調整しながら流すことによって、堅実類のアク抜きを行った遺構である。この遺構の発見を契機に、遺跡の立地、特に沢部や沖積低地での遺跡の在り方に一層の注意が払われるようになってきた。

晩期には、東雲台地の杉沢台遺跡で、遺構は土坑１基だけであるが、大洞ＢＣ式～大洞Ｃ２式の土器に伴って、石剣、石刀や土偶などが出土している。また、同じく米代川右岸の大野豊栄台地には、大野Ⅰ・Ⅱ遺跡(10)があり、大洞Ｂ式～大洞Ｃ１式の、浅鉢形土器、壺形土器、注口土器、土偶、亀形土製品などが出土している。米代川左岸の柏所貝塚(29)は、浅内台地の北縁部に立地する遺跡で、秋田県教育委員会と能代市教育委員会の三次に渉る調査の結果、コダマガイ、ベンケイガイ、」サルボウを主体とする貝塚であるとともに、墓域の存在が明らかになった。墓域で確認された土壙墓は７基で、１基で合葬があり、計８体の人骨が屈葬した状態で確認されている。土壙墓は長径1.0～1.4m、短径0.5m前後の楕円形を呈し、重複が認められ、８体の人骨のうち、２体は成人男性、１体は胎児または新生児、１体は成人女性であり、抜歯の確認できたものもある。遺物には土器、石器のほか多数の骨角器や貝性腕輪が存在する。晩期の葬送儀礼や風習を知り得る貴重な遺跡である。

弥生時代の遺跡としては、東雲台地に重兵衛台遺跡、金ヶ沢Ⅰ遺跡、杉沢野遺跡などがあり、米代川左岸の浅内台地や成合台地では赤ハゲ遺跡、寒川Ⅰ遺跡、向山遺跡などがあるが、いずれも遺物を確認したのみで、この時代の詳しい様相については不明である。成合台地の北端に位置する寒川Ⅱ遺跡では、６基の楕円形の土壙墓から、副葬品としての江別Ｃ２式、Ｄ式の土器が出土し、そのほか鉄斧や黒曜石製の掻器も確認されている。これら出土遺物などから、続縄文時代には本州北部が北海道南部と同一の文化領域に包括されるという見解が示された。

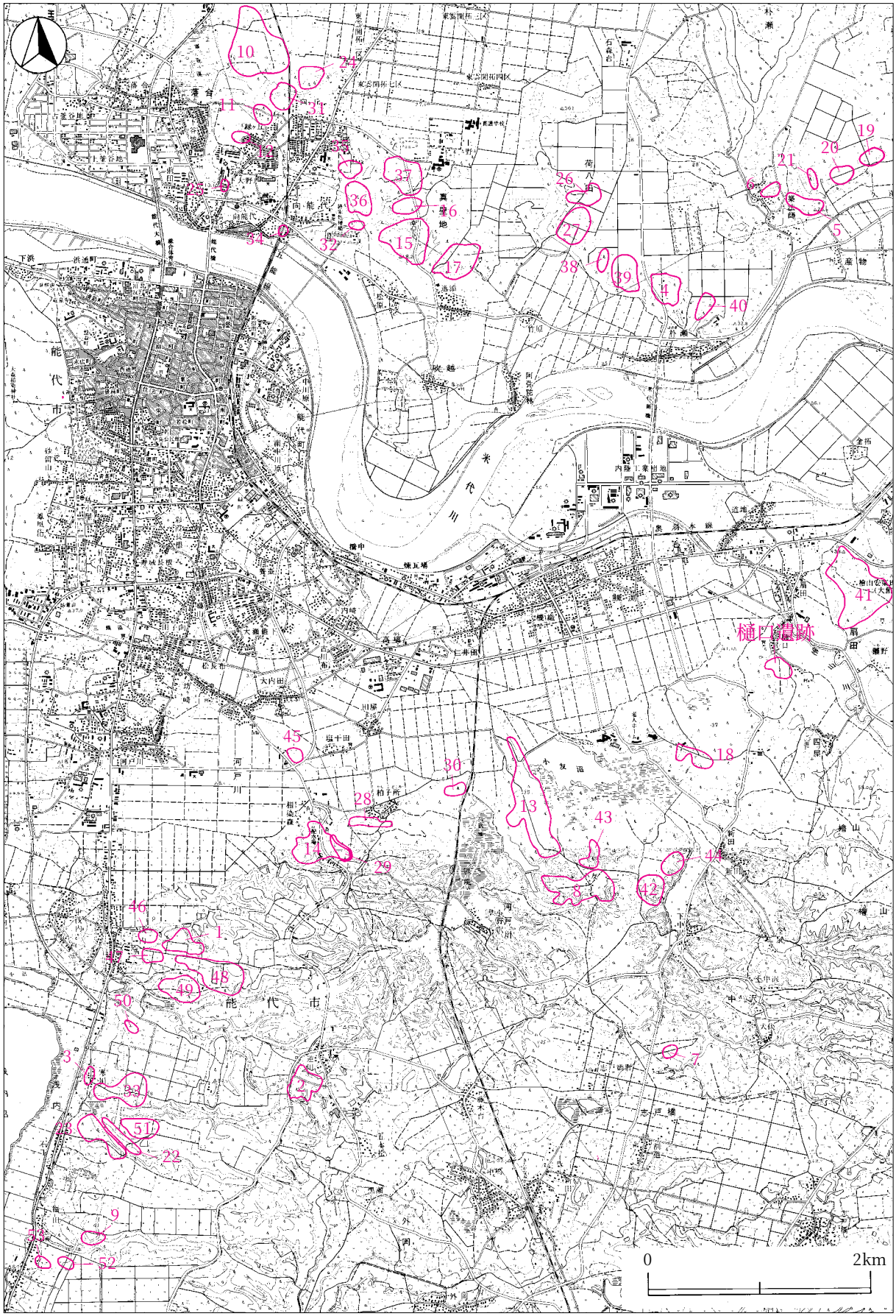
古代には、米代川両岸に多くの遺跡が存在する。樋口遺跡の周辺では、大館跡(41)がある。遺跡は、樋口遺跡からわずか１ｋｍ北東の、標高40mほどの台地上に立地している。従来から『日本三代実録』見られる「野代営」の擬定地とされてきたが、能代市教育委員会による昭和46年からの六次に渉る発掘調査の結果、竪穴住居跡33軒、掘立柱建物跡４棟などが確認され、出土した遺物や火山灰との関係からこれら遺構群は、９世紀後半に位置付けられている。昭和55年には国指定史跡となっている。樋口遺跡から南西６kmほどの成合台地の北端には、上ノ山Ⅱ遺跡(48)とムサ岱遺跡(49)がある。上ノ山Ⅱ遺跡は、昭和58年から３次に渉る調査が行われ、竪穴住居跡53軒、掘立柱建物跡19棟土坑155基、土師器焼成遺構３基、焼土遺構37基、溝跡32基などの遺構が確認されていて、およそ10世紀代の年代が与えられている。上ノ山Ⅱ遺跡から小沢を挟んで西側に位置するムサ岱遺跡も、ほぼ同時代の遺跡で、平成14年に行われた発掘調査では、竪穴住居跡62軒、掘立柱建物跡９棟、竪穴状遺構10基、土坑308基、柵列・柱列39条、溝跡27条などが検出された。また、この両遺跡から2.2km南西の浅内台地にある福田遺跡では、溝で区画された集落跡があり、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、竪穴状遺構などで構成され、９世紀～10世紀前半の年代が与えられている。こうした集落遺跡とは別に、ムサ岱遺跡から1.5kmの南西の浅内台地には、生産遺跡である十二林遺跡がある。昭和62年の発掘調査により土器焼成遺構14基、製鉄炉２基、須恵器窯跡１基、炭窯１基などが確認され、10世紀後葉～11世紀前葉に位置付けられている。

中世では、米代川流域に、城館跡も含めておよそ45遺跡が確認されているが、中でも出色は檜山城跡である。昭和55・61年の調査により、12面の曲輪が確認されたほか数々の陶磁器が出土している。昭和55年には、周辺の茶臼館跡、国清寺跡、大館跡とともに檜山安東氏城館跡として、国指定史跡になっている。

樋口遺跡周辺の遺跡を概観したが、各時代の遺跡は、米代川の右岸の東雲台地や、左岸の浅内・成合の各台地を中心として確認されている。概観しただけでは、樋口遺跡と直接関わりのある遺跡などを見いだすことはできないが、大館跡も含めた周辺の悉皆調査などによっては、今後樋口遺跡と関連のある遺跡や、周辺の古代の様相が見えてくるものと思われる。

第１表　周辺遺跡一覧

挿図番号	遺跡名	遺跡地図番号	参考文献	発行	年月日
1	此掛沢Ⅱ	2-147	秋田県文化財調査報告書　第114集	県教委	1984.03
2	逆川	2-179			
	館下Ⅰ	2-66	秋田県文化財調査報告書　第62集		1979.03
	鴨子台	23-18	秋田県文化財調査報告書　第230集		1992.11
3	寒川Ⅰ	2-152	秋田県文化財調査報告書　第167集		1988.03
	杉沢台	2-23	秋田県文化財調査報告書　第83集		1981.03
4	八森坂Ⅰ・Ⅱ	2-53・54	秋田県文化財調査報告書　第37集		1976.03
5	古館Ⅰ	2-60	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
6	館下Ⅱ	2-61			
7	蟻ノ台Ⅰ	2-119	秋田県文化財調査報告書　第45集	県教委	1977.03
8	小友Ⅰ	2-129	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
9	福田	2-159	秋田県文化財調査報告書　第78集	県教委	1989.03
10	落合上大野Ⅱ	2-32	秋田県史－考古編－	市教委	1960.01
11	中大野Ⅰ	2-34	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
12	中大野Ⅱ	2-35			
13	腹鞍ノ沢	2-135	秋田県文化財調査報告書　第94集	県教委	1982.03
14	相染森	2-143	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
15	真壁地Ⅰ	2-44	秋田県文化財調査報告書　第102集	県教委	1983.03
16	真壁地Ⅱ	2-45			
17	四郎兵衛堤	2-46	秋田県文化財調査報告書　第79集		1981.03
	小揚場	2-176	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
18	新田沢	2-171			
19	大内坂Ⅰ	2-62	秋田県文化財調査報告書　第51集	県教委	1978.03
20	大内坂Ⅱ	2-63			
21	大内坂Ⅲ	2-64			
22	蟹子沢	2-156	秋田県文化財調査報告書　第78集		1989.03
23	石丁	2-157			
24	上大野台	2-186	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
25	下大野Ⅰ	2-36			
26	大野Ⅰ	2-49			
27	大野Ⅱ	2-50			
28	柏子所	2-140	秋田県文化財調査報告書　第8集	県教委	1966.03
29	柏子所貝塚	2-141		市教委	
30	柏子所Ⅱ	2-198	秋田県文化財調査報告書　第398集	県教委	2005.03
31	中大野Ⅲ	2-170	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
32	金山館	2-42			
	真壁地Ⅰ	2-44	秋田県文化財調査報告書　第102集	県教委	1983.03
	真壁地Ⅱ	2-45			
	大内坂Ⅱ	2-63	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
	向山	2-162	秋田県文化財調査報告書　第103集	県教委	1983.03
33	寒川Ⅱ	2-153	秋田県文化財調査報告書　第167集		1988.03
34	平影野	2-39	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
35	トドメキⅠ	2-40			
36	トドメキⅡ	2-41			
37	上野	2-43	秋田県文化財調査報告書　第79集	県教委	1981.03
38	宇藤台Ⅰ	2-51	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
39	宇藤台Ⅱ	2-52			
40	中台	2-55	秋田県文化財調査報告書　第50集	県教委	1978.03
41	大館	2-103	大館遺跡発掘調査報告書	市教委	1978.03
42	小友Ⅳ	2-132	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
43	小友Ⅴ	2-133			
44	小友Ⅵ	2-134			
45	塩干田	2-139			
46	此掛沢Ⅰ	2-147	秋田県文化財調査報告書　第93集	県教委	1982.03
47	上ノ山Ⅰ	2-148			
48	上ノ山Ⅱ	2-148	秋田県文化財調査報告書　第397集		2005.03
49	ムサ岱	2-149	秋田県文化財調査報告書　第396集		2005.03
50	清水上	2-151	秋田県文化財調査報告書　第103集		1983.03
51	十二林	2-155	秋田県文化財調査報告書　第178集		1989.03
52	頭無上Ⅰ	2-160	能代市史－資料編考古－	能代市	1995.03
53	頭無上Ⅱ	2-161			



第4図　樋口遺跡周辺の遺跡

第3章　発掘調査の概要

第1節　遺跡の概観

調査区は、志戸橋野台地北端に発達した開析谷の左岸、斜面地から低地までの1,500㎡である。北側の斜面の標高は17～14mで、調査前の現況はほとんどが雑草・雑木の繁茂する荒地だったが、谷の上流にあたる北西端は農業用貯水池の一部であった。上流に貯水池が設けられていることからもわかるとおり、遺跡のある開析谷は常に湧水が多く、調査区も表層地層が未凝固～半凝固堆積物であるために常にぬかるむ状態であった。

遺構は調査区の北側の緩斜面で検出された。農業用水路を境として南側の低地は、水田耕作により撹乱されており、遺構は検出されないと判断されたため、遺物を回収するのみに留めた。特にＬＯ～ＭＢ50～52グリッドの範囲は本来斜面地であったと推定されるが、水田整備のために大きく削平されている。

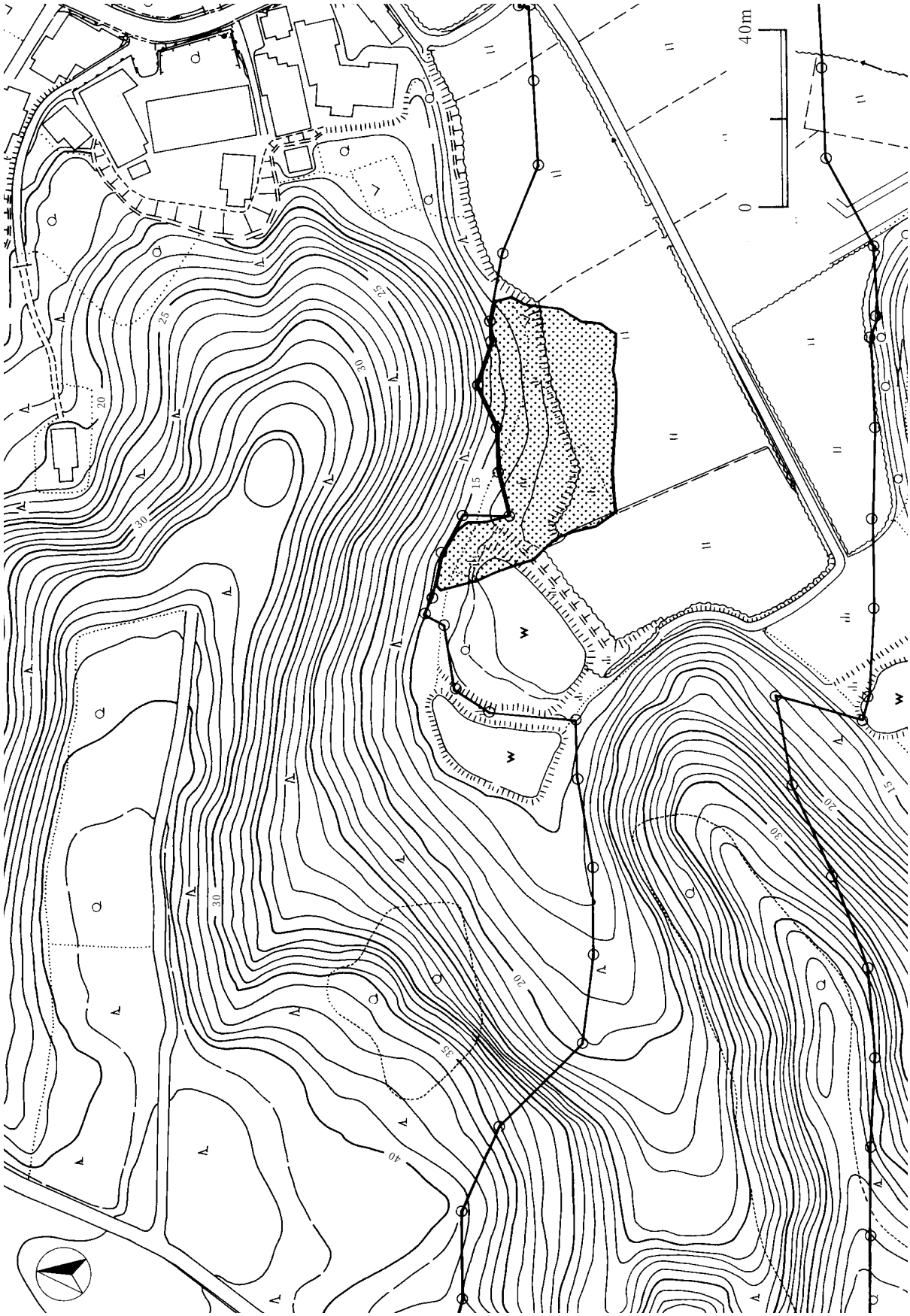
第2節　調査の方法

調査では、確認調査の成果に基づき表土と耕作土の上層を重機によって除去し、その後にグリッド杭を打設した。グリッド杭は工事用中心杭No.50を起点とし、南北方向と直交する東西方向を基準軸として４m×４mのグリッドを設定した。起点の杭をMA50とし、グリッド杭には東から西に向かって…・ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・ＭＣ・…というアルファベットと、南から北に向かって…・48・49・50・51・52・…の二桁の数字を組み合わせた記号を記入し、グリッドの呼称は南東隅(例：ＭＡ50）の記号を用いた。また、遺物取り上げのために、グリッドを４分割して２m×２mの小グリッドを設定し、各グリッドの北東に位置する小グリッドをNE、北西をNW、南東をSE、南西をSWとして、「MA50-NE」のようにグリッド名と併記することで小グリッドの呼称とした。調査対象全域にグリッドを設定することにより、計画的な調査と同時に遺構の平面的な位置の把握に努めた。

遺物の取り上げについては、近年に撹乱を受けた層であると判断されたⅠ～Ⅲ層の遺構外出土遺物には出土したグリッド・層位・出土年月日を、Ⅳ層以下の遺構外出土遺物については出土した小グリッド・層位・出土年月日を、遺構内遺物には出土遺構名・遺構内層位・出土年月日をラベルに記入し、それぞれポリ袋に入れて取り上げたが、捨て場については、遺構名に小グリッドを併記して取り上げている。さらに、出土状況・遺物の内容によっては微細図もしくはドット図を作成し、取り上げ番号を記して取り上げた場合もある。

遺構は検出順に略記号と01からの通し番号によった。遺構は基本的には２分法、４分法を用いて精査を行い、平面図及び土層断面図は20分の１で作成した。

記録用の写真は、35㎜判を使用し、フィルムはモノクロ、リバーサルを併用して撮影し、必要に応じてネガカラーフィルムによる撮影も行った。また調査終了時には、委託による空中写真撮影を行い、撮影成果は35㎜判のリバーサル、６×６判のリバーサルフィルムで保管している。



第5図　遺跡周辺の地形

第３節　調査の経過

発掘調査の経過は次の通りである。

５月12日　重機による表土除去開始。
13日　重機による表土除去作業終了。
20日　調査初日。作業員への作業手順の説明、発掘調査機材の搬入、環境整備を行う。
21日　調査区北西側から遺構検出作業開始。午後に作業員の健康診断を行う。
22日　基本土層ＡＢ観察用トレンチ掘削・精査を開始。ベルトコンベア設置。
23日　ＳＫ01検出。基本土層ＡＢの観察から、Ⅰ～Ⅲ層は近年に攪乱を受けた層と判断。
26日　ベルトコンベア配線作業、起動試験。基本土層の写真撮影と図面作成を開始。
27日　ＳＫ04・ＳＫ05検出。
29日　基本土層ＡＢの観察から、土師器・木製品を大量に含むⅧ層を確認。
30日　基本土層ＣＤ観察用トレンチ掘削・精査を開始。
６月４日　ＳＫ06検出。
５日　基本土層ＡＢの観察から、低地は水田耕作の際に攪乱を受けており遺構はないことが判明。
９日　基本土層ＡＢ・ＣＤ土層図作成終了。
12日　ＳＥ08検出。
24日　Ⅷ層の堆積範囲をＳＴ20として検出作業を開始。
７月２日　ＳＴ27内に遺物集中地域を検出。
３日　ＳＴ27に隣接して、ＳＸ30を検出。
７日　ＳＤ22検出。
16日　ＳＴ20ＡＢ・ＣＤ・ＥＦ・ＧＨラインの土層精査。
22日　Ⅷ層の下位に火山灰の分布を確認。
29日　ＳＡ29・ＳＫ29確認。ＳＴ27の土層ＥＦより、テフラ分析試料採取。
８月４日　ＳＡ31検出。
６日　空中撮影。
７日　空中撮影。
８日　調査最終日。ＳＴ27範囲図を作成し精査終了。発掘調査機材の搬出等撤収作業を行う。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、平成15年８月から主に遺物の洗浄と注記作業を行い、これと平行して年代測定、テフラ分析、樹種同定の試料の抽出をし、それぞれ委託に付した。また、第一原図のチェックや写真データの整理も行った。平成16年には、遺物の分類→接合・復元→遺物実測図作成、第二原図作成と原稿執筆を行い、同時に木製品の保存処理を委託した。平成17年には、遺物実測図・第二原図のトレース、原稿執筆、遺物写真撮影を経て、12月からは報告書の編集作業に取りかかり、３月に報告書が完成した。

第４章　調査の記録

第１節　基本層序

土層の観察は、土層観察用のトレンチを２箇所に等高線に直交する方向で設定して行い、結果、ＡＢ・ＣＤを通して地山も含めて10層に分層した。

Ⅰ層は表土である。植物根が多く入った黒褐色土で、層厚は約30cmである。山際では粒子が粗く、部分的に斜面上方からの崩落した地山ブロックが堆積している部分もある。

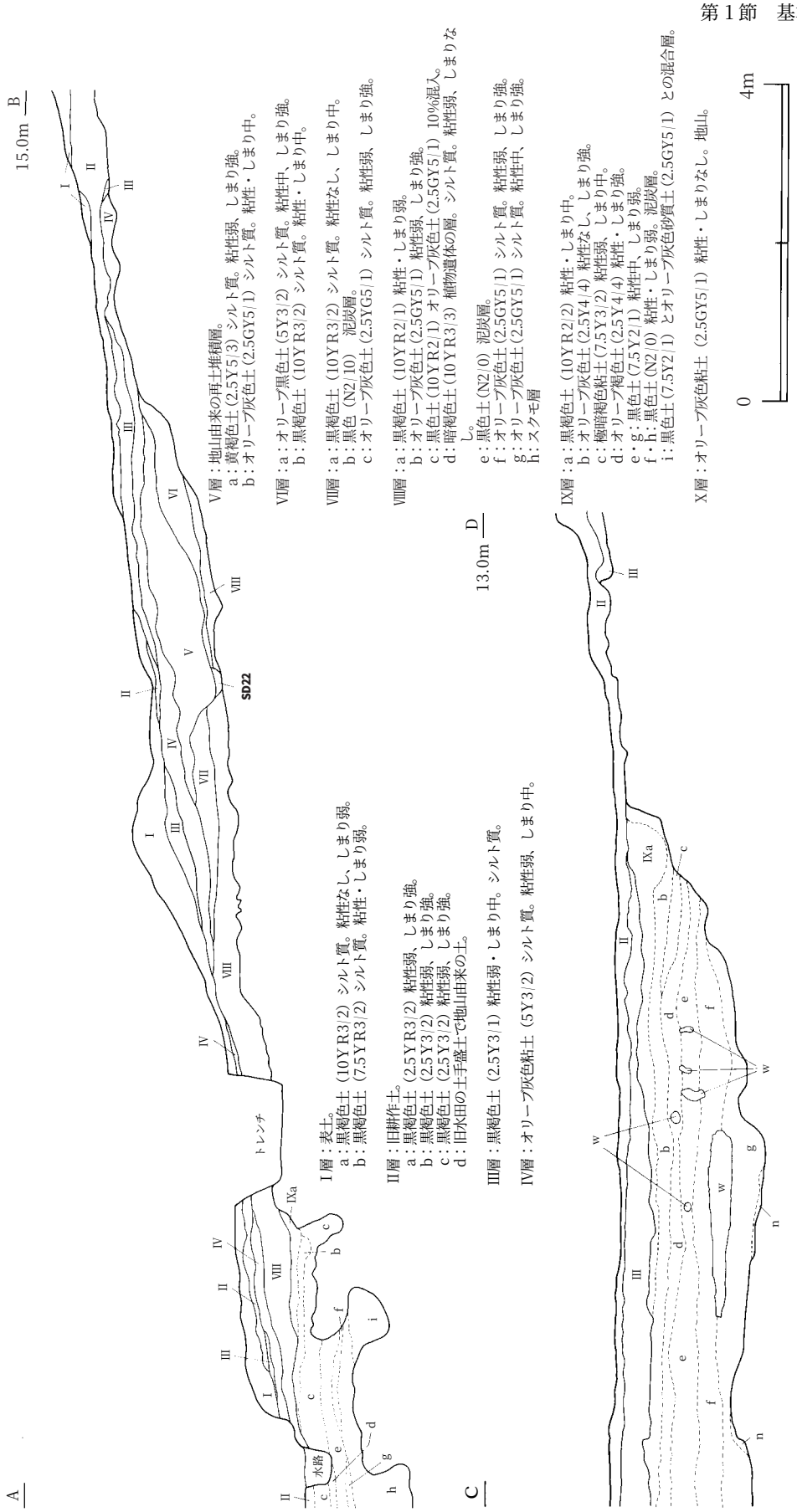
Ⅱ層は、斜面地で水田耕作が行われていた際の耕作土である。地山ブロックを含んだ黒褐色土で、層厚は約15cm未満である。地山ブロックを盛って土手を造っている部分も見られる。上位は耕作土の下部の層で、水田耕作の際に持ち込まれた客土であろう。少量の炭化物以外に混入物が見られない黒褐色土で、層厚は約15cmである。低地には植物遺体の層が耕作により撹乱された、オリーブ黒色土が見られ、層厚は約15cmで、遺物を含んでいる。ＬＱ54グリッド付近のⅠ～Ⅲ層から現代の陶磁器が多量に出土している。

Ⅳ～Ⅵ層は地山に由来する土によって人為的に埋め立てられた層である。地山の色調は黄褐色土であるが、埋め立てられた後に湧水によってグライ化してオリーブ灰色に変色している部分もあり、層厚は各々約20cmだが、Ⅴ層は最大で60cmに及ぶ部分もある。埋め立ての際に混入した遺物が多量に出土しており、植物遺体の混入も見られることから、Ⅶ・Ⅷ層の堆積範囲を含むＬＯ～ＭＢ50～52グリッドを削平した土によって埋め戻されていることが想定される。

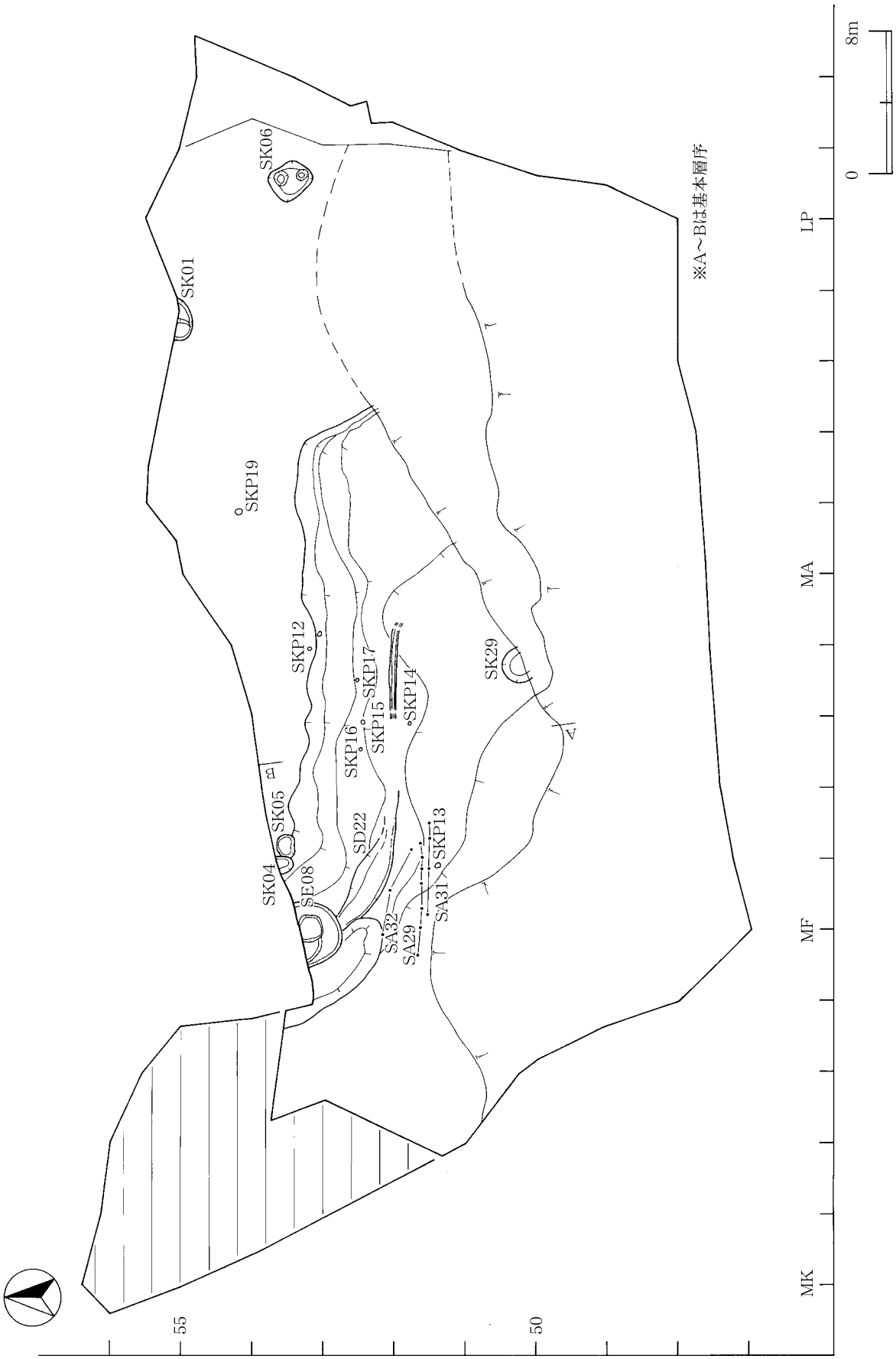
Ⅶ層も人為的に埋め立てられた層である。黒褐色土とオリーブ灰色にグライ化した地山土が主体であり、層厚は20cmほどである。上面で柱穴様ピットが検出され、ＭＡ～ＭＥ49・50グリッドではⅦ層上面で炭化物と遺物が多量に出土しており、生活面があったと考えられるが、Ⅳ～Ⅵ層埋め立ての際に撹乱されており、分層が困難な箇所も多かった。

Ⅷ層は植物遺体を主体とし、土師器・須恵器・木製品・削り屑を多量に含む遺物包含層で、ＳＴ20の堆積土である。黒褐色の植物遺体とオリーブ灰色にグライ化した地山土が互層をなしており、層厚は約30cmである。下位に白頭山苫小牧火山灰のブロックを含んでおり、火山灰より下位では遺物が出土しなくなる。植物遺体が原型を留めて残っていること、Ⅷ層で水辺を好む水生植物の種実が出土していることから、Ⅷ層堆積範囲が沼沢の水辺であったことが分かる。

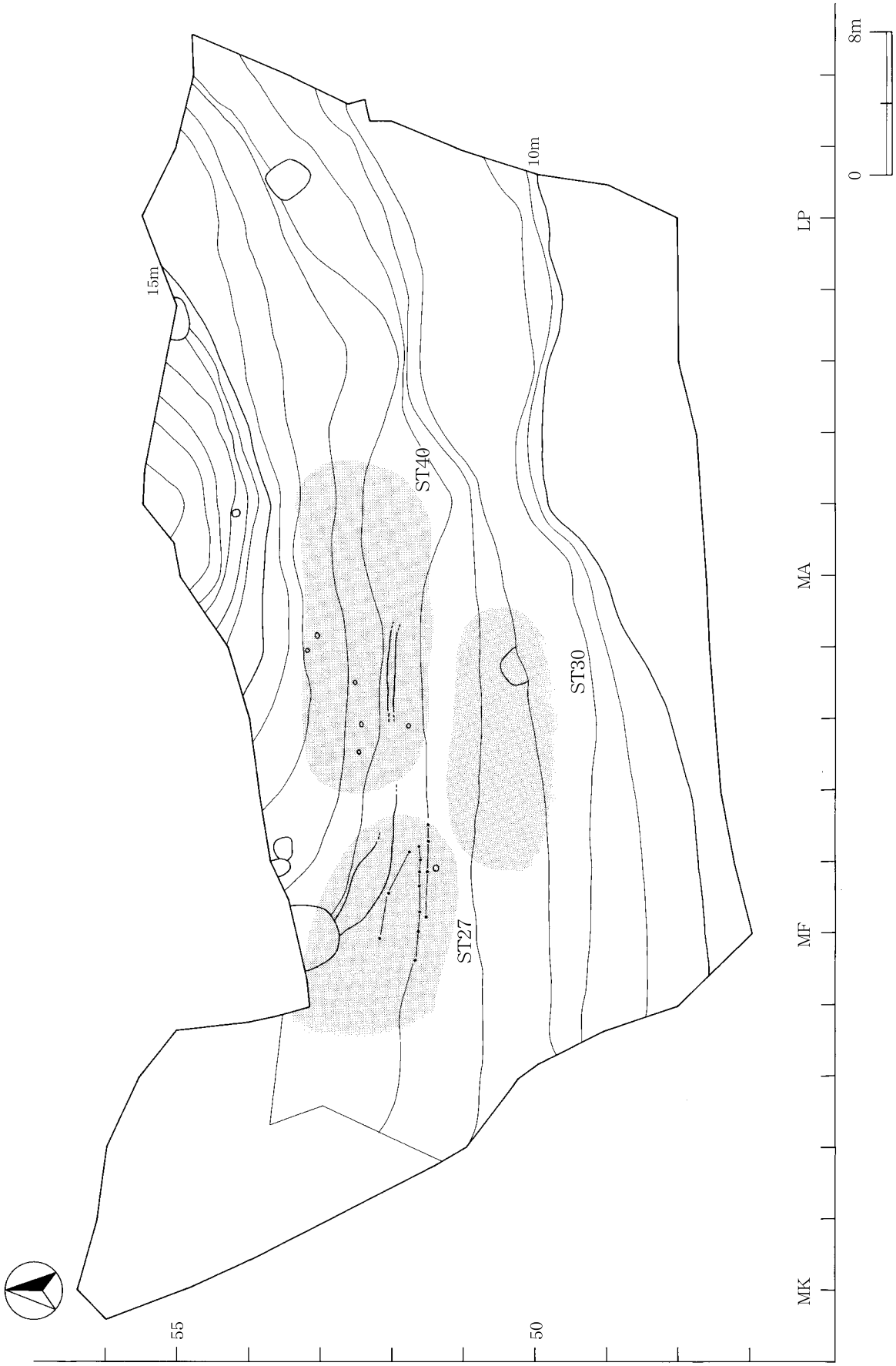
Ⅸ層は植物遺体を主体とし、低地に自然堆積した層である。植物遺体の含有量により色調に若干差はあるが、主に黒褐色～オリーブ褐色の砂質土層で、層厚は20～150cmである。遺物は全く出土しない。Ⅹ層は地山である。標高が高い部分では黄褐色の砂質シルトだが、低い部分では灰色にグライ化した砂を主体とし、径１～５cmの礫を多量に含んでいる。非常に軟弱で、湧水がはげしく崩落しやすい。


A
B
15.0m
C
D
13.0m
SD22
トレンチ
水路
I 層：表土。
a：黒褐色土（10YR3/2）シルト質。粘性なし、しまり弱。
b：黒褐色土（7.5YR3/2）シルト質。粘性・しまり弱。
II 層：旧耕作土。
a：黒褐色土（2.5YR3/2）粘性弱、しまり強。
b：黒褐色土（2.5Y3/2）粘性弱、しまり強。
c：黒褐色土（2.5Y3/2）粘性弱、しまり強。
d：旧水田の土手盛土で地山由来の土。
III 層：黒褐色土（2.5Y3/1）粘性弱・しまり中。シルト質。
IV 層：オリーブ灰色粘土（5Y3/2）シルト質。粘性弱、しまり中。
V 層：地山由来の再土推積層。
a：黄褐色土（2.5Y5/3）シルト質。粘性弱、しまり強。
b：オリーブ灰色土（2.5GY5/1）シルト質。粘性・しまり中。
VI 層：a：オリーブ黒色土（5Y3/2）シルト質。粘性中、しまり強。
b：黒褐色土（10YR3/2）シルト質。粘性・しまり中。
VII 層：a：黒褐色土（10YR3/2）シルト質。粘性なし、しまり中。
b：黒色（N2/10）泥炭層。
c：オリーブ灰色土（2.5YG5/1）シルト質。粘性弱、しまり強。
VIII 層：a：黒褐色土（10YR2/1）粘性・しまり弱。
b：オリーブ灰色土（2.5GY5/1）粘性弱、しまり強。
c：黒色土（10YR2/1）オリーブ灰色土（2.5GY5/1）10%混入。
d：暗褐色土（10YR3/3）植物遺体の層。シルト質。粘性弱、しまりなし。
e：黒色（N2/0）泥炭層。
f：オリーブ灰色土（2.5GY5/1）シルト質。粘性弱、しまり強。
g：オリーブ灰色土（2.5GY5/1）シルト質。粘性中、しまり強。
h：スクモ層
IX 層：a：黒褐色土（10YR2/2）粘性・しまり中。
b：オリーブ灰色土（2.5Y4/4）粘性なし、しまり強。
c：極暗褐色粘土（7.5Y3/2）粘性弱、しまり中。
d：オリーブ褐色土（2.5Y4/4）粘性・しまり強。
e：g：黒色土（7.5Y2/1）粘性中、しまり弱。
f：h：黒色土（N2/0）粘性・しまり弱。泥炭層。
i：黒色土（7.5Y2/1）とオリーブ灰色砂質土（2.5GY5/1）との混合層。
X 層：オリーブ灰色粘土（2.5GY5/1）粘性・しまりなし。地山。
0
4m

第6図　基本層序


SK06
SK01
SKP19
SKP12
SK05
SK04
SE08
SD22
SKP16
SKP15
SKP17
SKP14
SA32
SA29
SA31
SKP13
SK29
A
B
※A～Bは基本層序
LP
MA
MF
MK
55
50
0
8m

第7図　遺構配置図



第8図　捨て場の位置と広がり

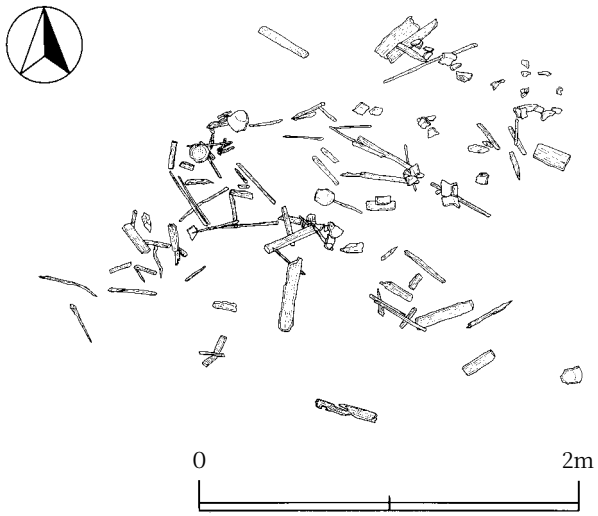
第２節　検出遺構と出土遺物

調査で検出された遺構は、捨て場３、井戸跡１、樋跡１、土坑５、杭列３、柱穴様ピット７の合計20基である。これらの遺構は、調査区南側斜面のⅧｂ層で検出されている。Ⅷ層の下位から白頭山苫小牧火山灰が検出され、ほとんどがブロック状でⅧ層に混入しており、再堆積と考えられる。遺物や遺構はすべて火山灰より上位で検出されており、検出された遺構の時期は10世紀後半と判断される。

１　捨て場

ＳＴ27(第９～18図、図版２)

Ⅷｂ層面で遺物が集中する遺構である。調査段階では、遺物の集中するＭＥ51グリッド西北のおよそ４㎡ほどをその範囲として捉えていたが、遺物の出土状況から、ＭＥ～ＭＧ51･52グリッドの長径12m、短径８mほどの楕円形を描く範囲を、遺構範囲と判断した。



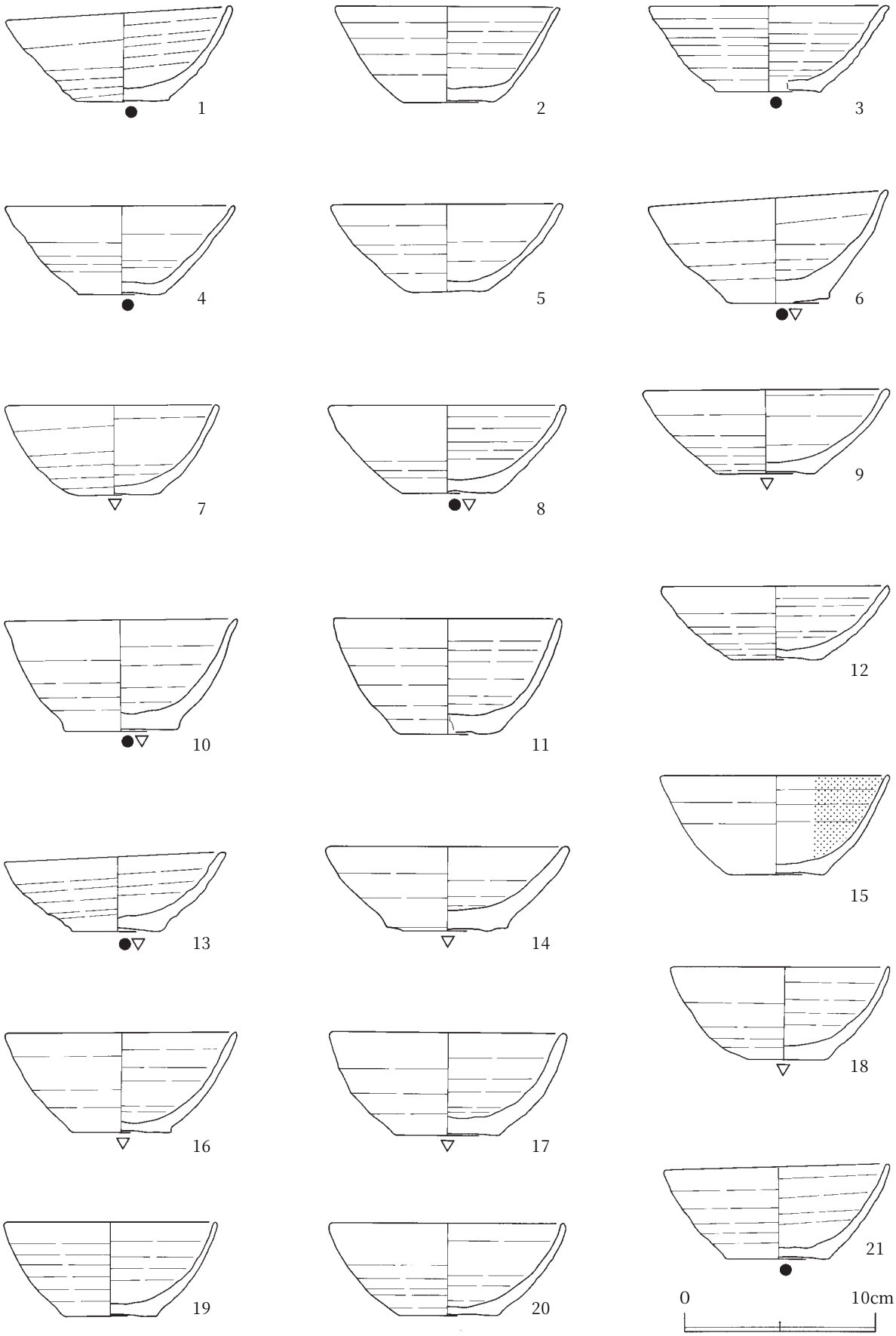
第9図　ＳＴ27捨て場

遺物には土師器の坏・甕、須恵器では甕があり、砥石のほかに、木製品として、斎串・ヤス状の木製品・箆状木製品・下駄・曲げ物・刀子・刀の鞘が出土している。

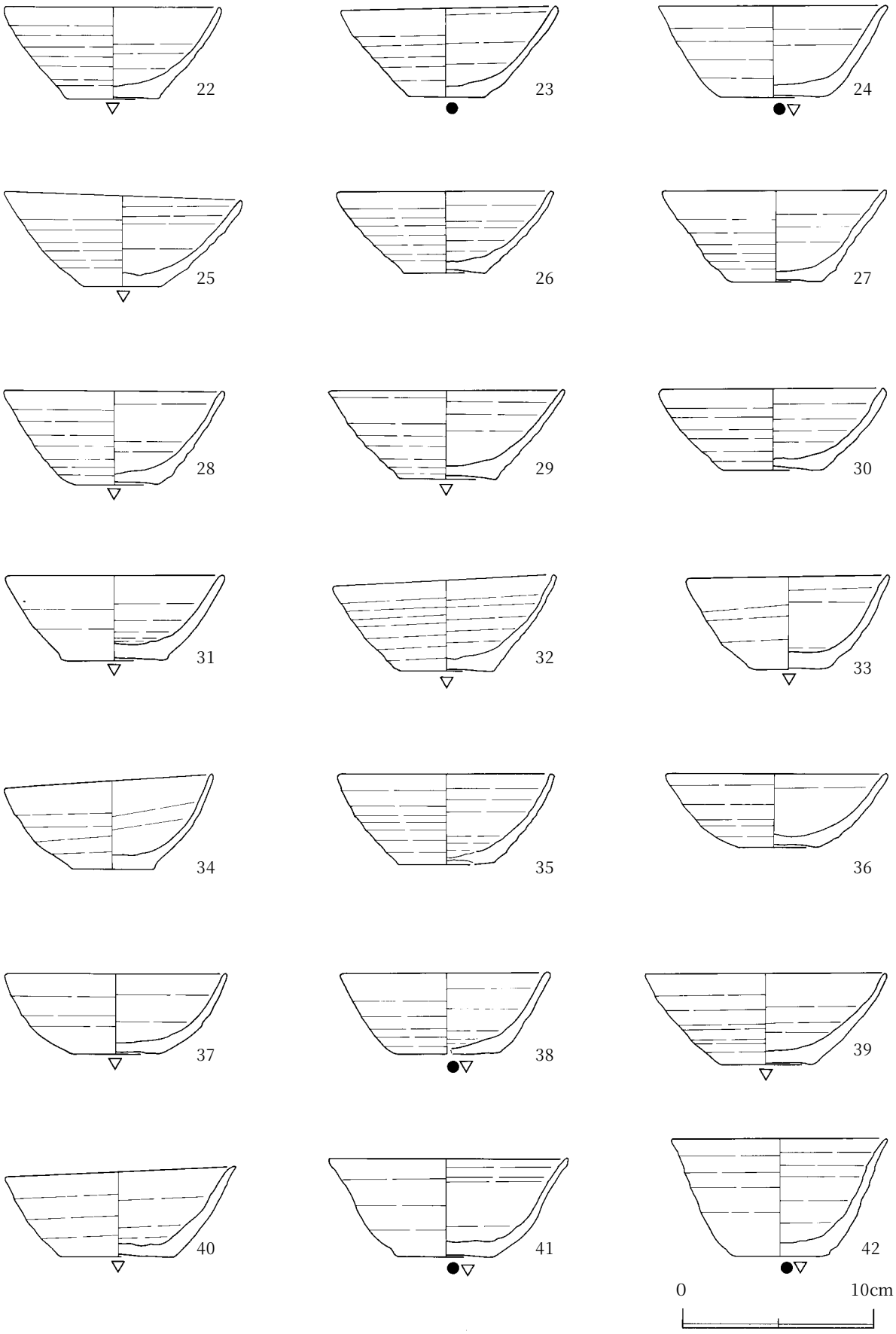
土師器の坏は56点あるが、このうち高台付き坏が６点で、墨書土器が３点である。坏には、意図的に口縁部が打ち欠かれたもの25点、油煙が付着するものが15点あり、このうちの１点は底部が穿孔されている。土師器甕うち、小形のものは口縁が直立ないしは外反し、57の体部破片には刻書された文字が見える。大形の甕は、口縁部が大きく外反し、63では輪積み痕が明瞭である。

斎串は25点あり、頭部を山形状に面取りし、先端部を削りだしたＡ類(1～19)と、頭部の下をわずかにすぼませて、その下と中央部分をささくれ立たせたＢ類(20～23)がある。このほか、両端を削り出した24と、一端を丸く削り出した棒状の25も斎串とした。斎串は材質は全てスギである。

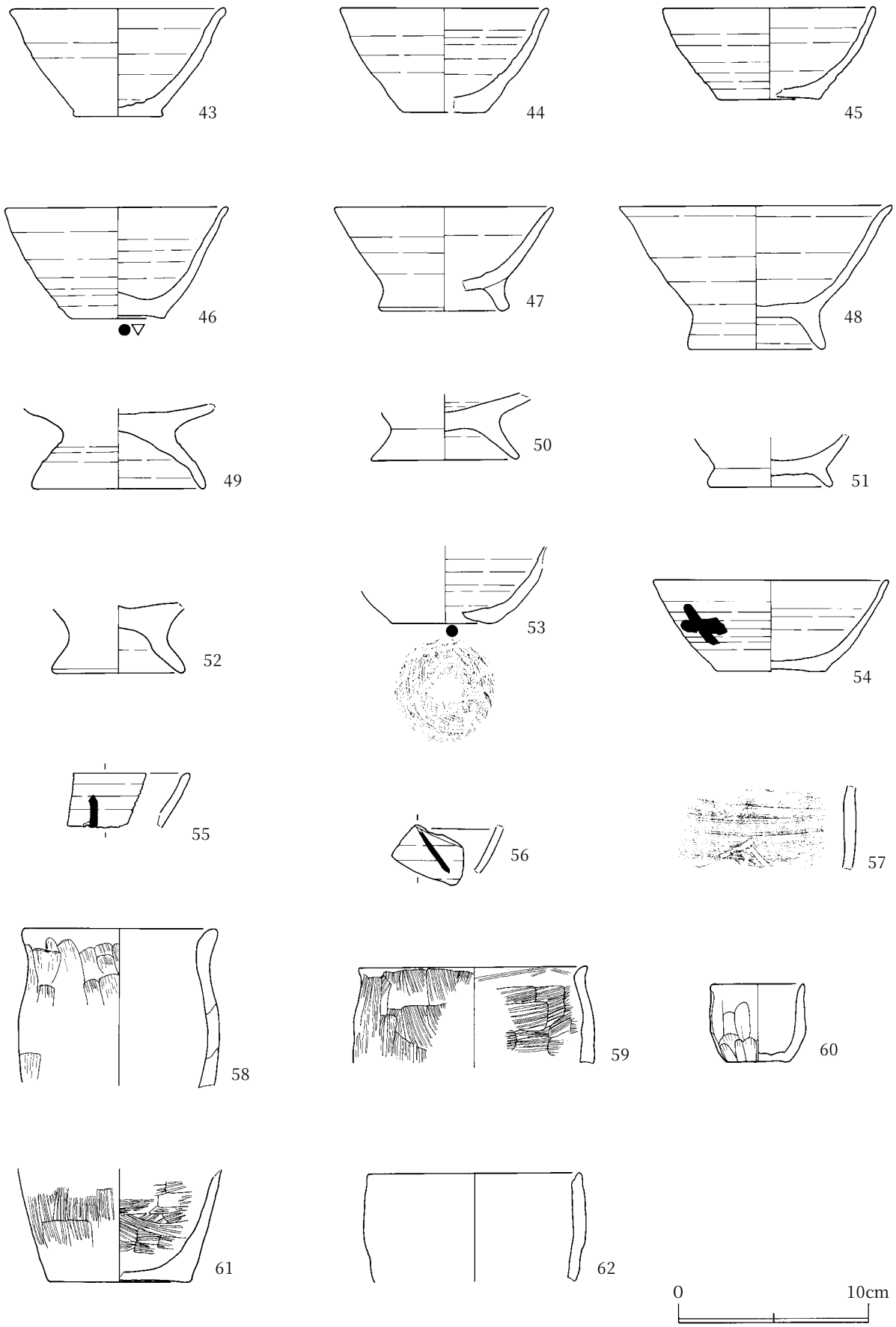
ヤス状の木製品26は、ミカン割りした材を丸く削り、基部を丁寧に面取りしているもので、材質はノリウツギである。箆状木製品27は板目材を、28は柾目材を使用していて、28は薄さから漆の付着は確認できないが、漆刷毛などの用途が考えられる。29の下駄はハリギリの一木作りで、30はスギの曲物である。31の刀子の柄の部分にはマツを使用し、粗く削り出した後に一端に溝を刻み、茎部分を装着したもので、刀子は本体の下部から茎にかけて残っていて、装着した状態で出土している。32の鞘はスギを利用した二枚合わせのもので、下端に４箇所の目釘穴があり、そのうちの一つには木製の目釘も残っている。



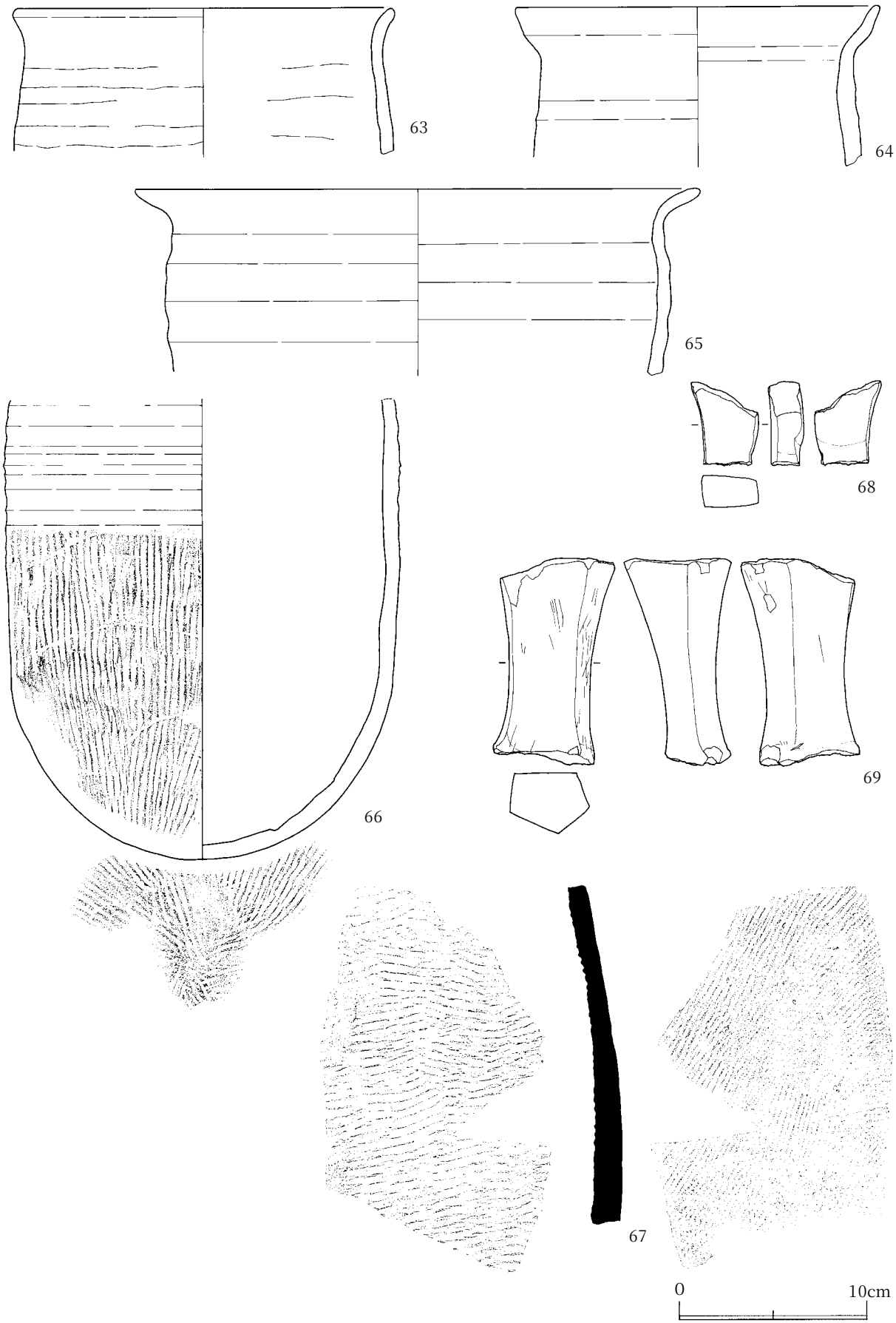
第10図　ＳＴ27出土遺物（１）



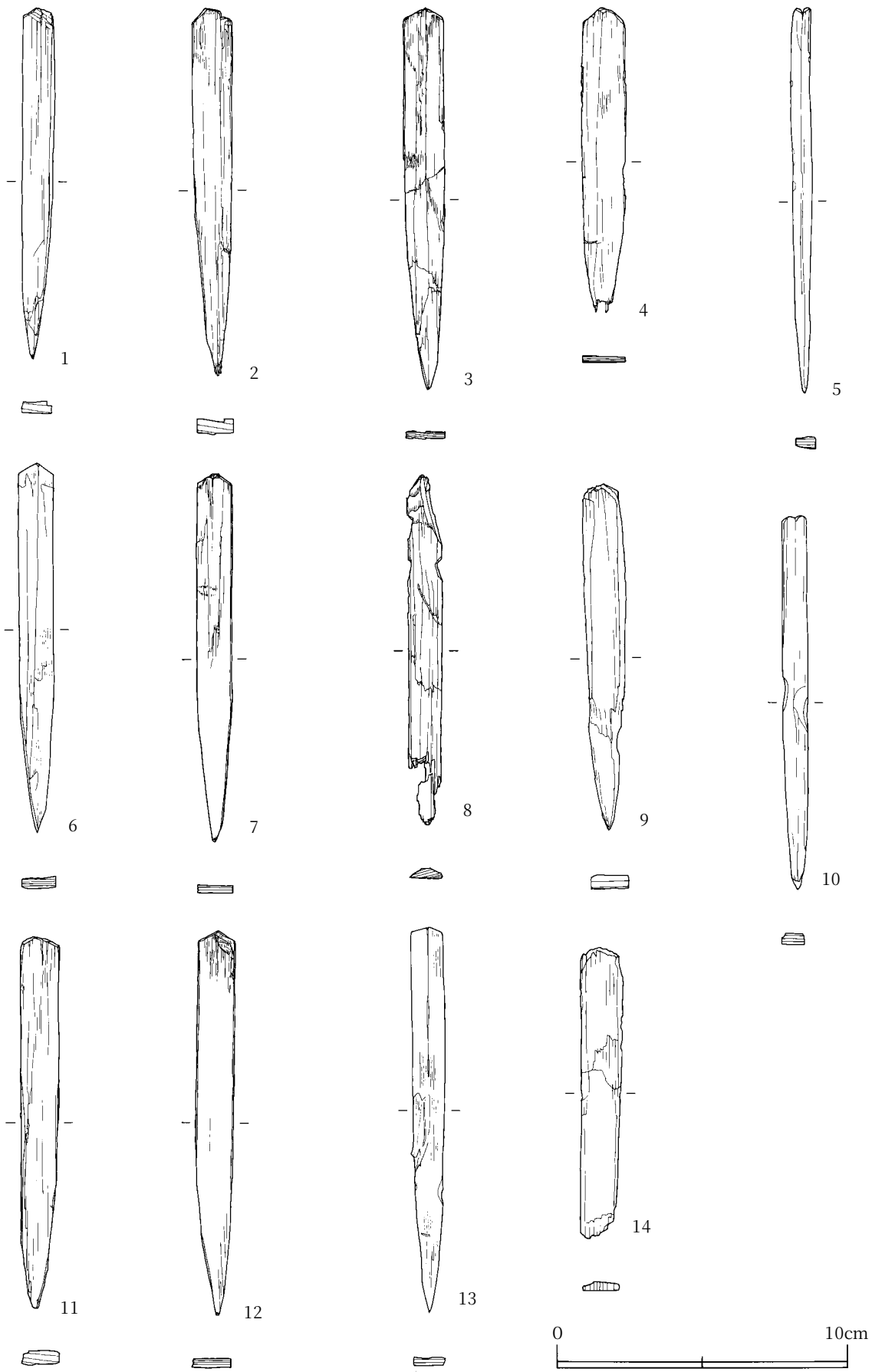
第11図　ＳＴ27出土遺物（２）



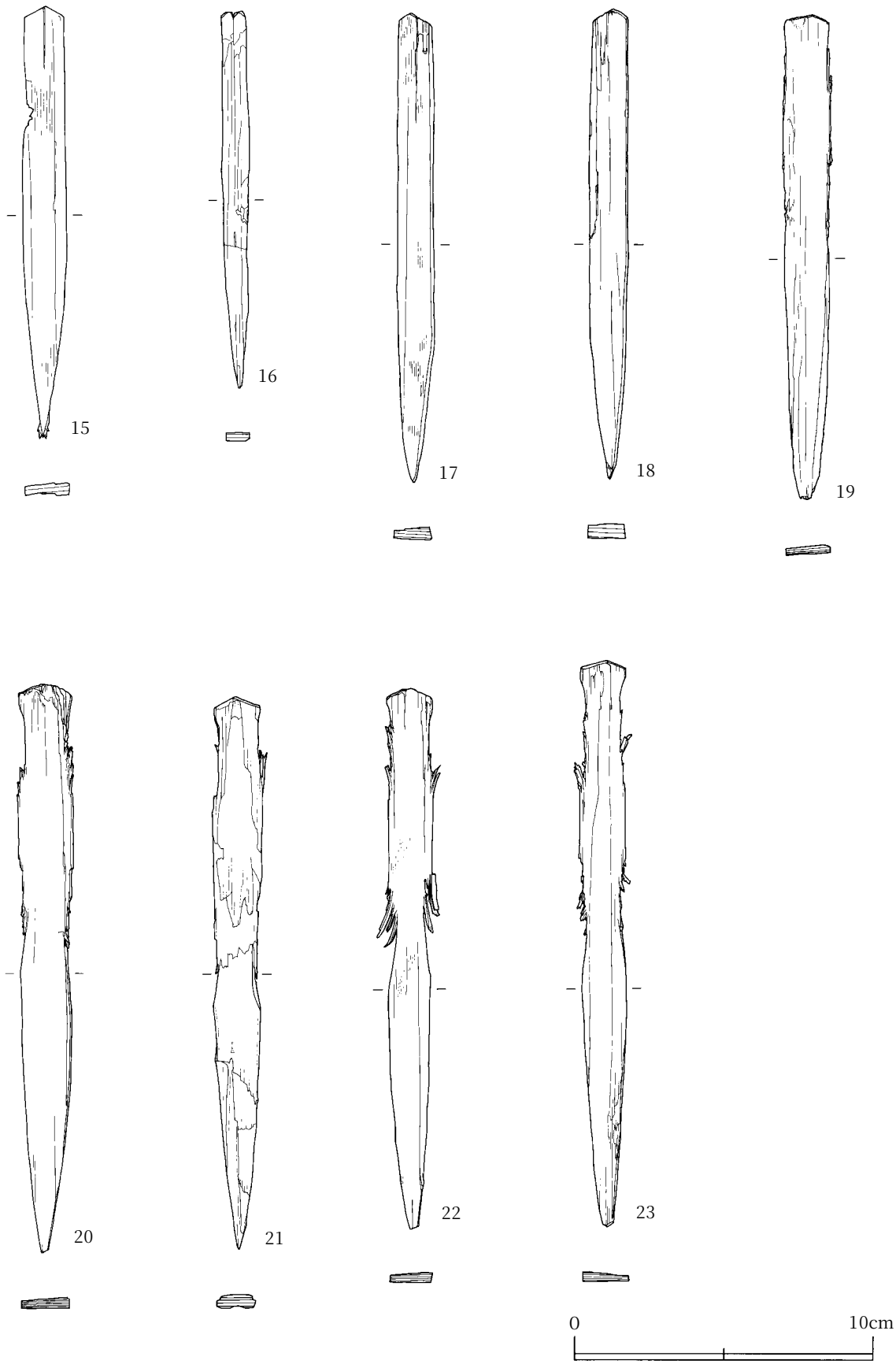
第12図　ＳＴ27出土遺物（３）



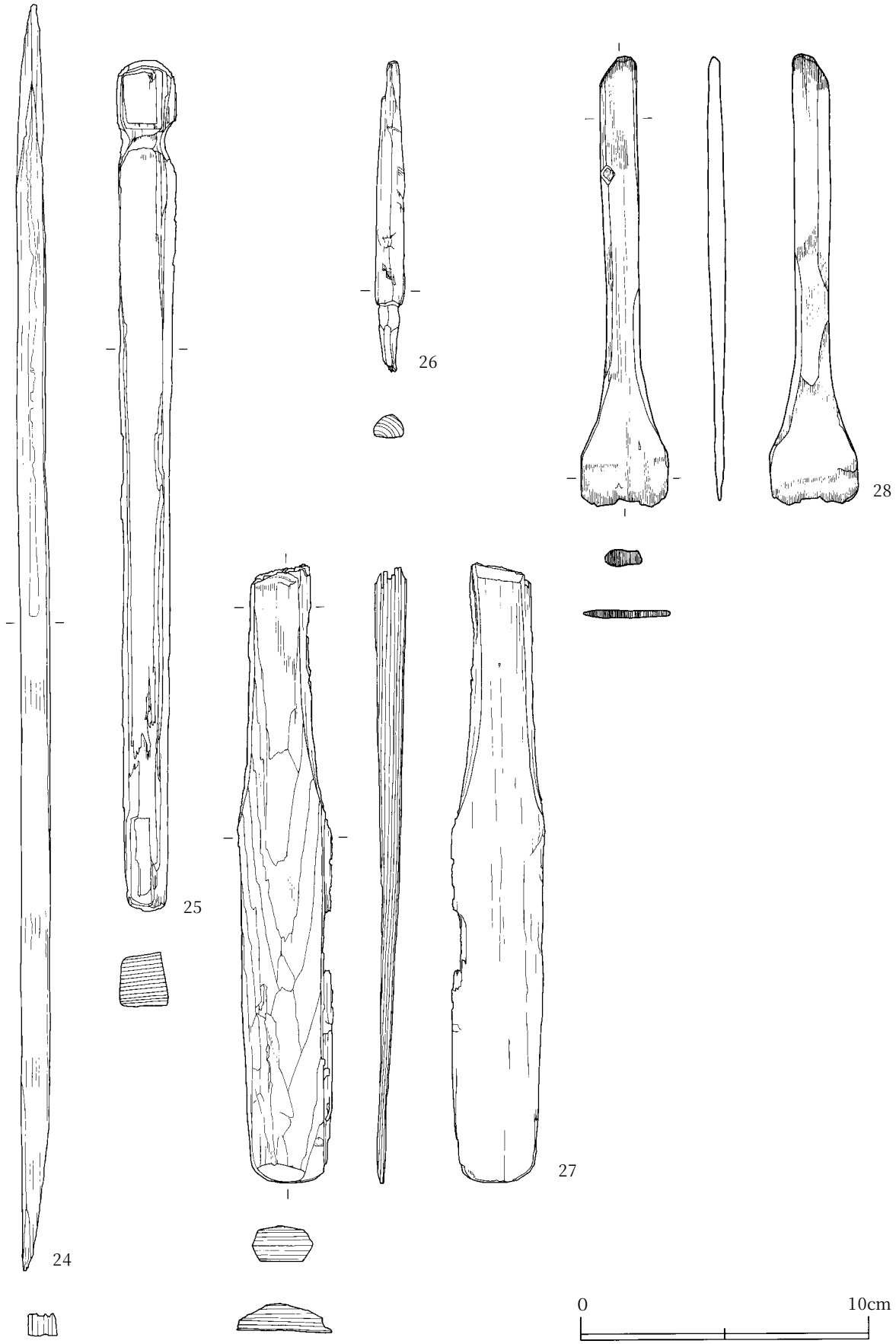
第13図　ＳＴ27出土遺物（４）



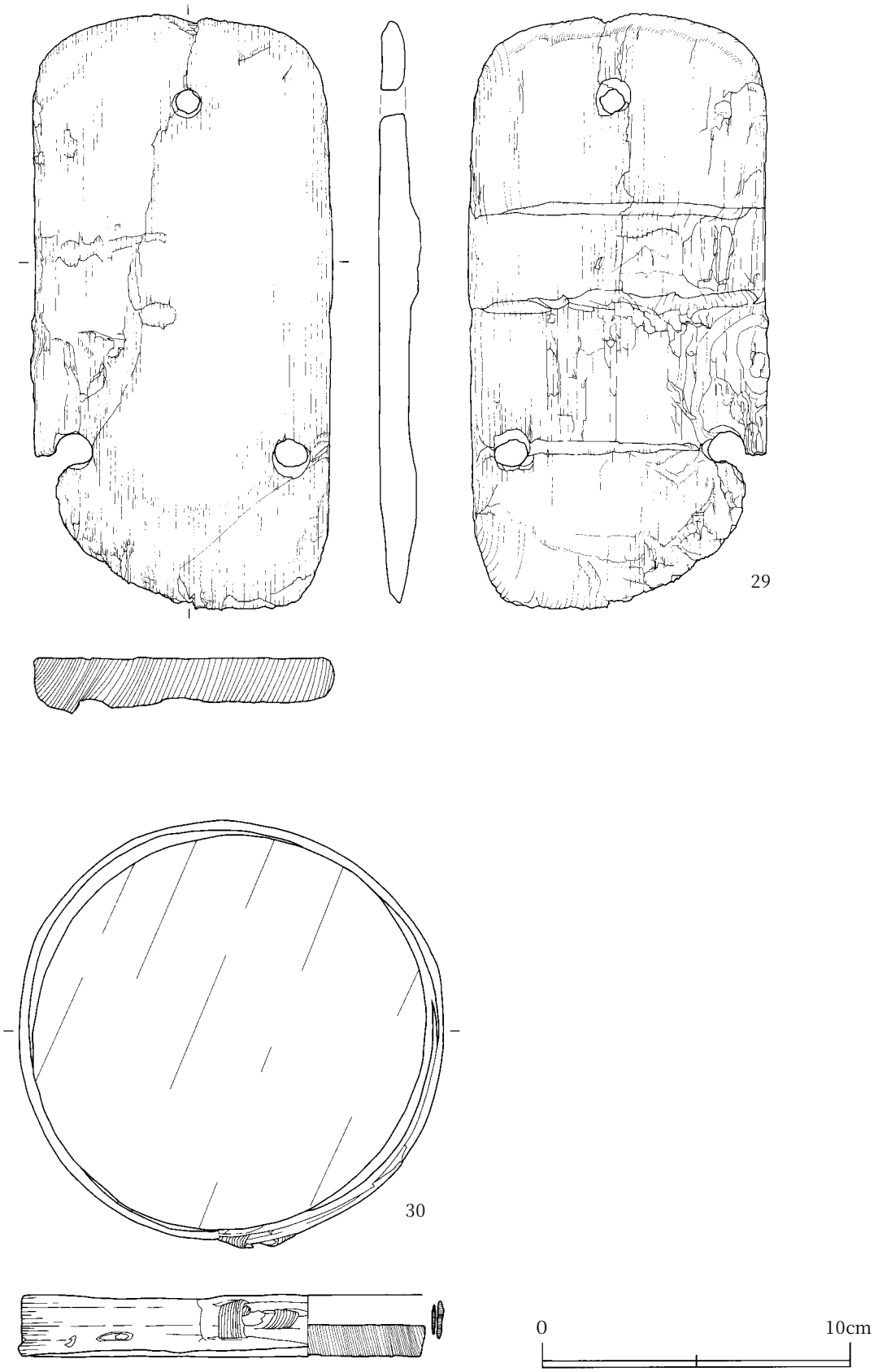
第14図　ＳＴ27出土遺物（５）



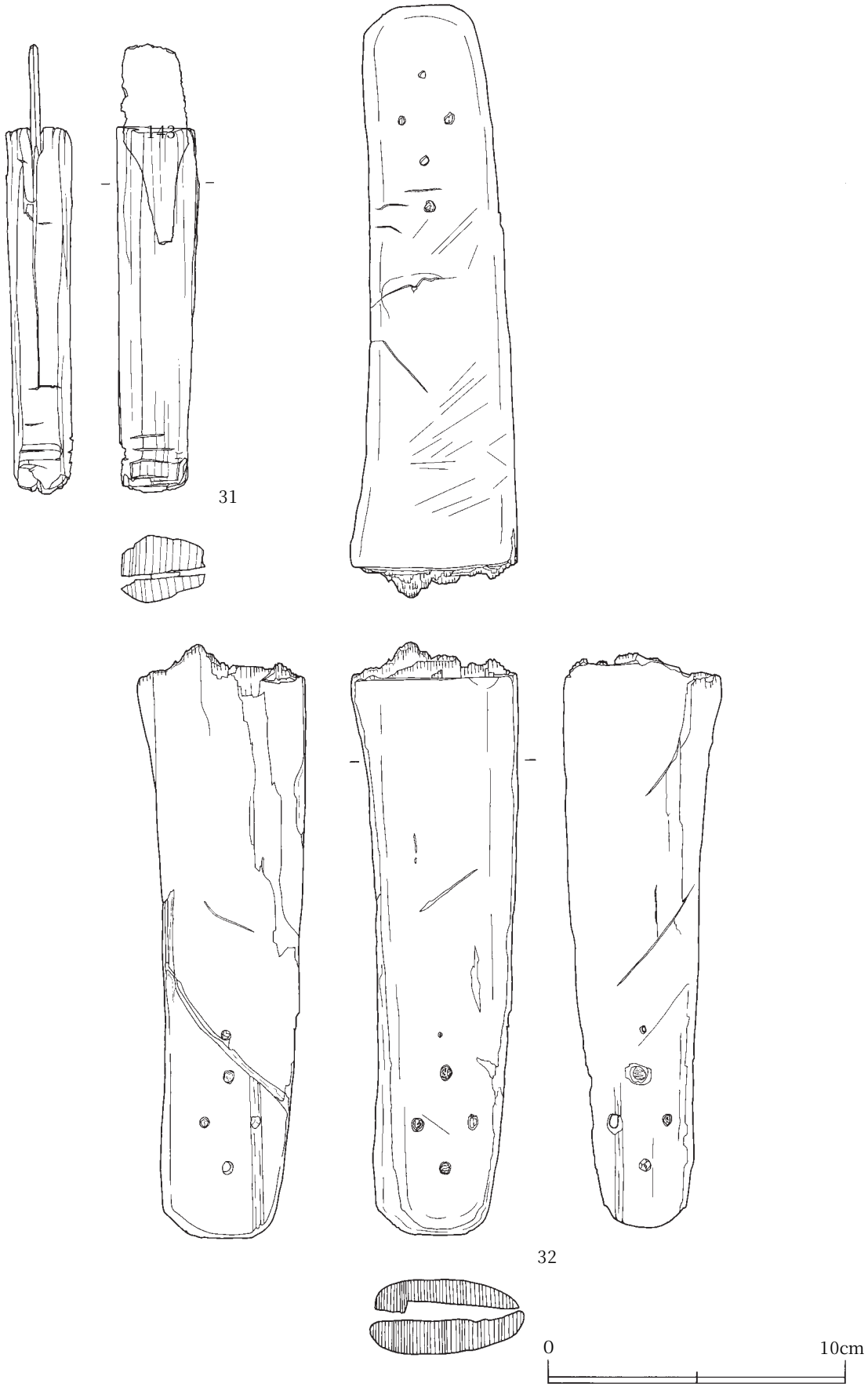
第15図　ＳＴ27出土遺物（６）



第16図　ＳＴ27出土遺物（７）



第17図　ＳＴ27出土遺物（８）



第18図　ＳＴ27出土遺物（９）

ＳＴ30(第19･23～35図、図版２)

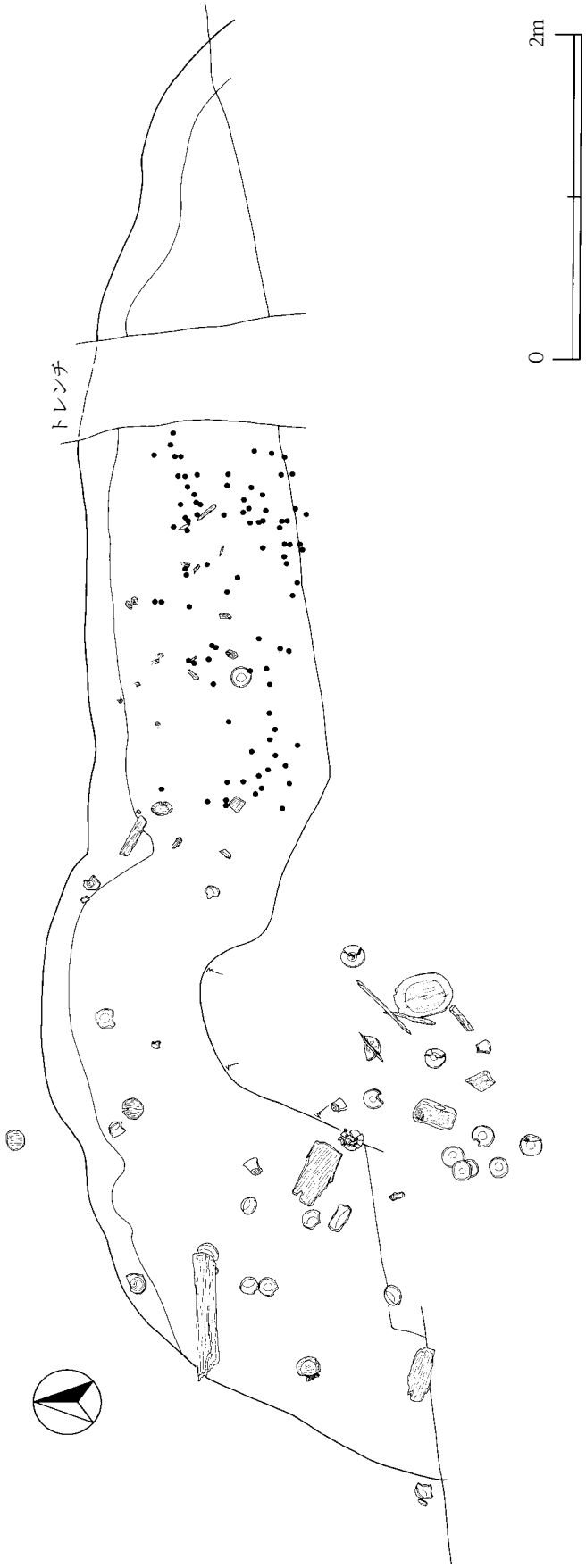
Ⅷｂ層面で確認された遺物集中遺構である。調査段階では、ＭＢ･ＭＣ50･51を中心とする南北1.4m、東西６mほどの範囲と、ＭＣ50･51を中心とする南北3.2m、東西3.6mほどの範囲の２箇所をそれぞれの遺構として捉えていたが、遺物の出土状況などから、ＭＡ～ＭＤ49･50グリッドを中心とする、南北６m、東西16mほどの楕円形を描く範囲を一遺構として判断した。

遺物には土師器坏・皿・甕・壺があり、砥石のほか、木製品には斎串・檜扇・ヤス状木製品・木札状木製品・箆状木製品・曲物の底板・刳物・アカスクイ状木製品などがある。

土師器坏は60点で、このうち高台付き坏が２点(128･129)で、底部穿孔が１点(70)ある。坏には、口縁部が打ち欠かれたものが20点、油煙が付着するするものが20点ある。土師器甕のうち、小形のものには口縁部がわずかに外反するか、直立気味のものがあり、大形のものは口縁部が大きく外反し、ヘラ削りの痕跡が明瞭なものが多い。

斎串には、Ａ類とＢ類のほかに幅の広くなるＣ類(45･46)のほか棒状の50や、一端を丸く削りだした54がある。51は何らかの部材の可能性がある。檜扇(55～64)は、折り重なって出土したことからも10枚１組の扇と考えられる。材質はスギで、一枚の大きさは長さ20cm、幅は広い先端部で３cmで斉一性があり、要部分に孔があるほか、先端部のやや下の辺りには３個１組の紐通しの小孔が見られる。

ヤス状木製品とした65・66は、ＳＴ27出土ものとは長さが違うものの形状や作り出し、材質も全く同じである。木札状の木製品67には肉眼では墨痕は確認できない。箆状木製品68は板目方向の材を利用したもので全体の形状を整えた後に、取っ手部分の先端を細かく面取りしている。底板のうち69には側板とを留めるサクラ



第19図　ＳＴ30捨て場

樺が、71には木釘が残っている。69の材質はアスナロである。刳り物のうち72・73はケヤキを素材とし、72では直線的に立ち上がり、73では丸みをもって立ち上がる。76は大形の容器で、全体を手斧で仕上げて、口縁部の一部には注ぎ口のような窪みがある。材質はアスナロである。アカスクイ状木製品75は、先端部がすり減っており、両側の孔に棒状のものをとおして使用したものと考えられ、材質はこれもアスナロである。その他木製には、楔状の77・78、栓状の79・80、把手の81、棒状の木製品82がある。80の材質はサクラで、81はスギである。

ＳＴ40(第36～43図)

調査段階では遺構とは捉えていなかったが、遺物の出土状況や広がりから、ＬＳ～ＭＣ51･52グリッドを中心とする長径(東西)20m、短径(南北)８mほどの楕円形の範囲を遺構範囲と判断した。

詳細図はないが、出土遺物には、土師器の坏・甕・壺、須恵器には壺・甕があり、砥石のほか、木製品には、斎串・ヤス状木製品がある。

土師器の坏は83点で、このうち高台付き坏が４点で、うち216は黒色処理されている。また、４点は墨書土器であり、221は底部穿孔されている。坏には意図的に口縁部が打ち欠かれたものが29点、油煙が付着する坏が22点ある。土師器の甕には、口縁部が外反する226・234・235と口縁部が直立する227・230～233があり、ヘラ削りの痕跡が認められる228・234・235がある。236・237は同一個体の可能性があるが、丸底で、内外面に叩き目がある。須恵器の壺241・242は体部上半に最大径があり、外反する口縁から口唇がわずかに垂直に立ち上がる。底部から最大径のある付近まではヘラ削りが残っている。

木製品の84～86はＡ類の斎串で、87はノリウツギを材質とするヤス状木製品、88はＳＴ27出土の25やＳＴ30の54と同様に斎串と捉えておきたい。斎串は全てスギである。

２　井戸跡

ＳＥ08(第20･44図)

ＭＥ・ＭＦ52・53グリッドに位置し、確認面はⅧ層上面で、北側は調査区外にある。平面形は円形で、直径3.4m、確認面からの深さ28cmである。南東でＳＤ22に連結するものと考えられ、本来はＳＤ22に水を引き込むために、周辺の湧水を集めた施設と考えられる。覆土中からは出土した杉の板材は、井戸枠の部材だった可能性がある。覆土は３層に分層され、Ⅴ・Ⅵ・Ⅷ層に対応する層がそれぞれレンズ状に堆積していた。

遺物は土師器の坏が出土しており、246は口縁部が打ち欠かれている。

３　溝跡

ＳＤ22(第21･44･45図、図版３)

ＭＡ～ＭＥ51・52グリッドに位置し、確認面はⅧ層面である。溝状の掘り込みと、ＭＤ・ＭＥ51・52グリッドとＭＡ・ＭＢ52グリッドで側板とそれを押さえる杭が検出された。本遺構はＳＥ08の南側から南東方向へ向かって４m、方角を東へ変えさらに15m以上延びているが、東側は攪乱を受けており、掘り込みや構築材は検出されなかった。幅は20～80cm、確認面からの深さは12cmで

ある。本遺構の底面で最も標高の高い部分は北西端の標高12.75mであり、最も標高の低い部分は東端の標高12.7mであり、流れは極緩いものであったことがうかがえる。側板は、いづれも斜面下方の南側で良く残っているが、北側でも杭が見られることから、本来は南北両側を板で囲っていたものと考えられる。

遺物は土師器の高台付き坏と甕、木製品では斎串がＡ類、Ｂ類それぞれ各１点(89･90)と箆状木製品が１点(91)出土している。

４　杭列

ＳＡ28・ＳＡ31・ＳＡ32(第21図)

いずれもＭＤ～ＭＥ51・52グリッドに位置し、確認面はⅧ層である。３列とも同一方向に伸びていて、同じ用途と考えられることから一括して説明を加える。

杭列の長さは、ＳＡ28が3.1m、ＳＡ31が2.5m、ＳＡ32は2.5mでほぼ東西方向に伸びていて、杭は幅７～10cm、厚さ３～５cmの板状である。杭の形状がＳＤ22と同じで、ＳＤ22と平行していることから、ＳＤ22が南側から位置を変えてきたことが考えられ、特に３列とも西側に延びる傾向にあることから、ＳＥ08のような湧水を集める施設がさらに西側に存在していたことが考えられる。

５　土坑

ＳＫ01(第20図)

ＬＱ54･55グリッドに位置しており、確認面はⅧ層で、北側は調査区外にある。平面形は長軸(南北)2.4m、短軸(南北)0.9m以上の楕円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは、東側では20ｃm、西側では45cmで、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦であるが、西側には直径0.9m、深さ15cmの落ち込みがあり、ここから木片が集中して出土している。遺物は木片以外は出土していない。

ＳＫ04(第20図)

ＭＥ53グリッドに位置しており、確認面はⅧ層である。北側は調査区外にあり、東側ではＳＫ05に接している。平面形は長軸(南北)0.8m以上、短軸(東西)１mほどの楕円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは最も深いところで20cmで、壁は東側では垂直に、西側では緩やかに外傾して立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

ＳＫ05(第20図)

ＭＤ53グリッドに位置しており、確認面はⅧ層である。平面形は長軸(東西)1.2m、短軸(南北)0.9mの楕円形を呈している。確認面からの深さは最も深いところで20cmほどで、壁は外傾して立ち上がり、底面には凹凸がある。遺物は出土していない。

ＳＫ06(第22･44図)

ＬＯ53グリッドに位置しており、確認面はⅧ層で、平面形は１辺1.2mの方形を呈している。確認面からの深さは40cmで、壁は北側では丸みをもちながら外傾して立ち上がる。底面には凹凸があり、南と北には直径70cmほどの浅い落ち込みがある。

遺物には土師器の坏(249～255)と甕(260･261)があり、坏の252・259には油煙が付着しており、

255には墨痕がある。

ＳＫ29(第22図)

ＭＢ50グリッドに位置しており、確認面はⅧ層である。南側の半分ほどは耕作に伴う攪乱によって壊されている。平面形は、直径1.9ｍほどの円形を呈するものと思われ、確認面からの深さは40cmで、壁は、開口部から底面中央に向かって緩く傾斜している。遺物は底面から木片が出土しただけである。

６　柱穴様ピット

６基の柱穴様ピットがあり、調査対象範囲のほぼ中央で最も緩い斜面部分にある。確認面はいずれもⅧ層である。これら柱穴様ピットには、建物跡などの柱穴に見られる規則性などもない。

第２表　柱穴様ピット一覧

ピット番号	検出位置	規模(直径)	深さ	覆　　土	備　　考
ＳＫＰ12	ＭＢ53	22	8	1:オリーブ黒色土(7.5Y3 / 2)	
ＳＫＰ13	ＭＥ51	34	18	1:黒褐色土(10YR2 / 2) 2:オリーブ黒色土(5Y3 / 2)	
ＳＫＰ14	ＭＣ51	18	8	1:黒褐色土(2.5Y3 / 1)	
ＳＫＰ15	ＭＣ52	20	18	1:オリーブ灰色土(5GY5 / 1)	
ＳＫＰ16	ＭＣ52	16	14	1:オリーブ灰色土(5GY5 / 1)	
ＳＫＰ17	ＭＢ52	20	10	1:オリーブ灰色土(5GY5 / 1)	
ＳＫＰ21	ＭＤ51	40	30	1:オリーブ黒色土(7.5Y3 / 2)	覆土中から土師器坏４個体出土

(単位はcm)

第３節　遺構外出土遺物(第46～49図)

遺構外の遺物は、主に調査対象範囲の南側の水田部分からの出土であり、本来は北側の緩斜面部分からの流れ込みや、水田造成の際に攪乱を受けたものと考えられる。

土師器坏：土師器の坏には、口径と底径の比が大きく、底部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち上がる器形が多い。このうち高台付き坏の２点(295･297)は内面が黒色処理されており、302・303は墨書土器である。油煙が付着するものが７点で、口縁部が打ち欠かれているものが13点ある。

土師器皿：高台部の直径が小さく、皿部分が比較的では大きなもので、299・300高台付き、301は油煙が付着している。

土師器甕：304・305は口唇が垂直に立ち上がるもので、ロクロ調整がなされる。

須恵器壺：307はすぼまった頸部から、大きく外反する口縁部に段の付くものである。309は体部上半に最大径のある壺で、頸部に向かって急激にすぼまる。

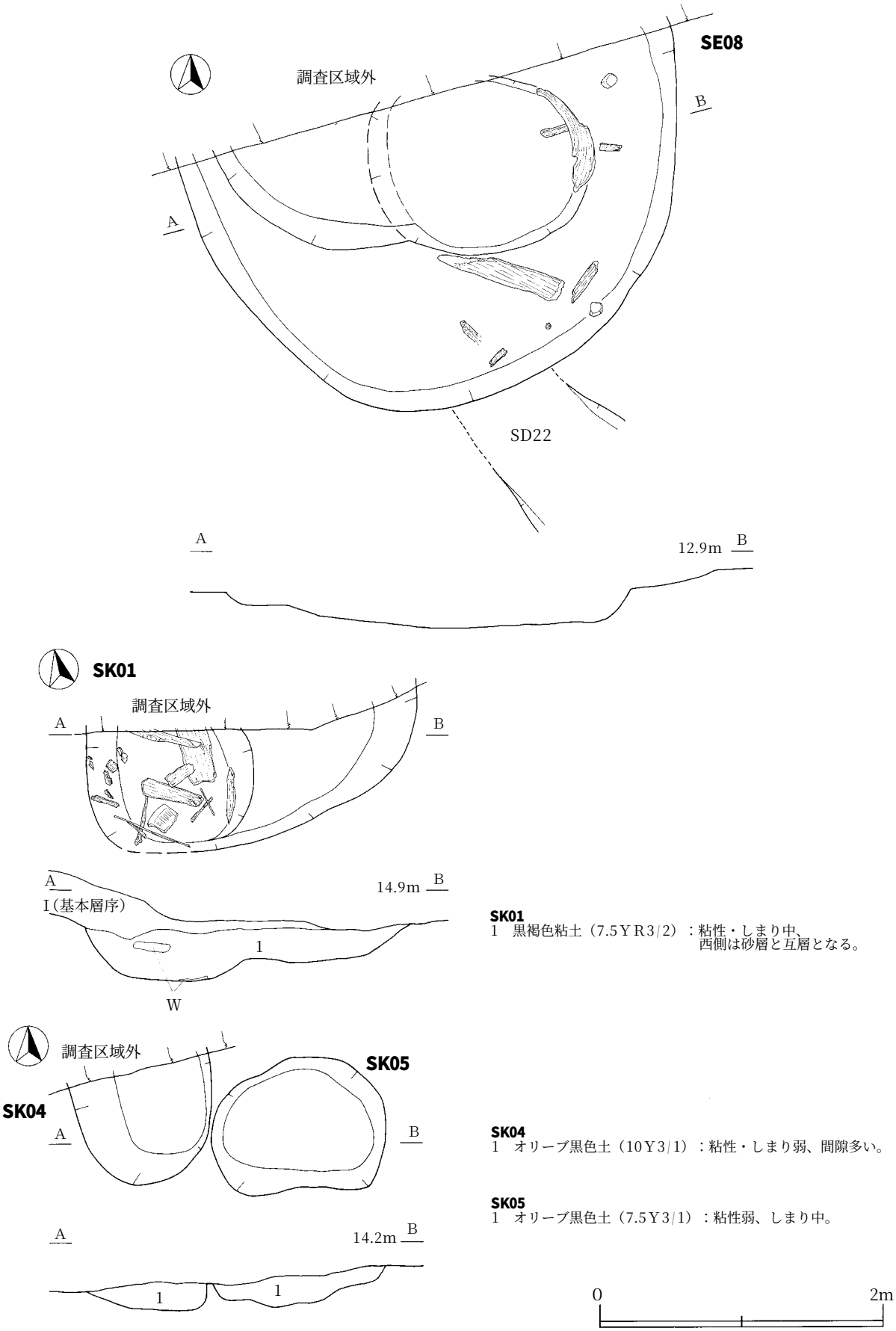
須恵器甕：304は大きく外反する口縁から短い頸部を経て体部上半に至る器形である。

土錘：310は長さ４cm、最大幅２cmで重さ67.5ｇ、内径１cmの土錘である。

斎串：斎串にはＡ類(92･93)、Ｂ類(94)があり、ほかに頭部を丸く削りだした95・96がある。96は基部が二股に削り出されている。97は木札状の木製品であるが、墨痕は認められない。

曲物底板：98・99は曲物の底板と思われるもので、99は断面が台形状となる。

円筒状木製品：100は長さ10cm、直径3.4cmの円筒形の木製品である。

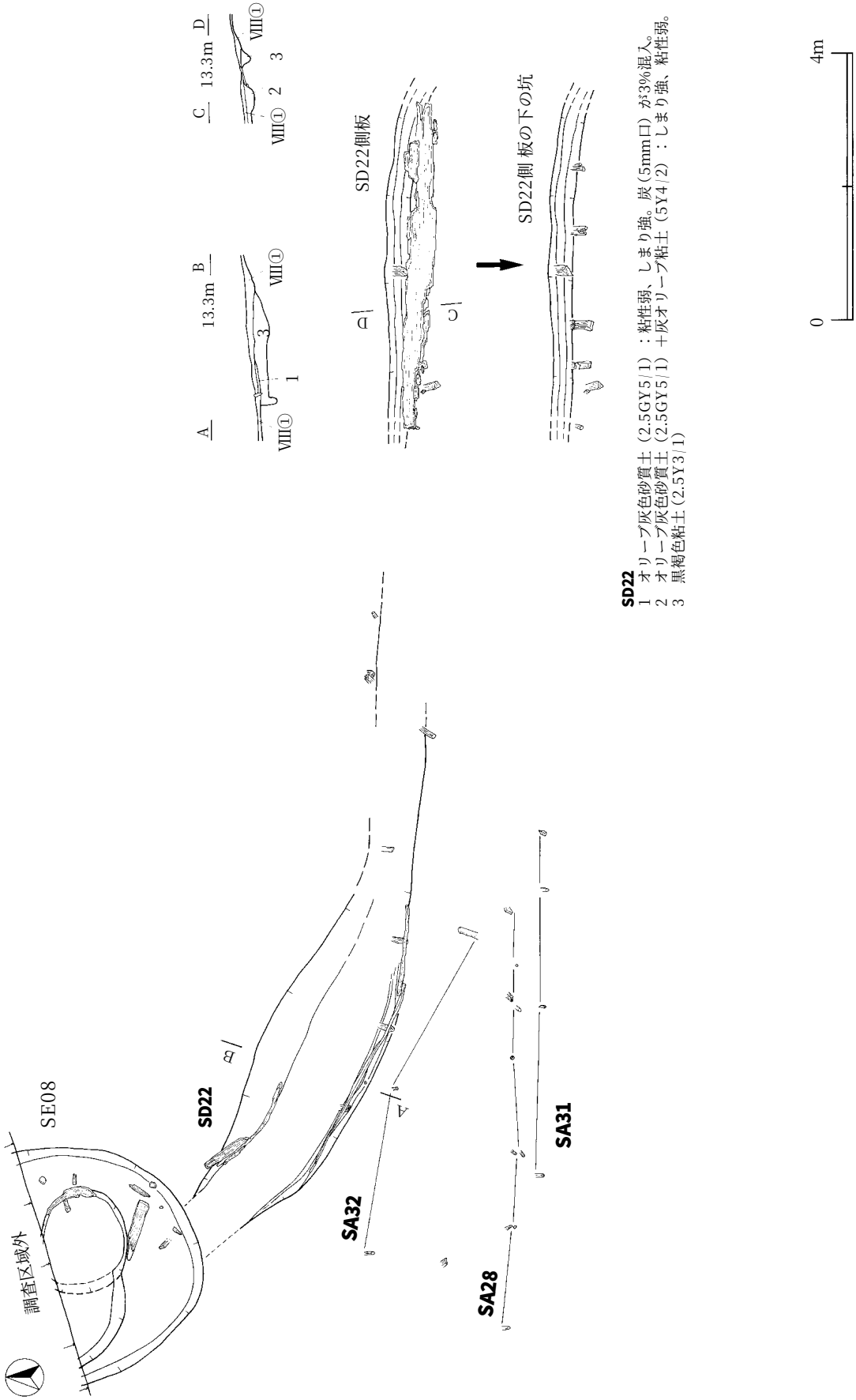


SK01
1　黒褐色粘土（7.5ＹＲ3/2）：粘性・しまり中、
西側は砂層と互層となる。

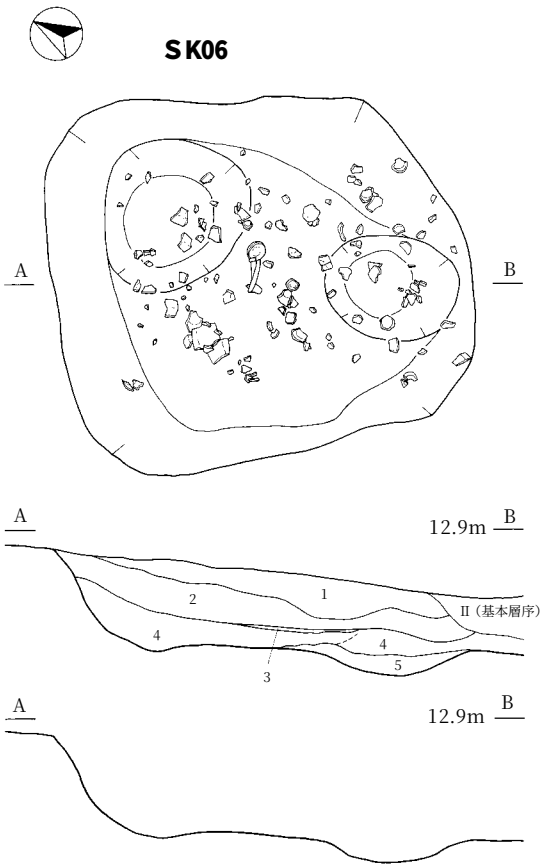
SK04
1　オリーブ黒色土（10Ｙ3/1）：粘性・しまり弱、間隙多い。

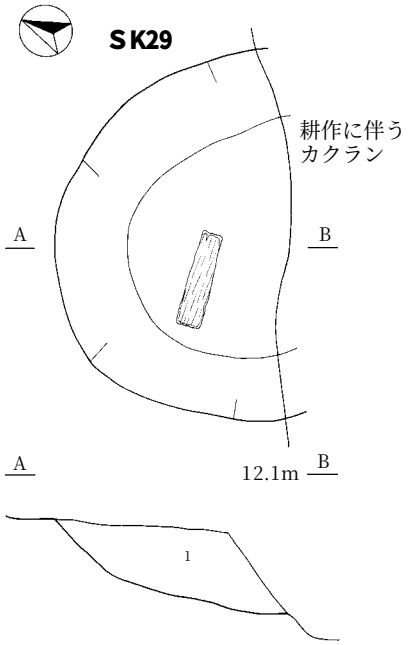
SK05
1　オリーブ黒色土（7.5Ｙ3/1）：粘性弱、しまり中。

第20図　ＳＥ08井戸跡、SK01・04・05土坑



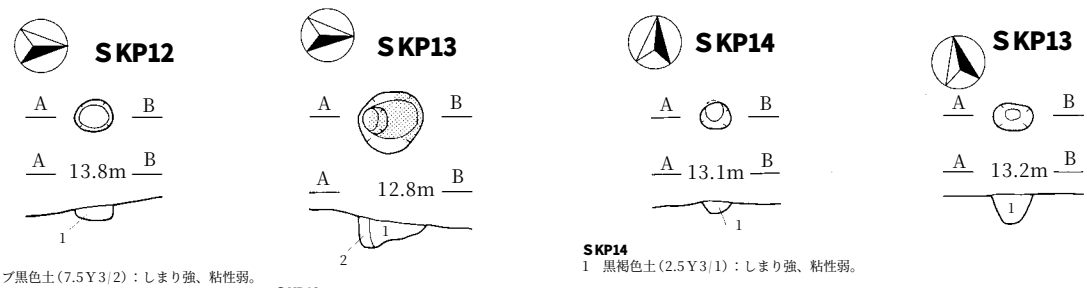
第21図　ＳＤ22溝跡、SA28・31・32杭列





SK06
1　褐灰色砂質土（10ＹＲ4/1）：粘性なし、しまり強。
2　褐灰色砂質土（10ＹＲ4/1）：粘性なし、しまり強。
　　炭（10mm□）が3%混入。
3　炭層
4　暗灰黄色粘土（2.5Ｙ4/2）：粘性強、しまり中。
5　暗灰黄色粘土（2.5Ｙ4/2）：粘性強、しまり中。
　　地山ブロック混入。

SK29
1　黒褐色粘土（7.5Ｙ3/2）：粘性・しまり中。

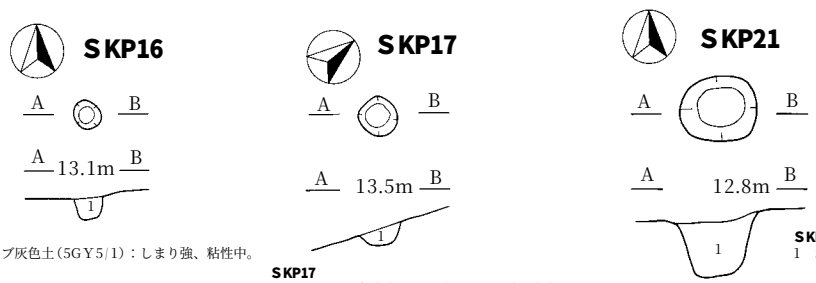


SKP12
1　オリーブ黒色土（7.5Ｙ3/2）：しまり強、粘性弱。

SKP13
1　黒褐色土（10YR3/2）：しまり中、粘性弱。
2　黒褐色土（10YR3/2）＋黄褐色砂質土（10YR5/6）：しまり中、粘性弱。

SKP14
1　黒褐色土（2.5Ｙ3/1）：しまり強、粘性弱。

SKP15
1　オリーブ灰色土（5GＹ5/1）：しまり強、粘性中。



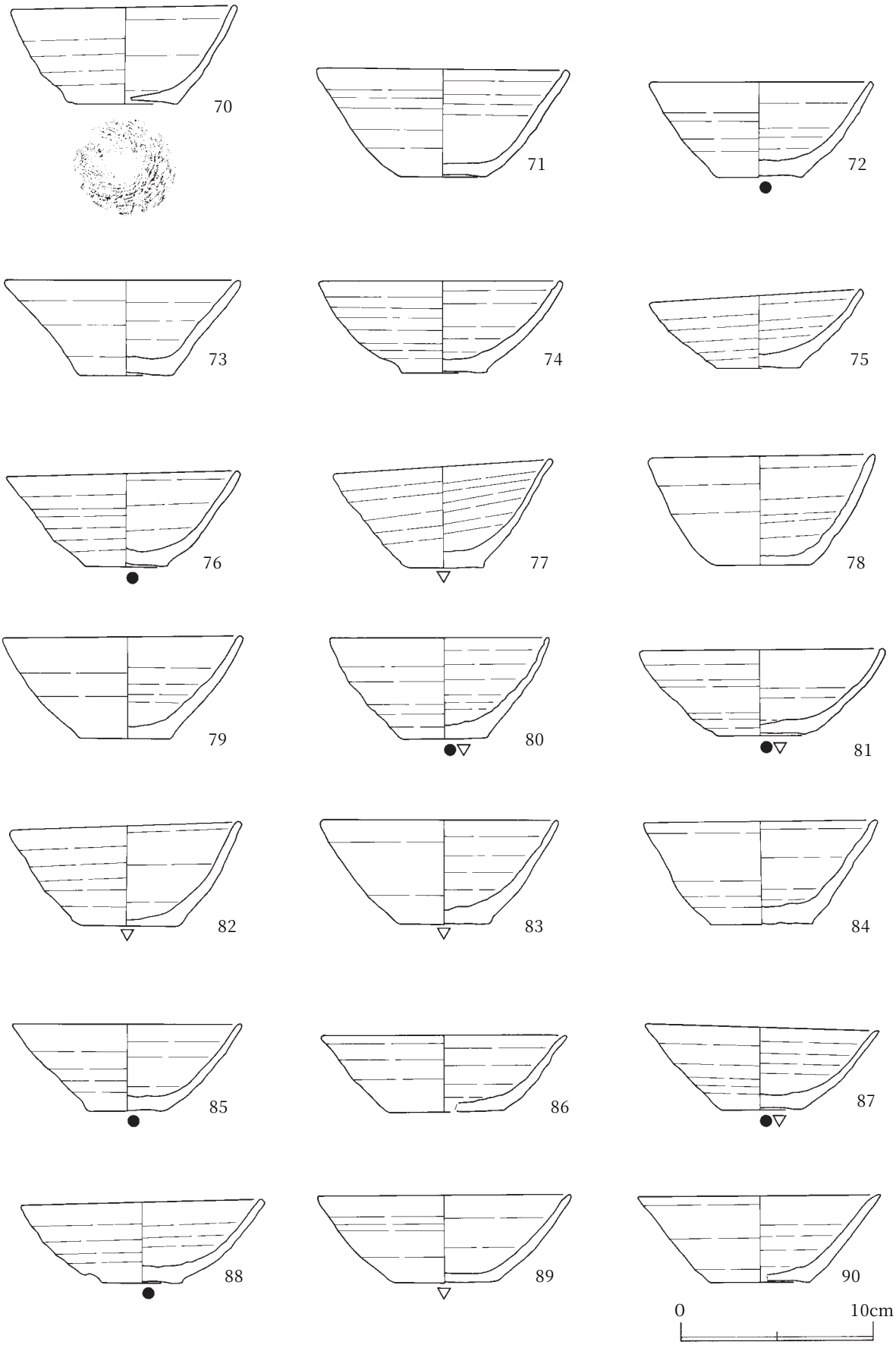
SKP16
1　オリーブ灰色土（5GＹ5/1）：しまり強、粘性中。

SKP17
1　オリーブ黒色土（5GY3/2）：しまり中、粘性弱。

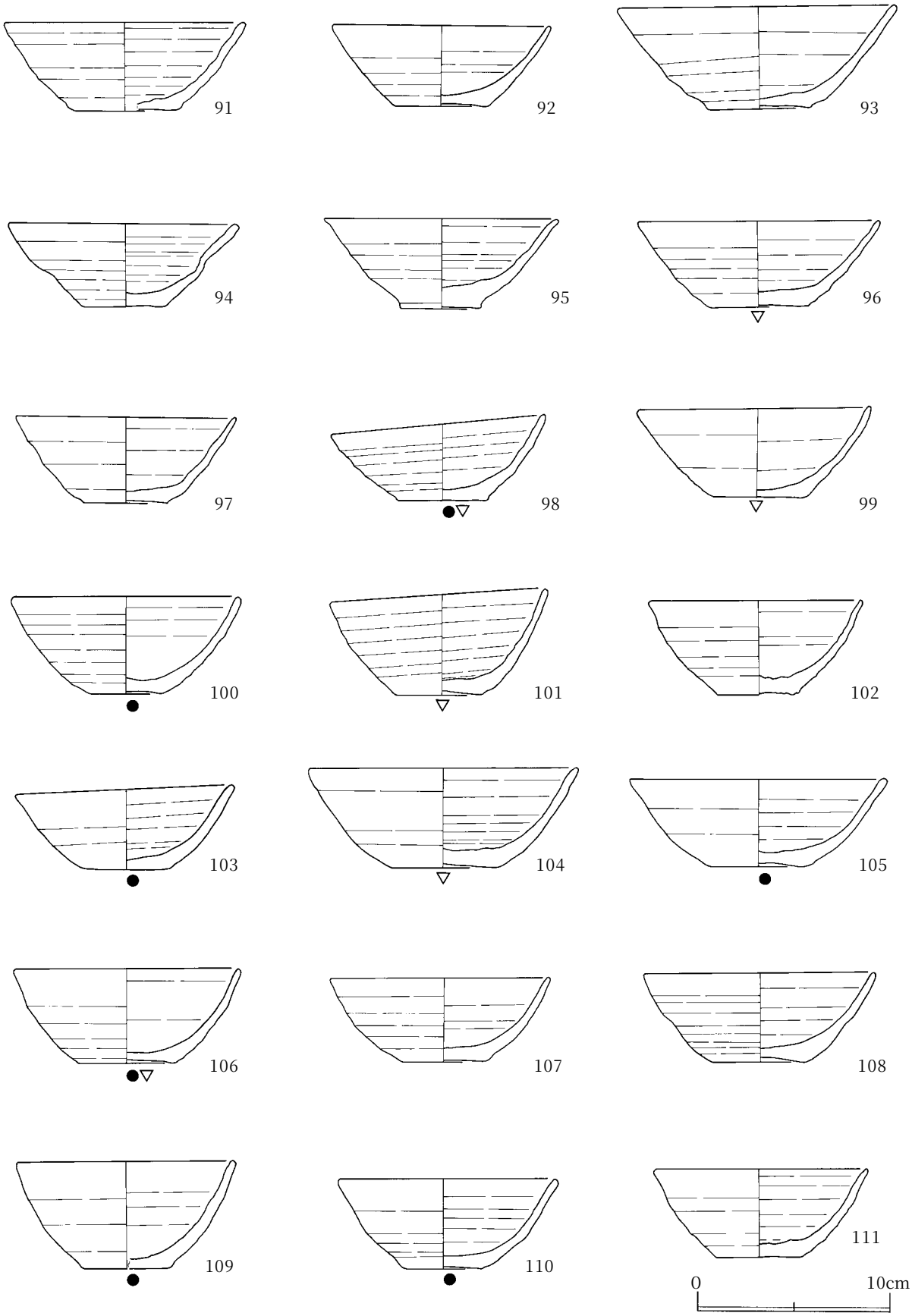
SKP21
1　オリーブ黒色土（7.5Y3/2）：しまり強、粘性弱。

0　2m

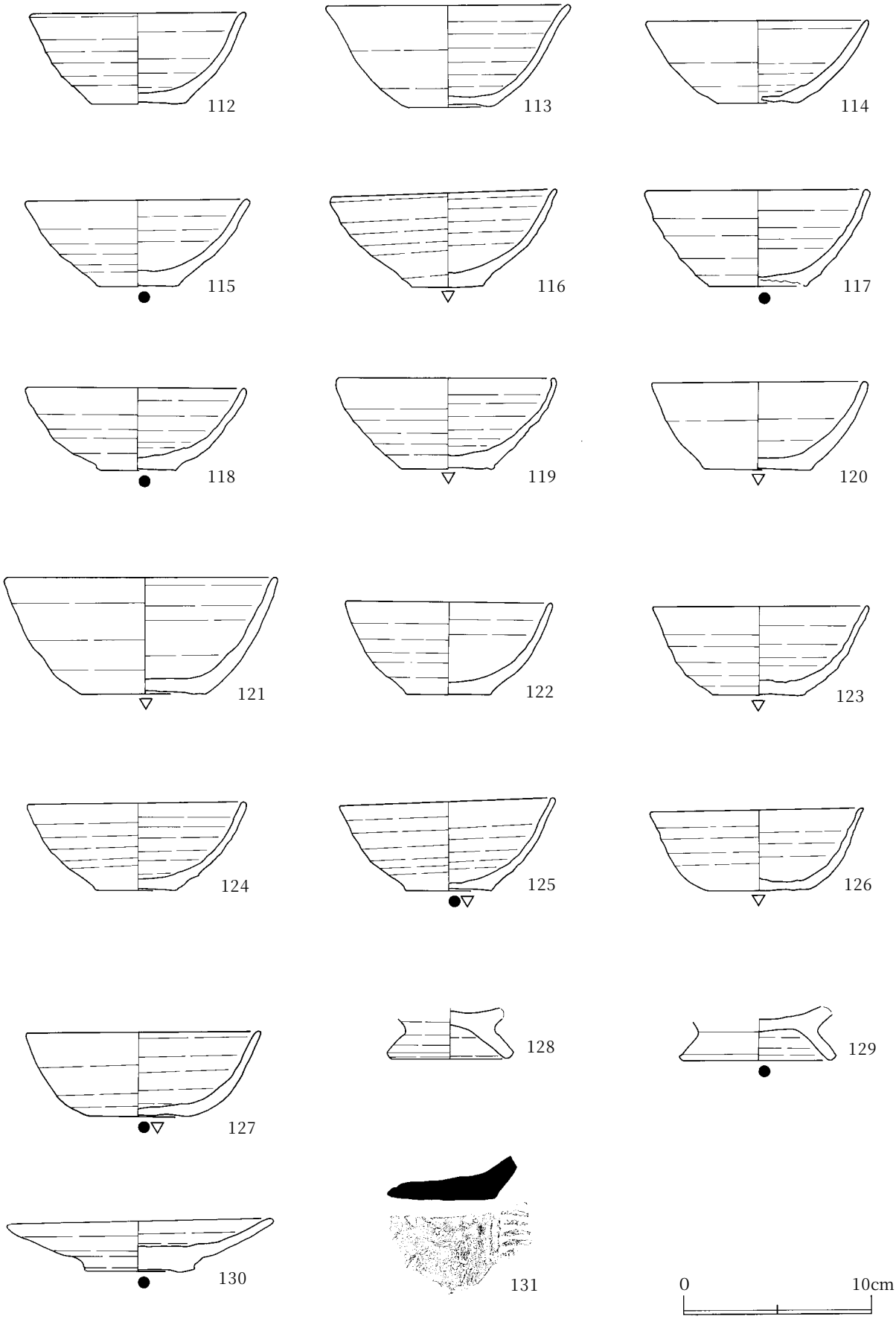
第22図　ＳＫ06・29土坑、SKP12～17・21柱穴様ピット



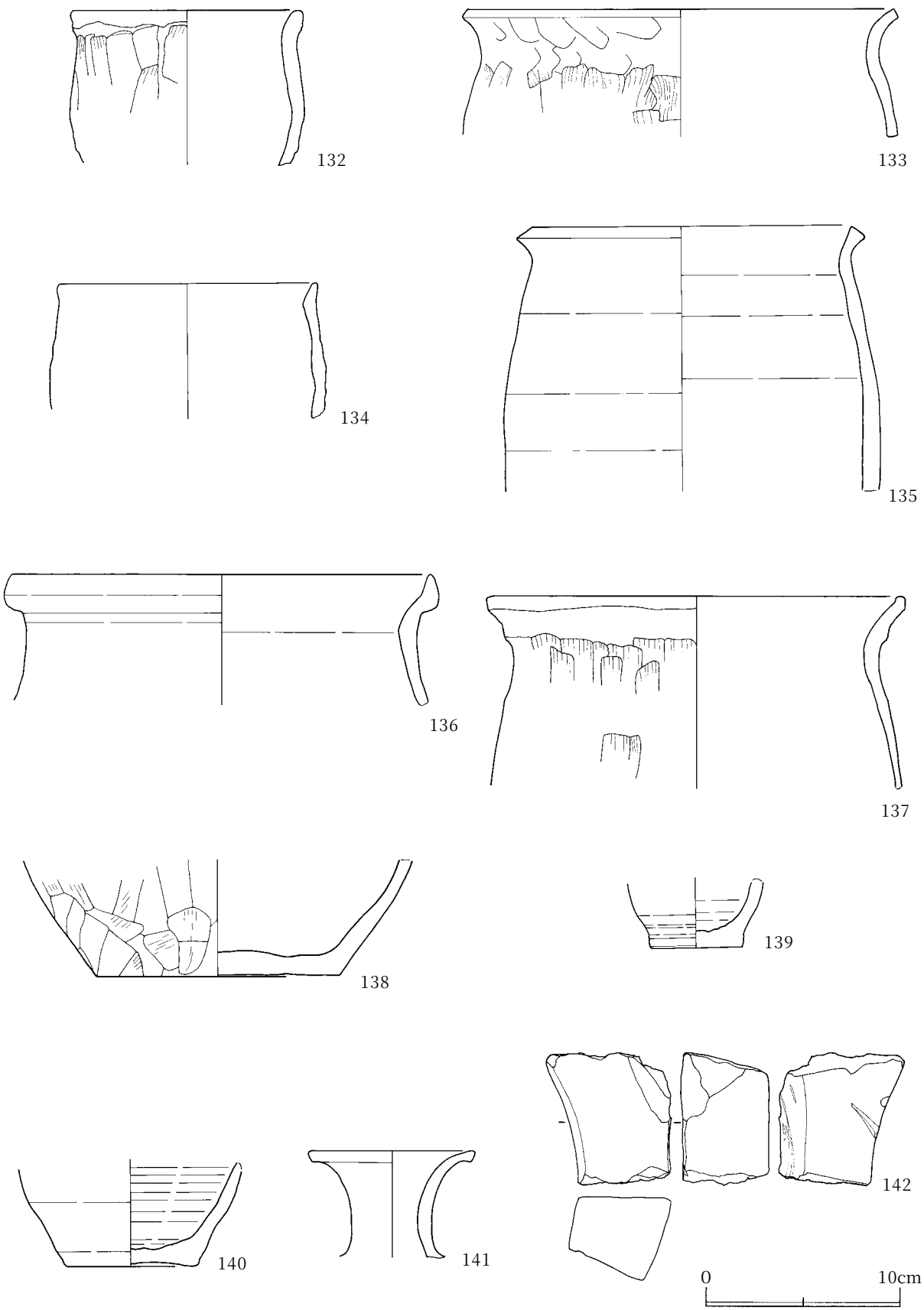
第23図　ＳＴ30出土遺物（1）



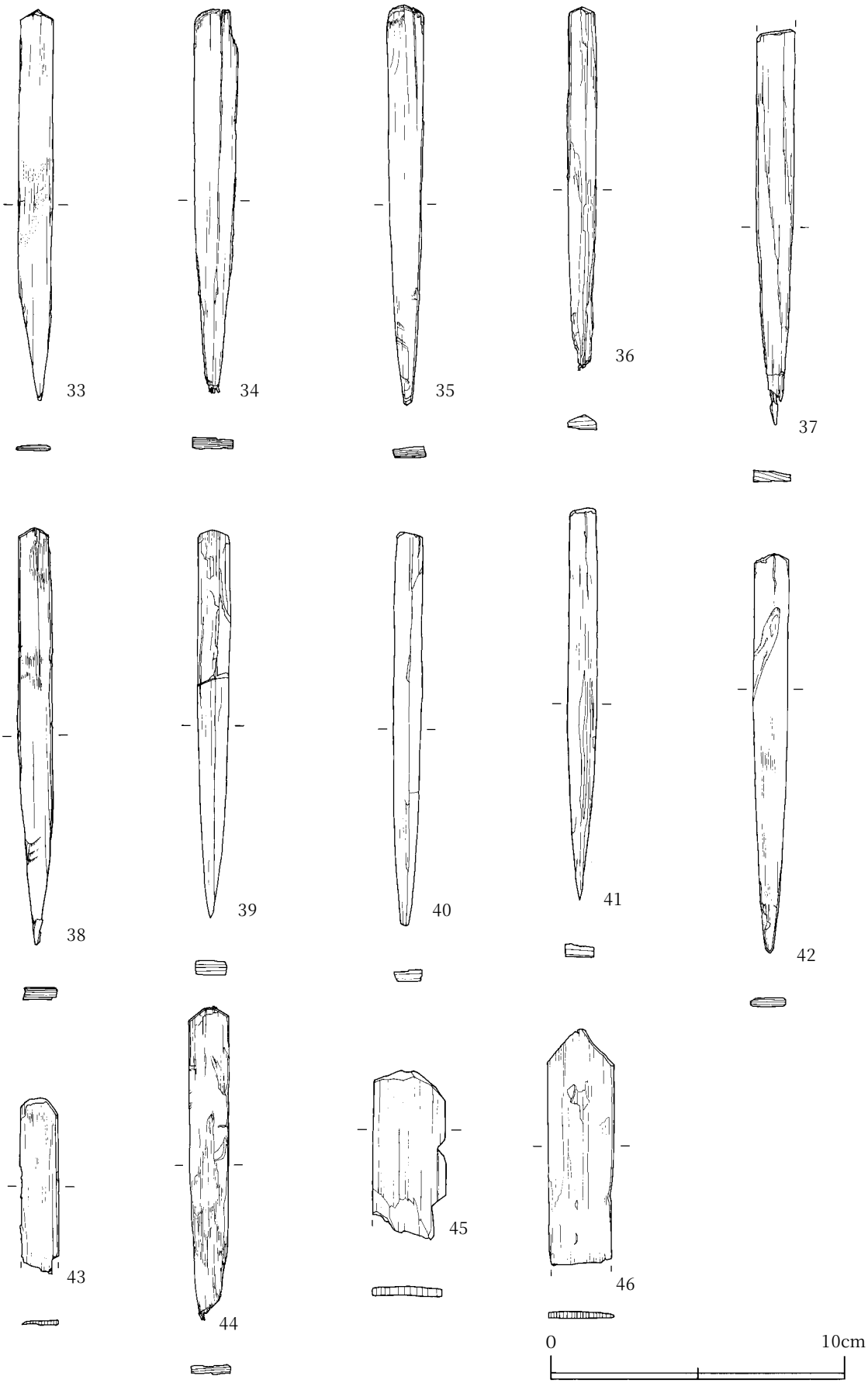
第24図　ＳＴ30出土遺物（2）



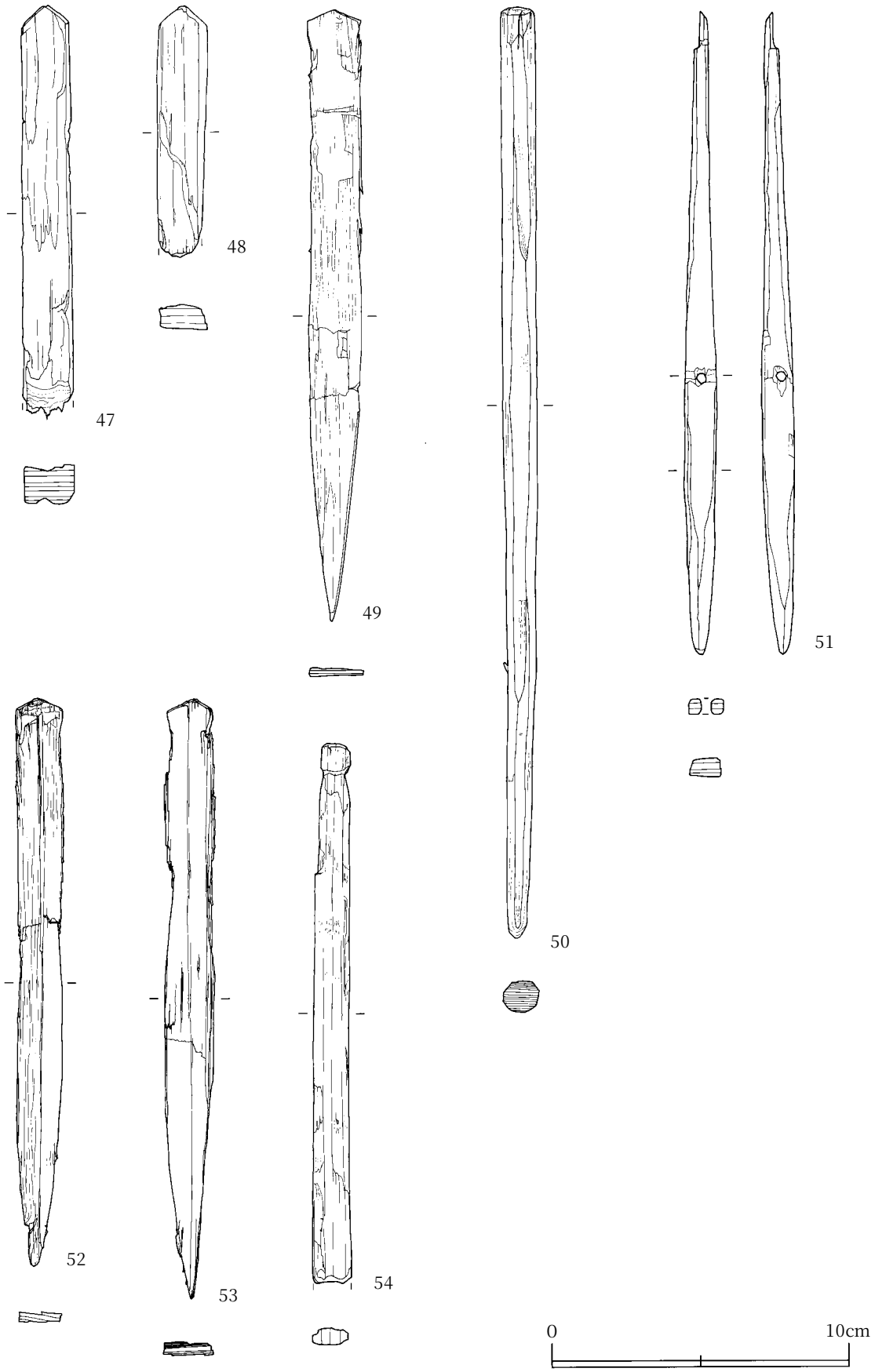
第25図　ＳＴ30出土遺物（3）



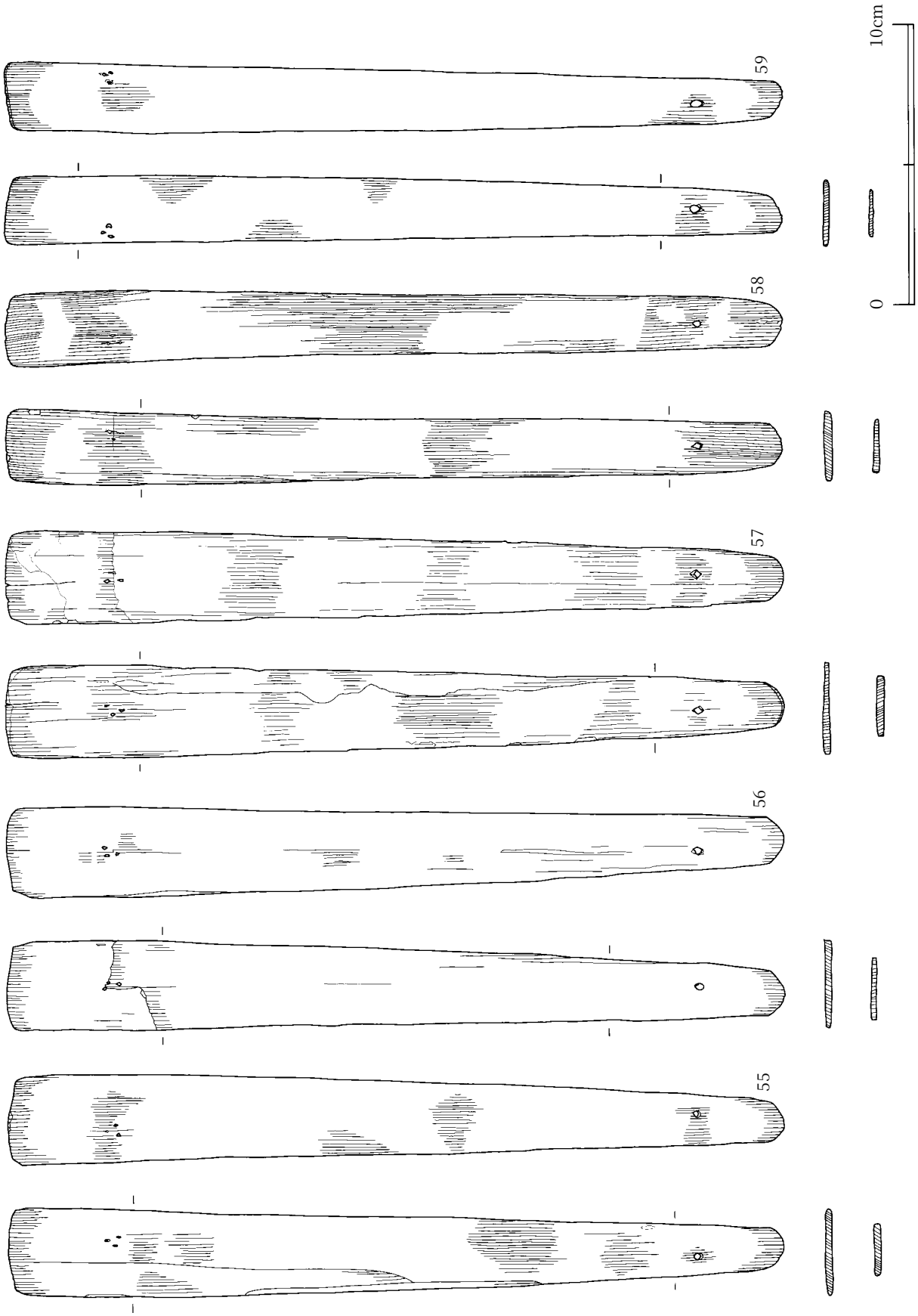
第26図　ＳＴ30出土遺物（4）



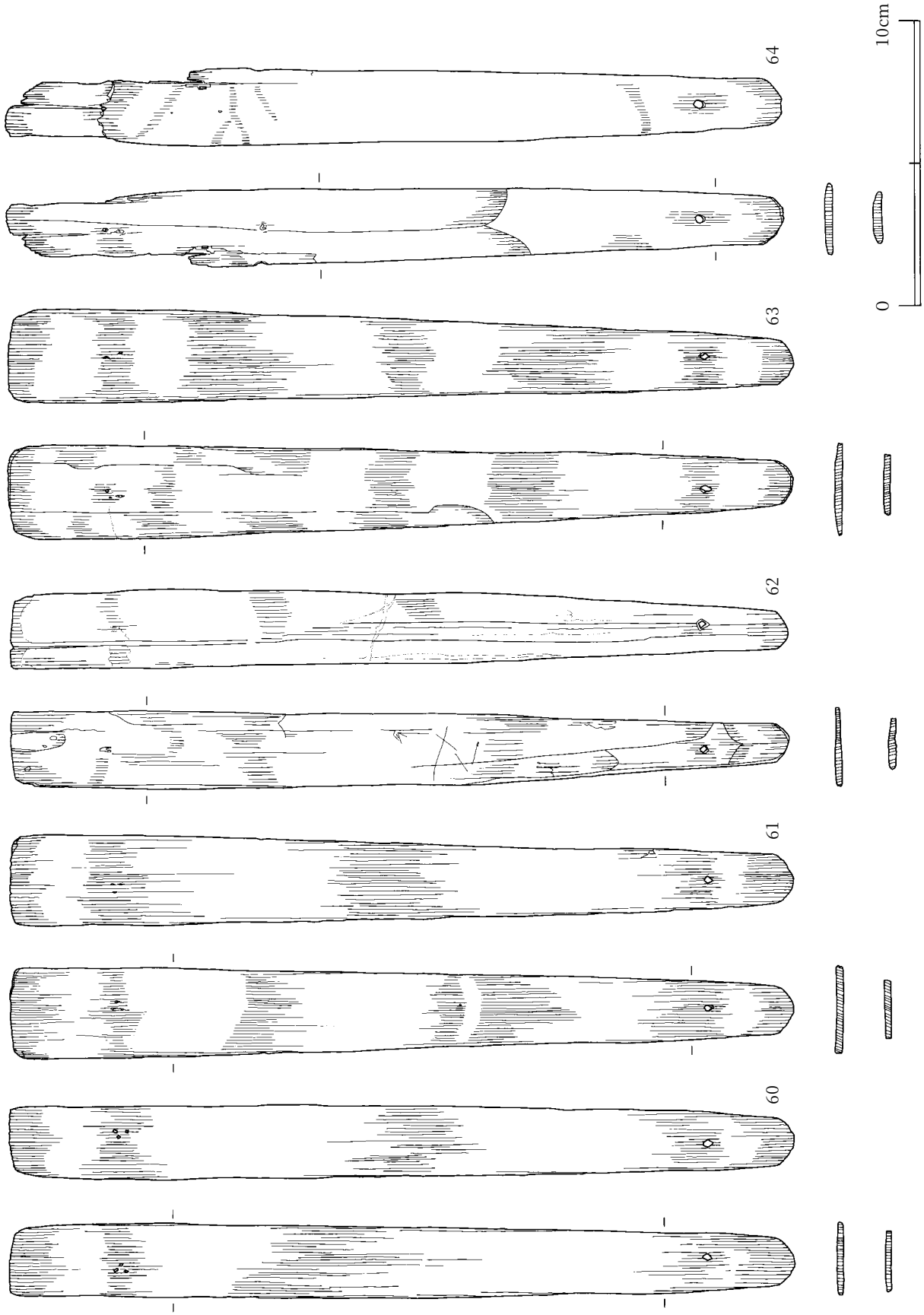
第27図　ＳＴ30出土遺物（５）



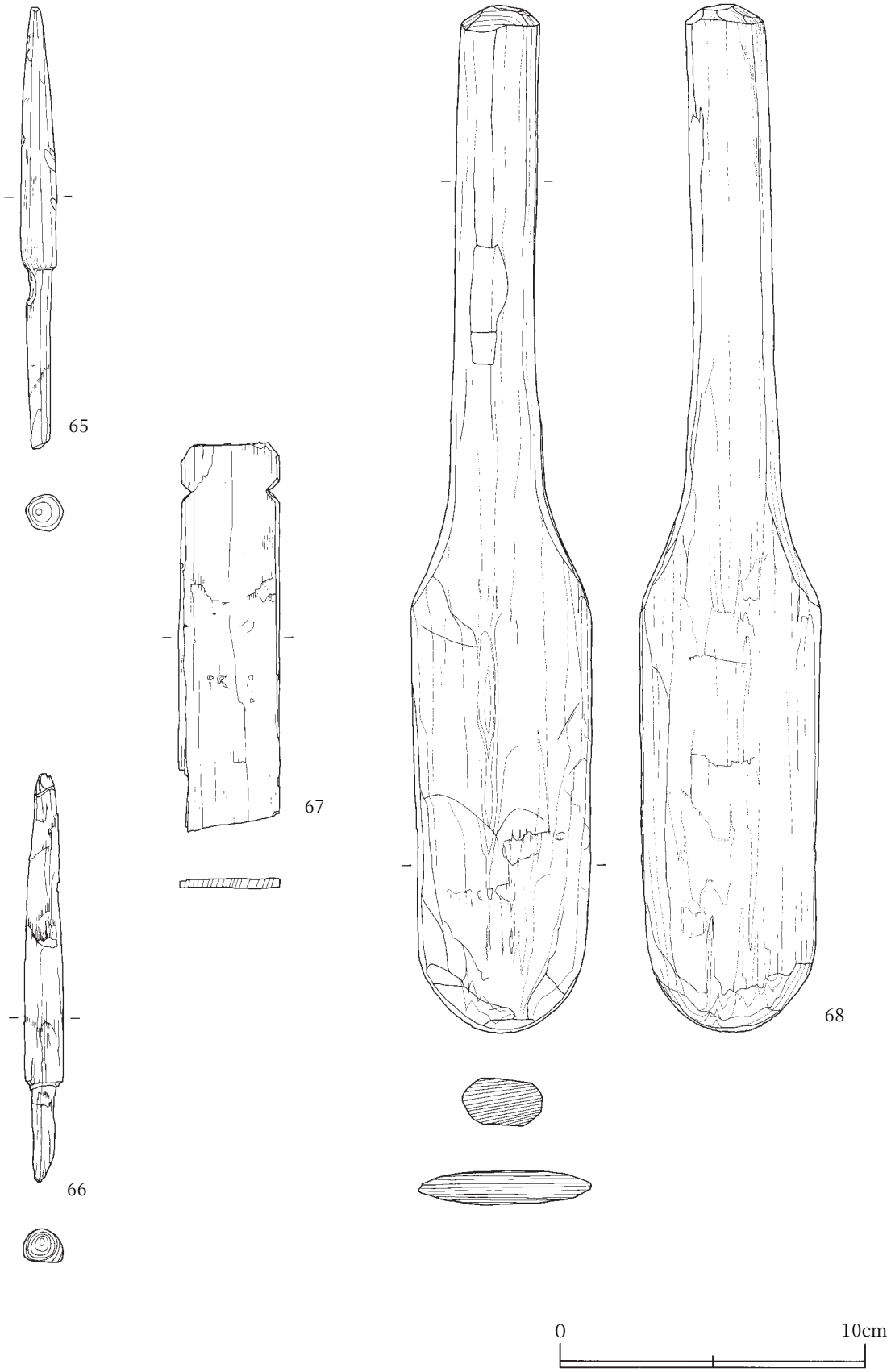
第28図　ＳＴ30出土遺物（６）



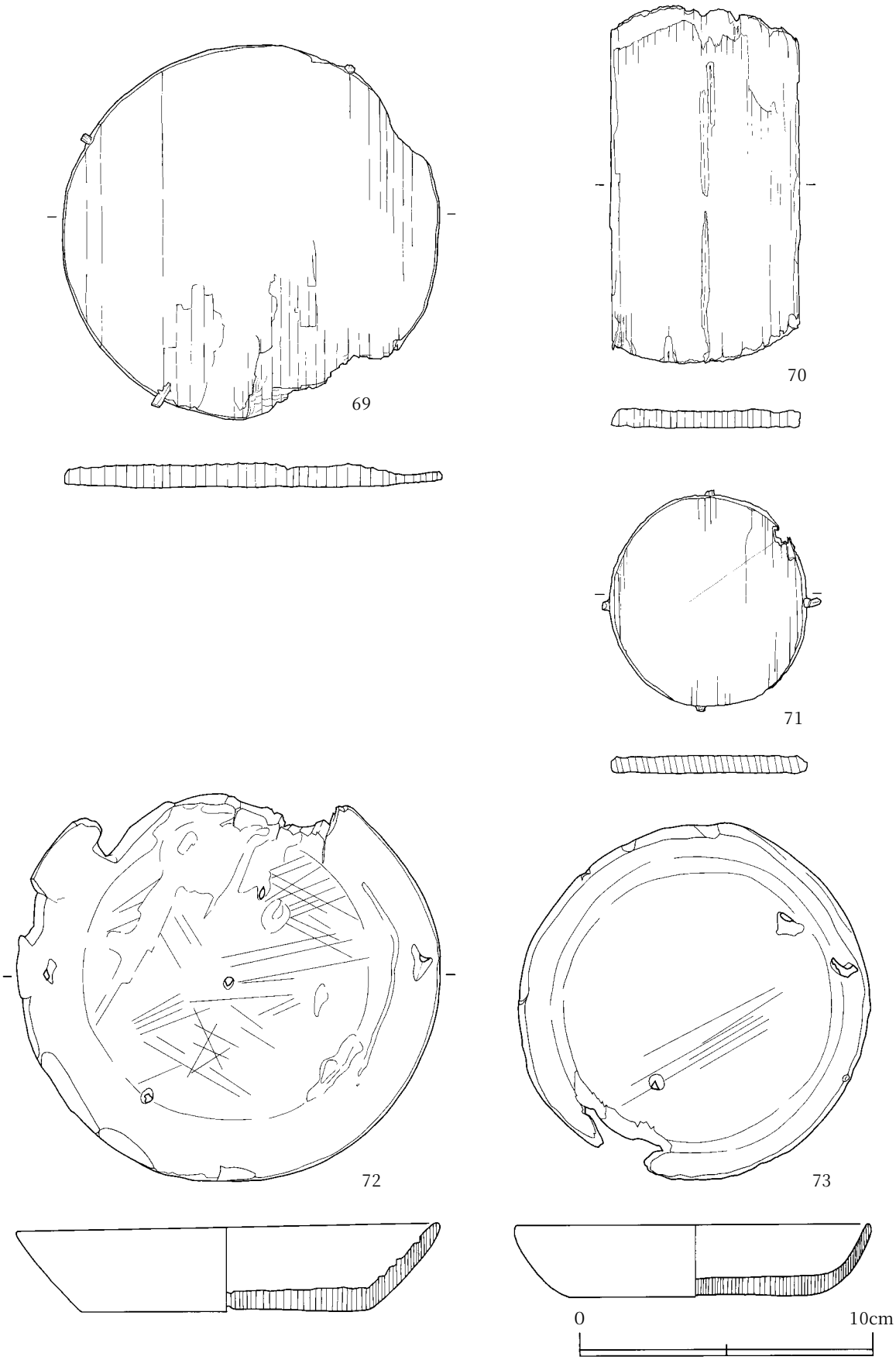
第29図　ＳＴ30出土遺物（７）



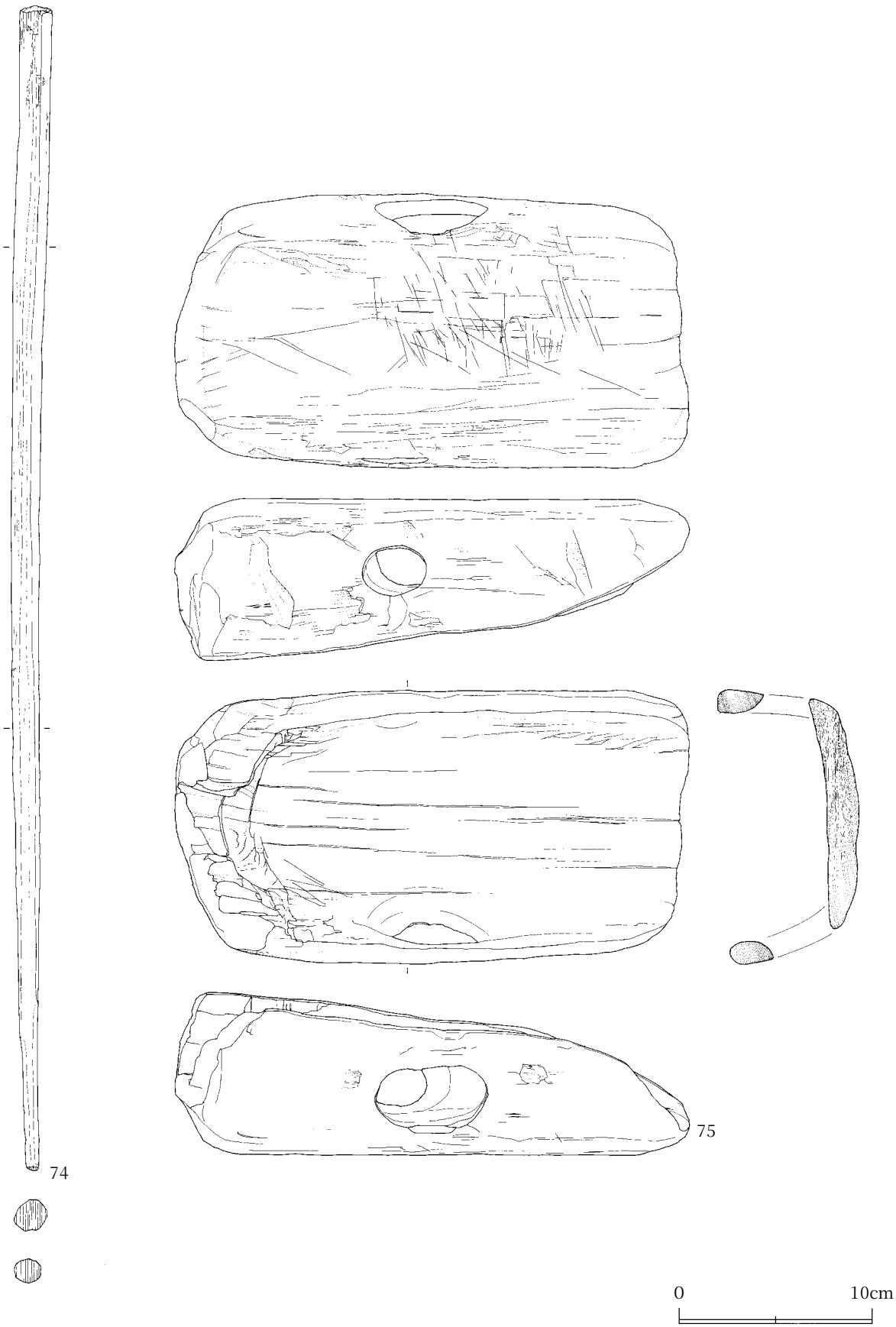
第30図　ＳＴ30出土遺物（８）



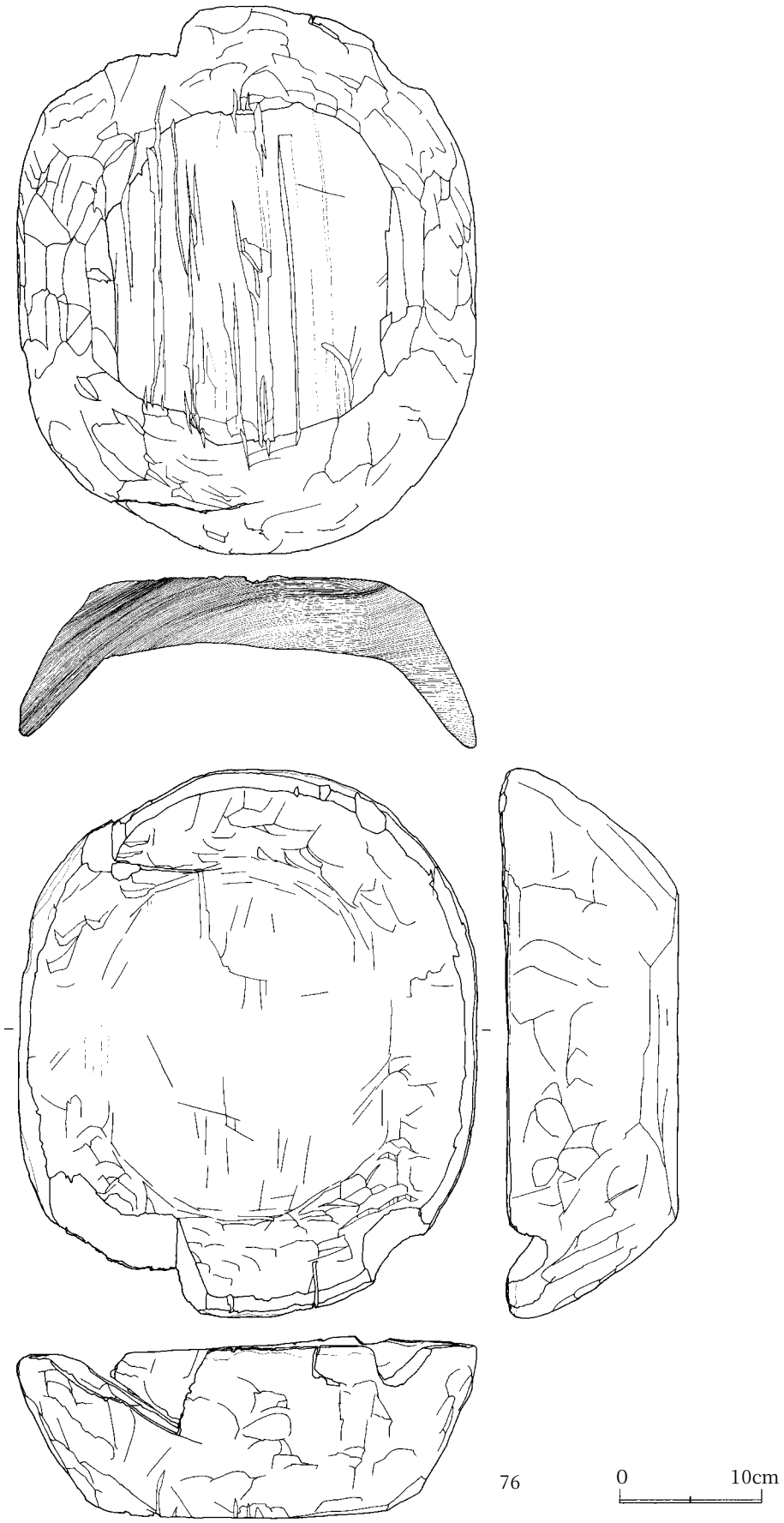
第31図　ＳＴ30出土遺物（９）



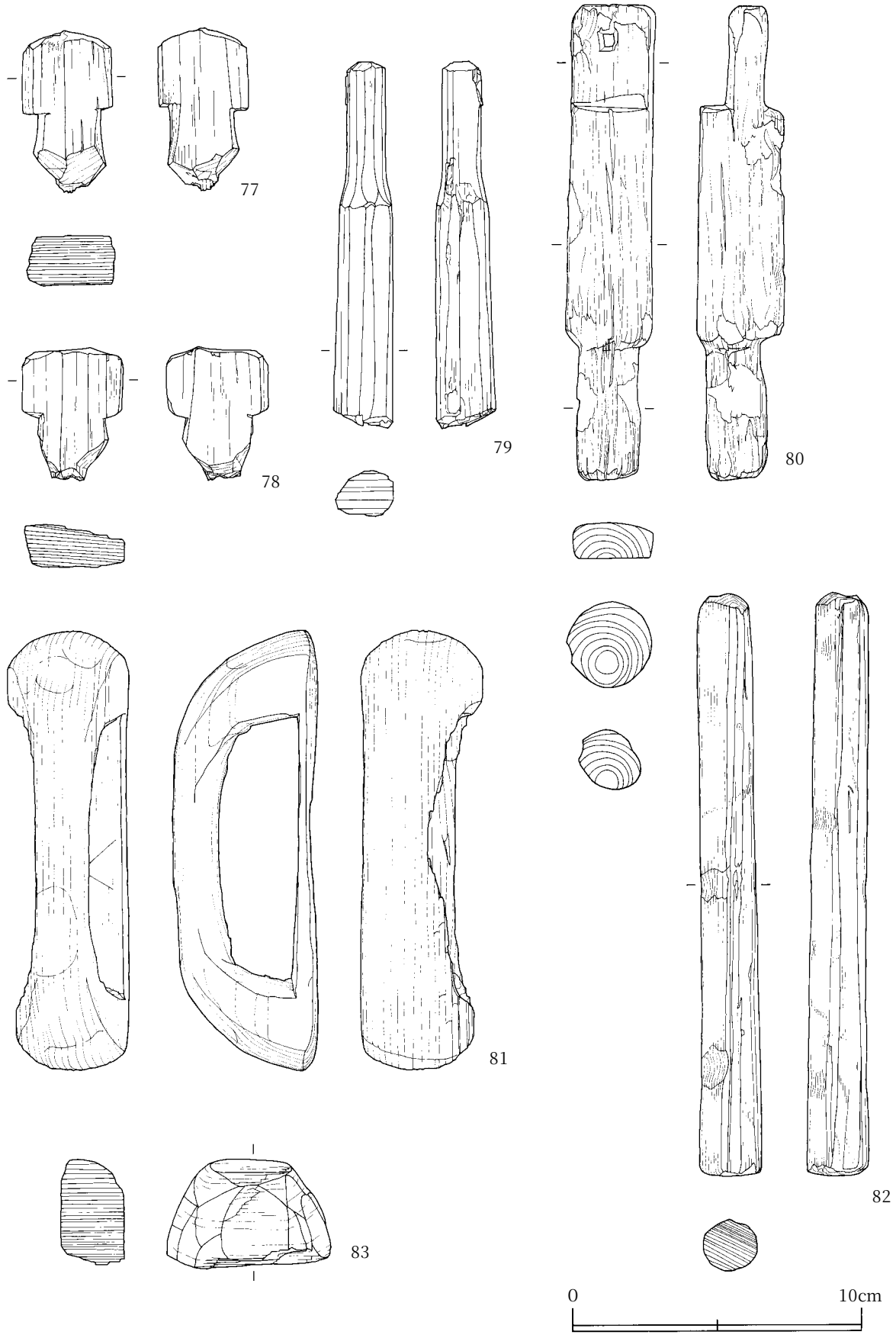
第32図　ＳＴ30出土遺物（１０）



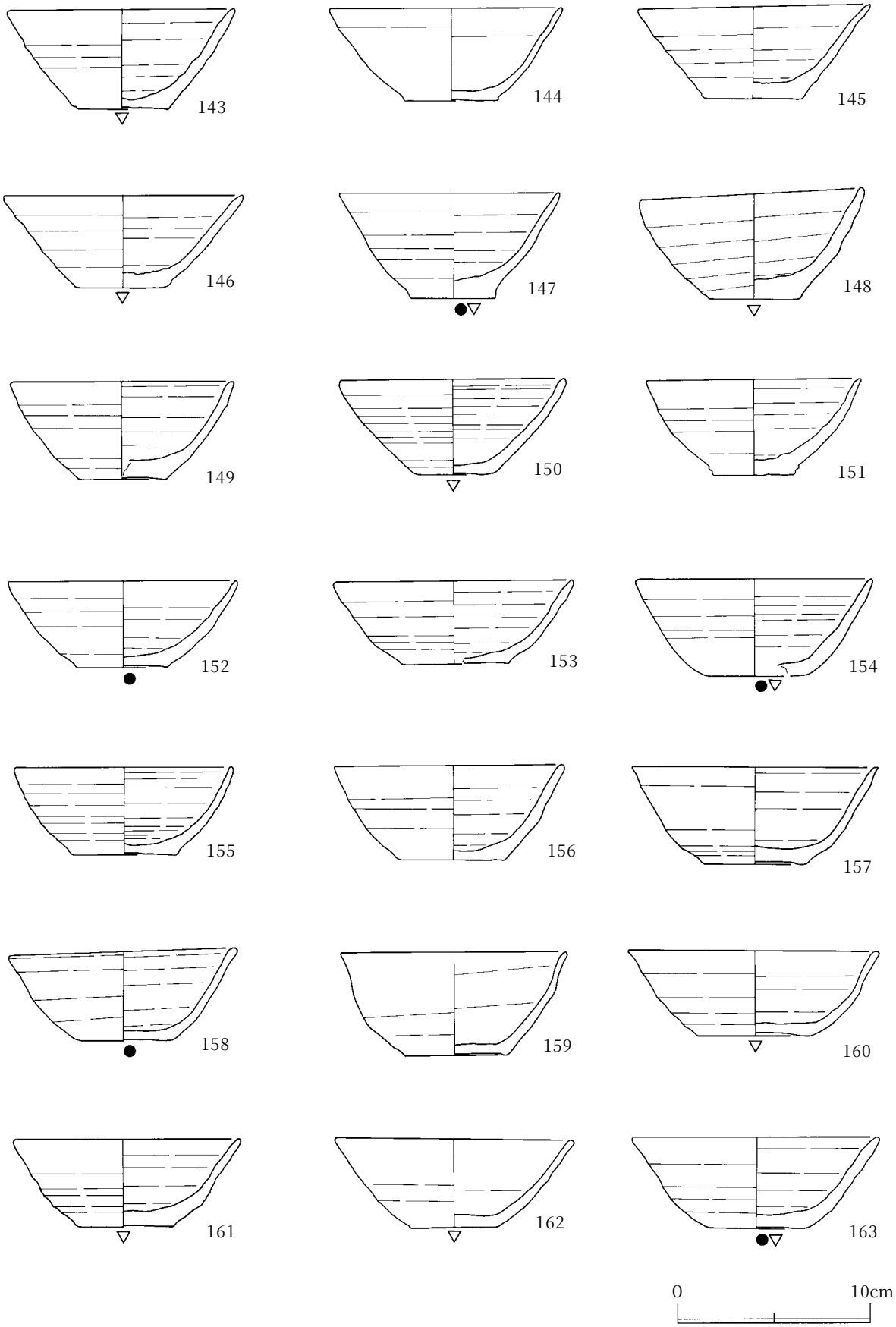
第33図　ＳＴ30出土遺物（１１）



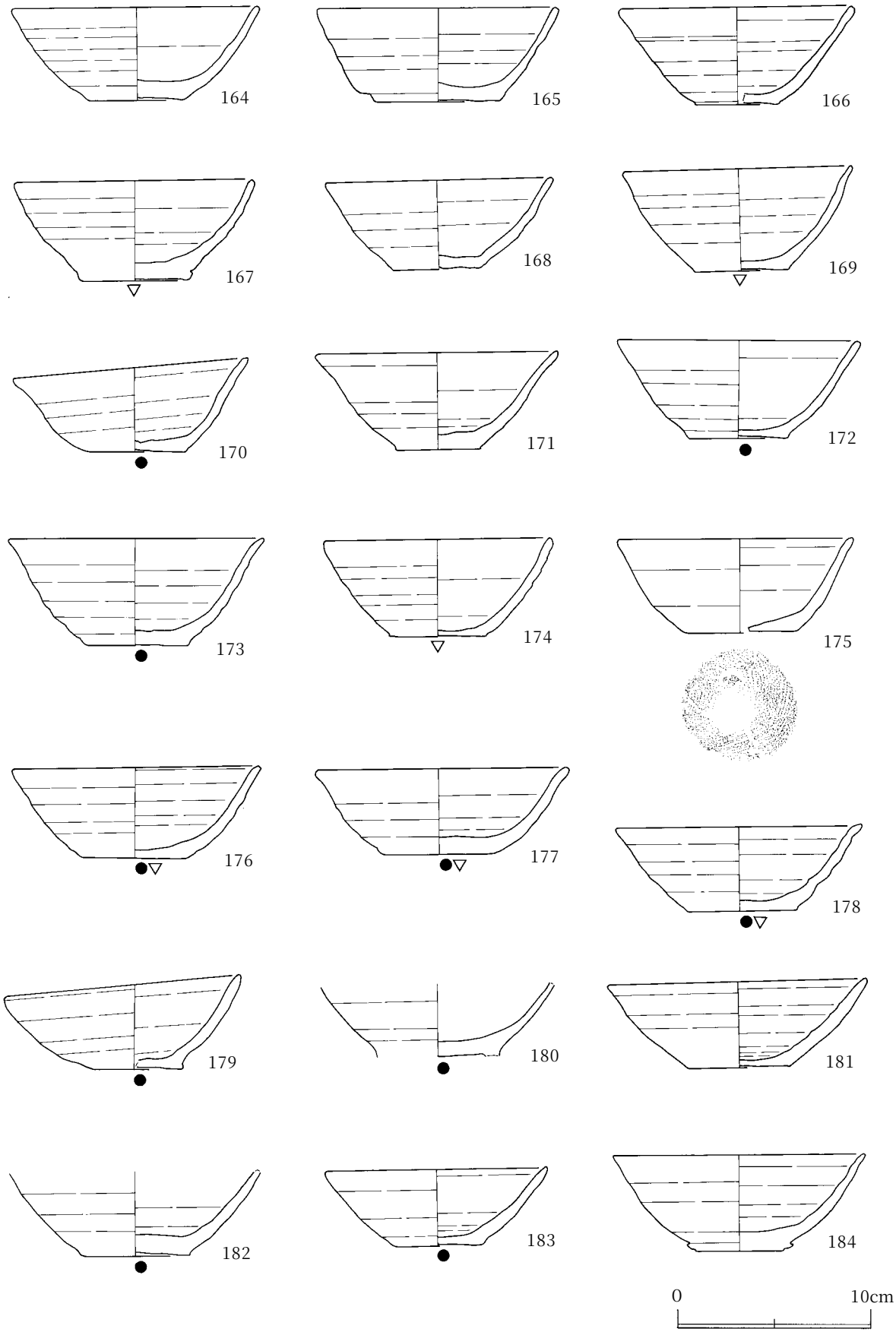
第34図　ＳＴ30出土遺物（１２）



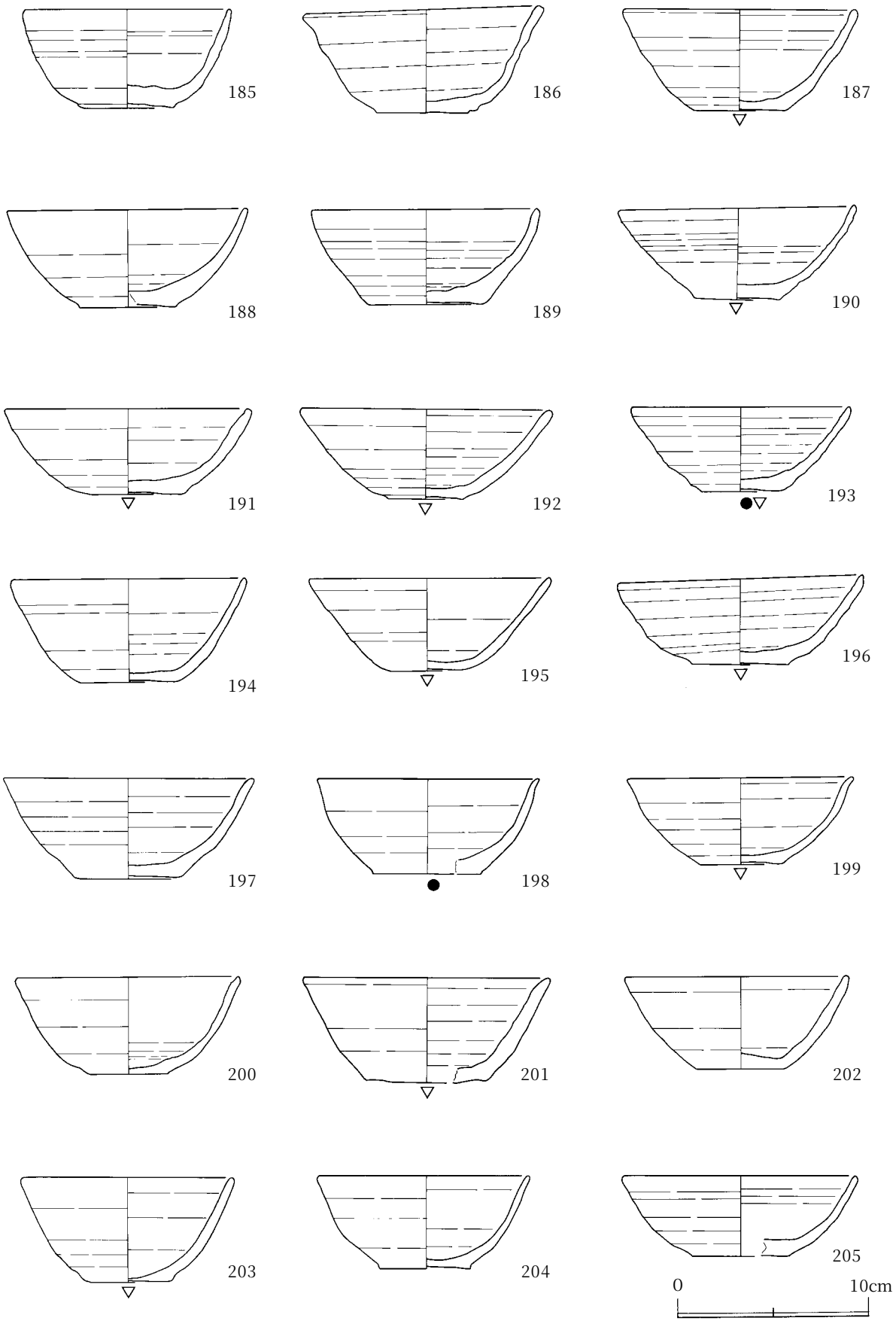
第35図　ＳＴ30出土遺物（１３）



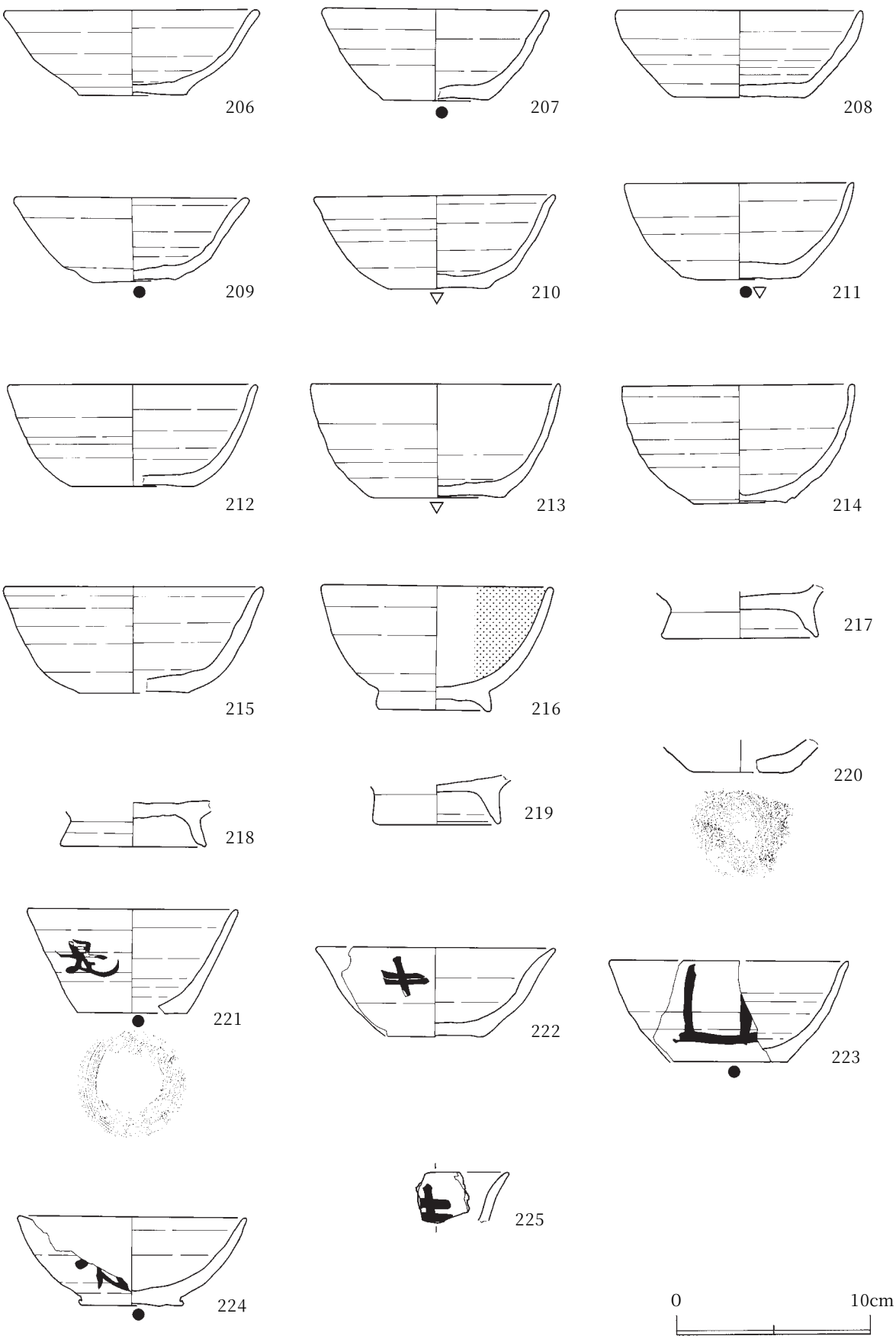
第36図　ＳＴ40出土遺物（１）



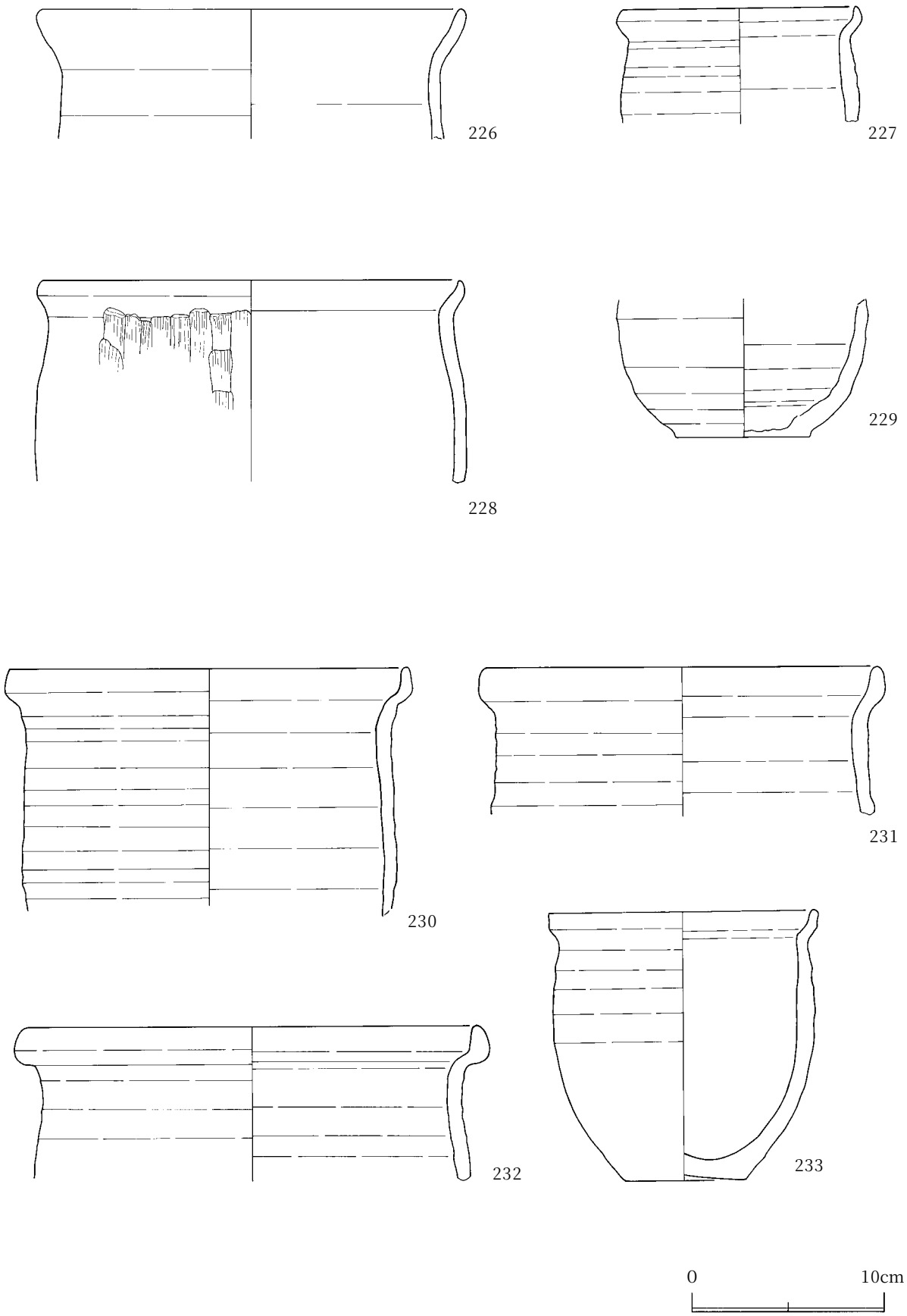
第37図　ＳＴ40出土遺物（２）



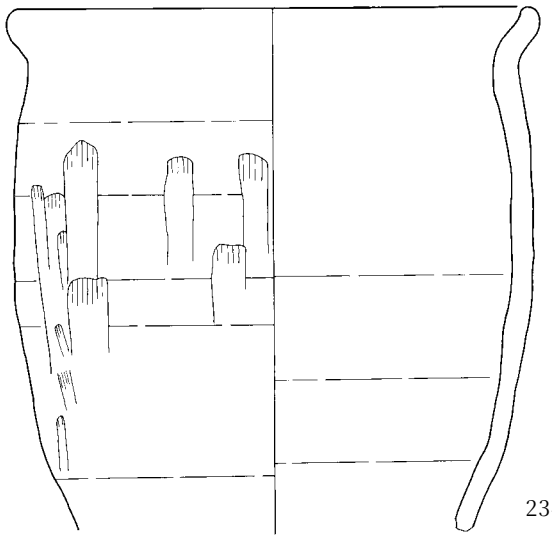
第38図　ＳＴ40出土遺物（３）

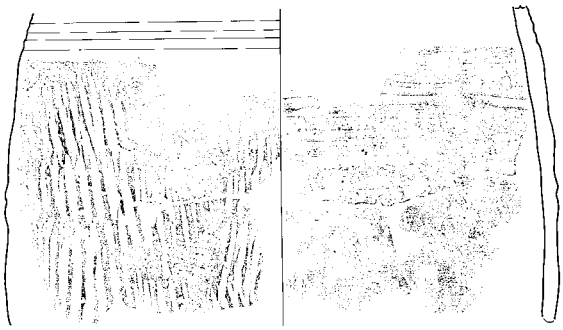


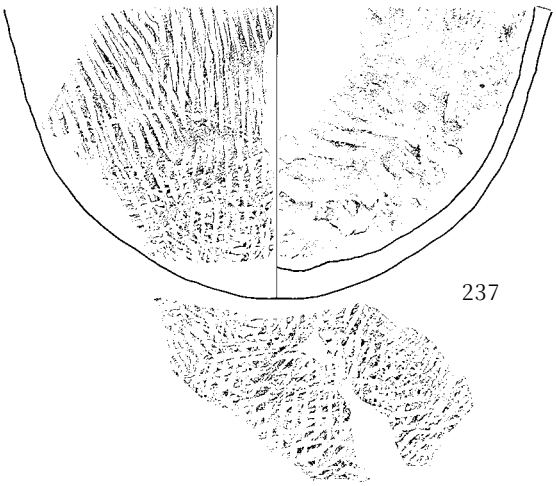
第39図　ＳＴ40出土遺物（４）

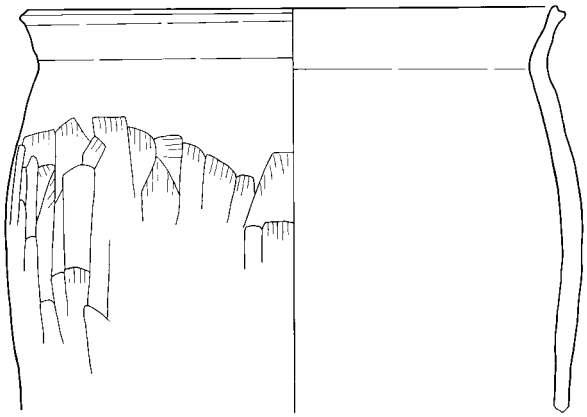


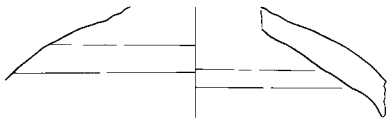
第40図　ＳＴ40出土遺物（５）

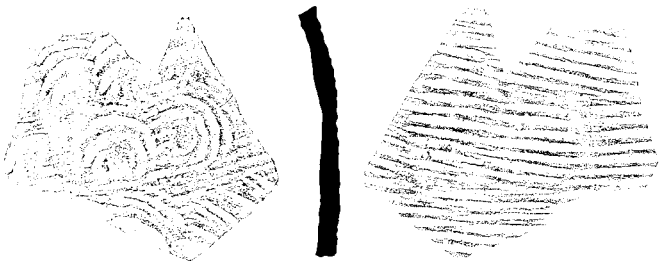


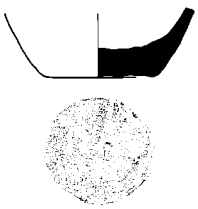






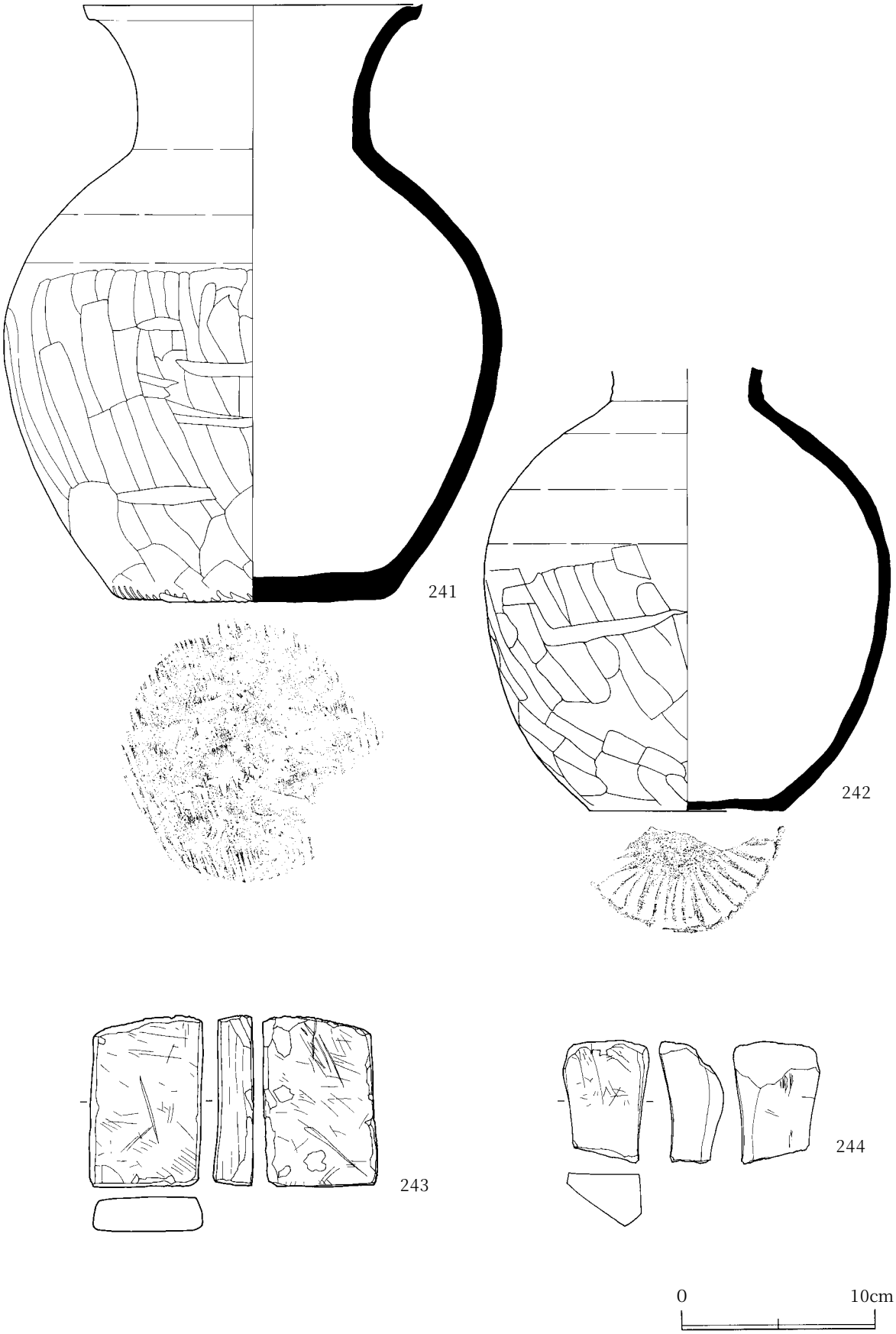




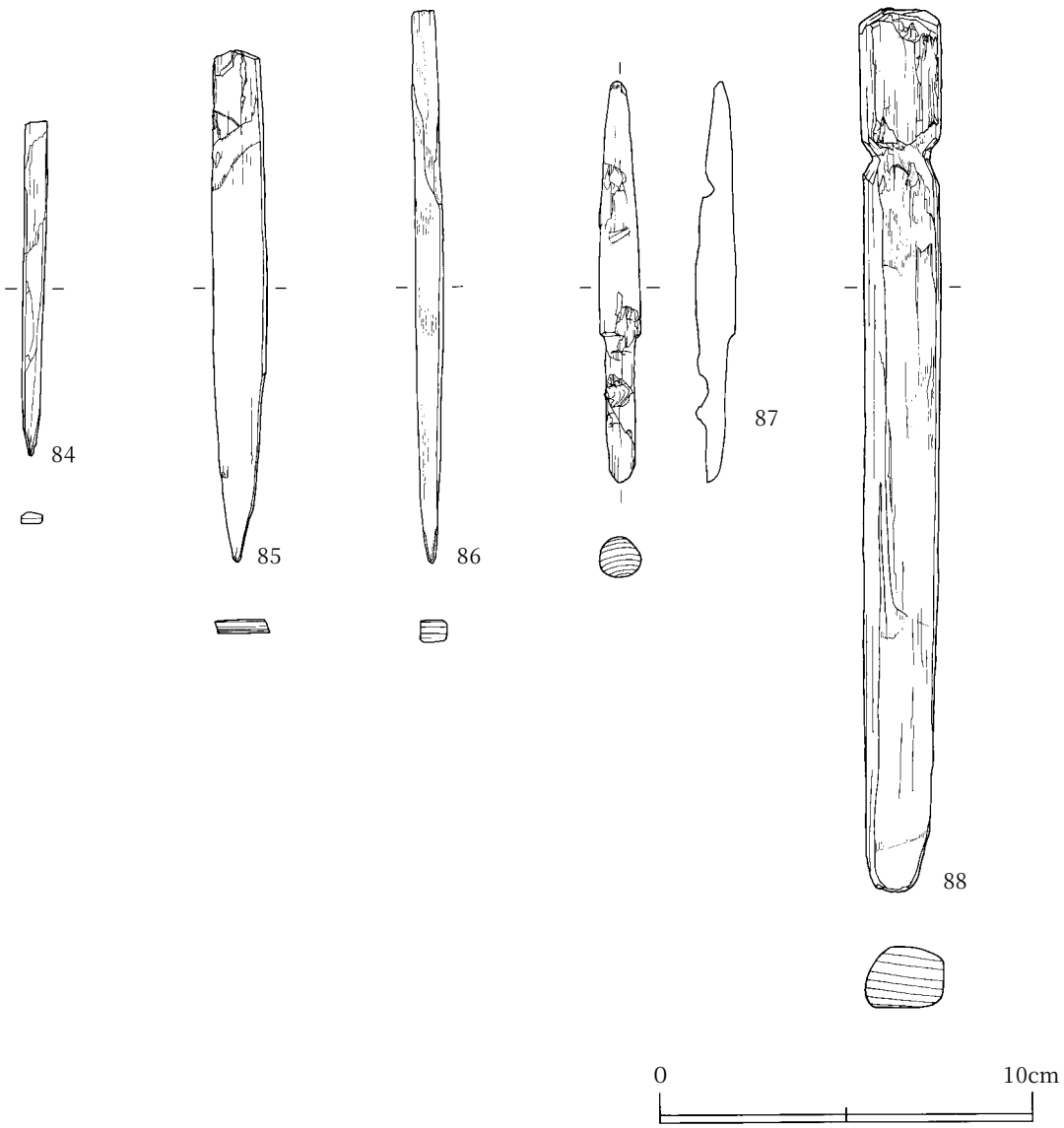


0　10cm

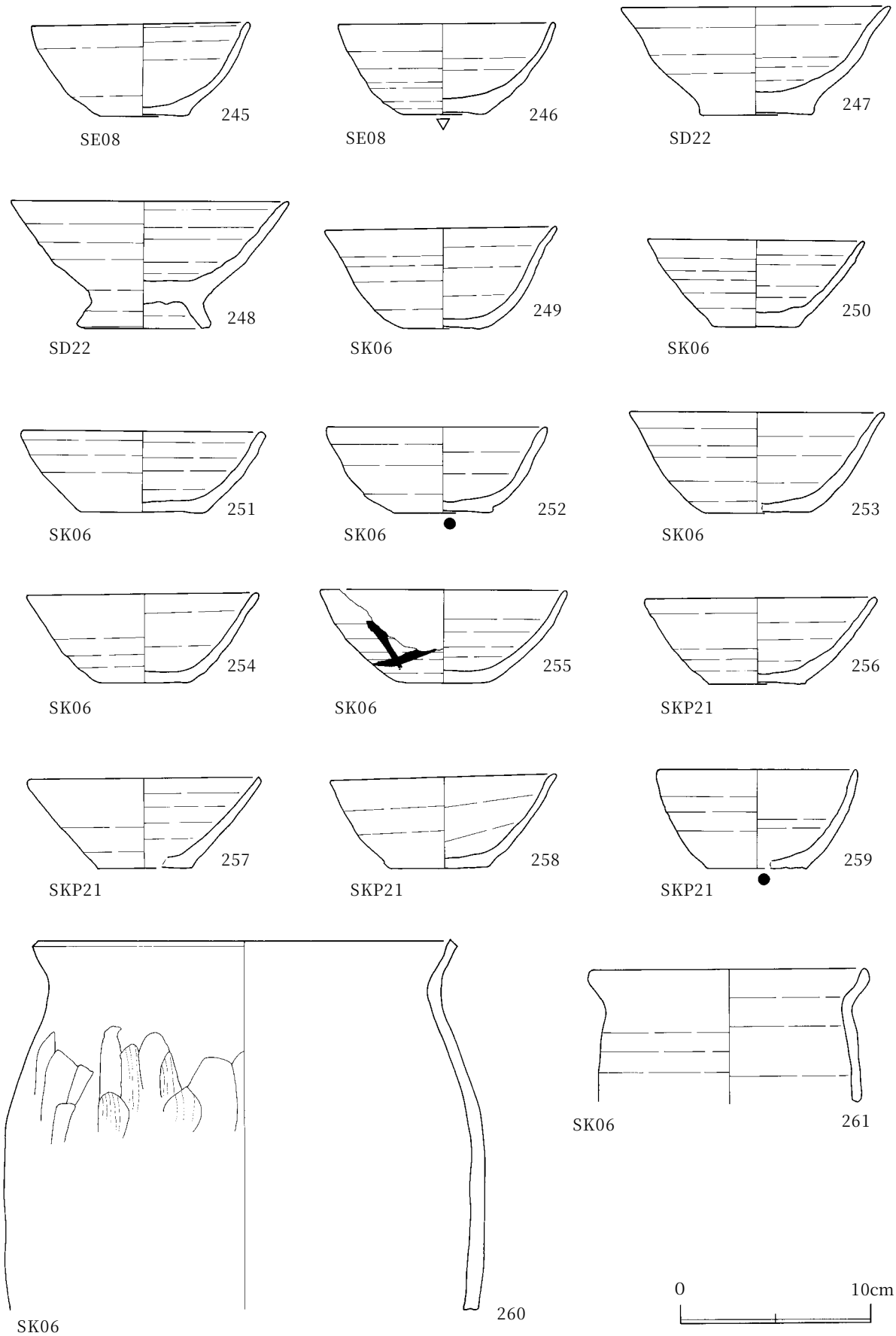
第41図　ＳＴ40出土遺物（６）



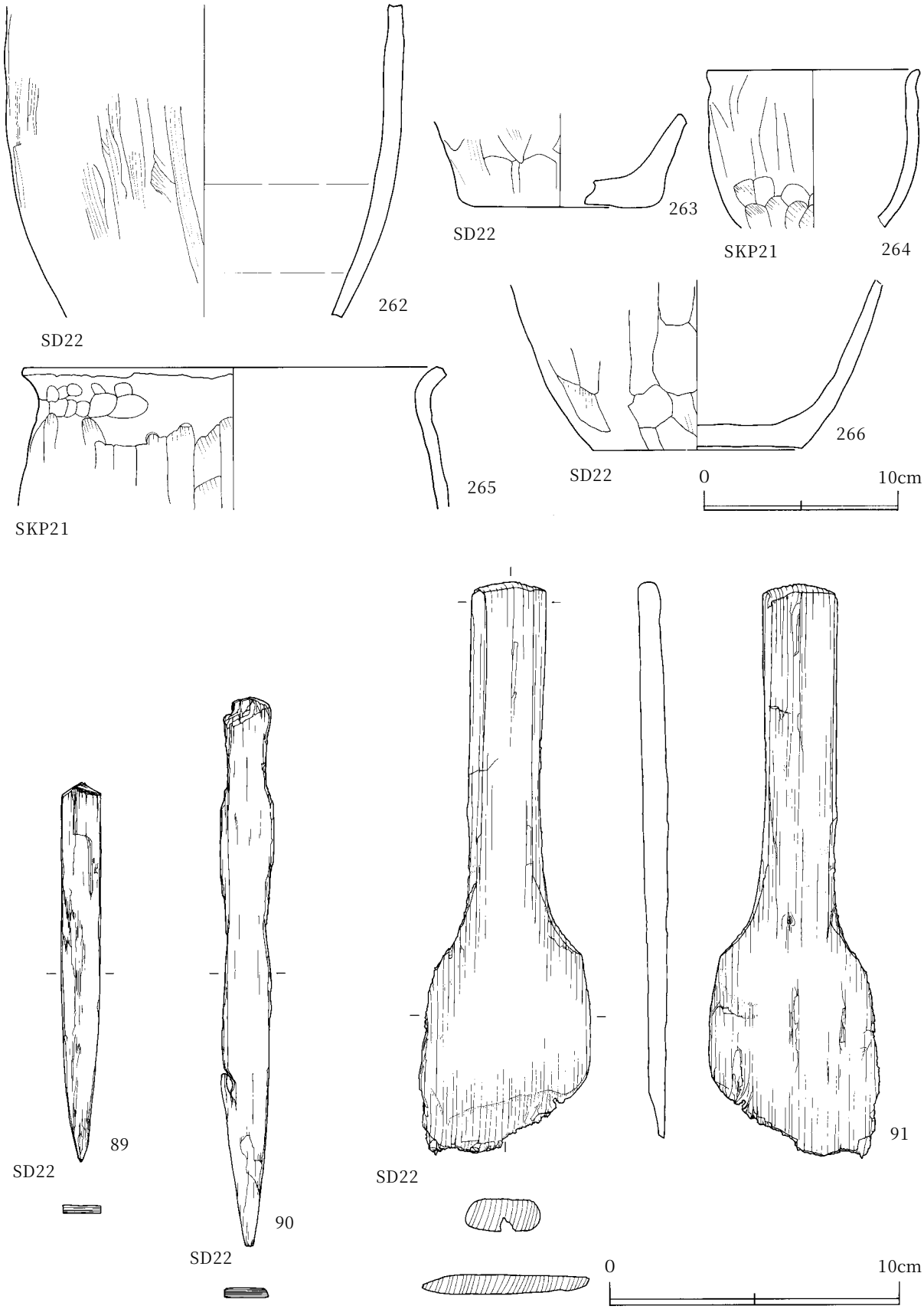
第42図　ＳＴ40出土遺物（７）



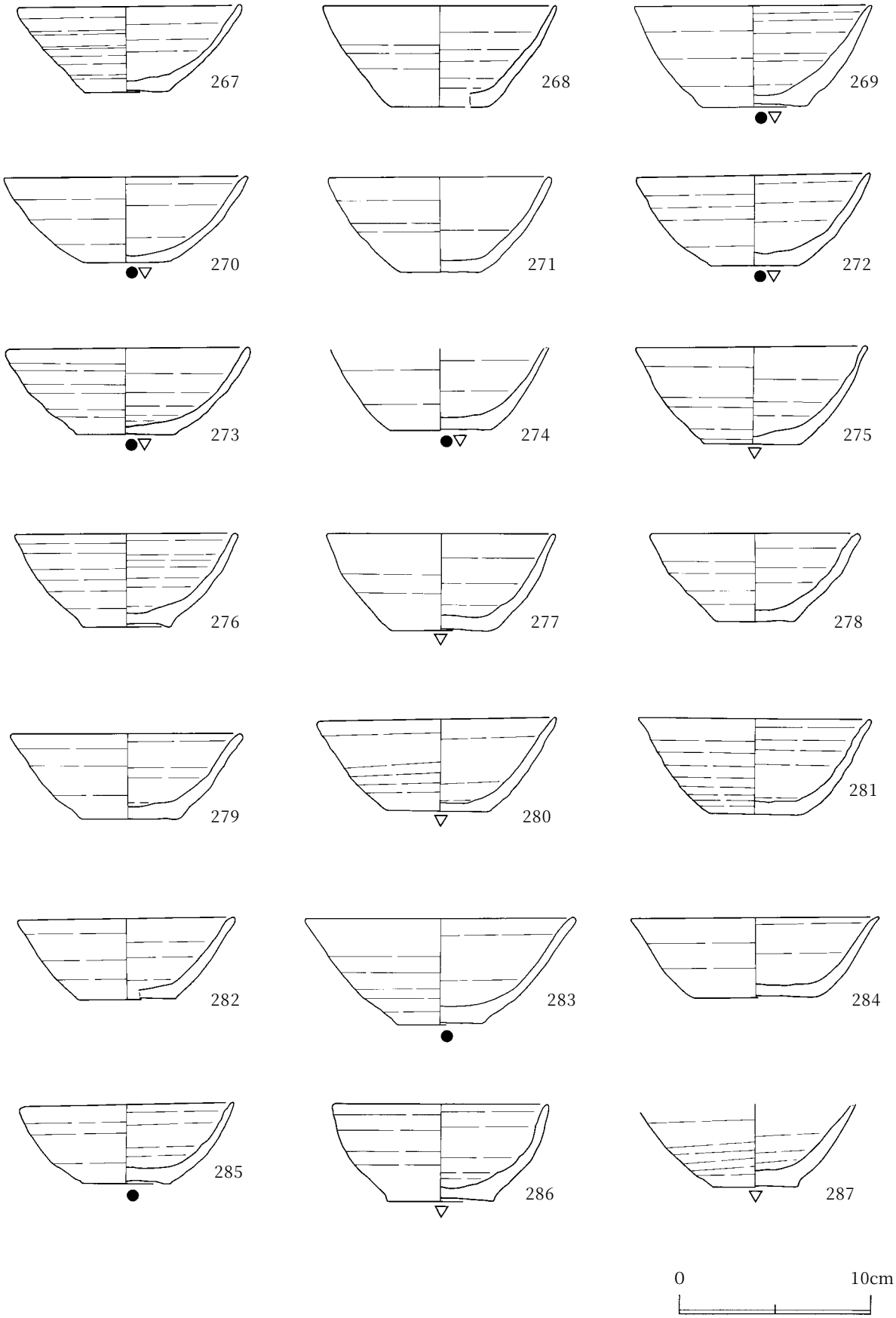
第43図　ＳＴ40出土遺物（８）



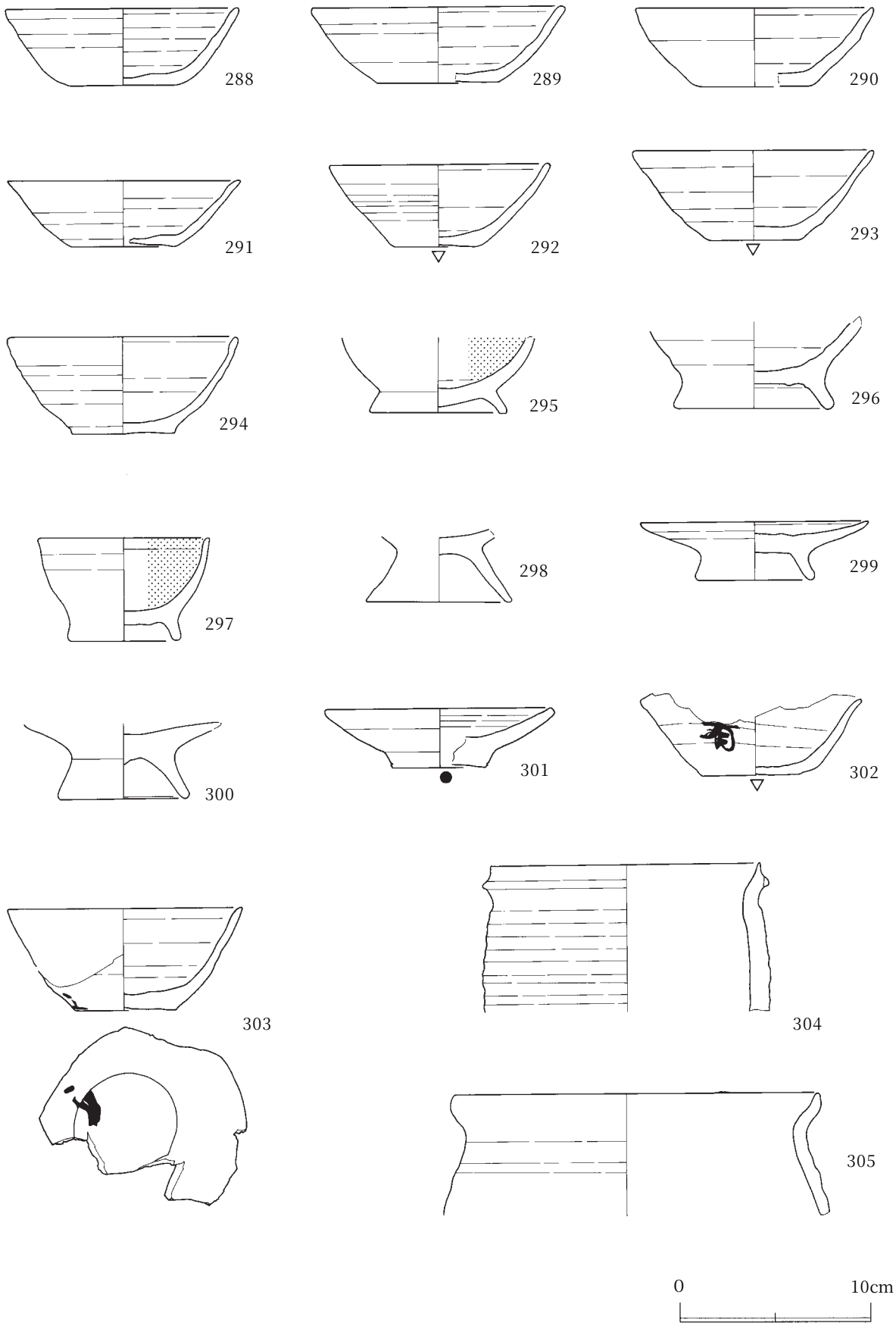
第44図　遺構内出土遺物（１）



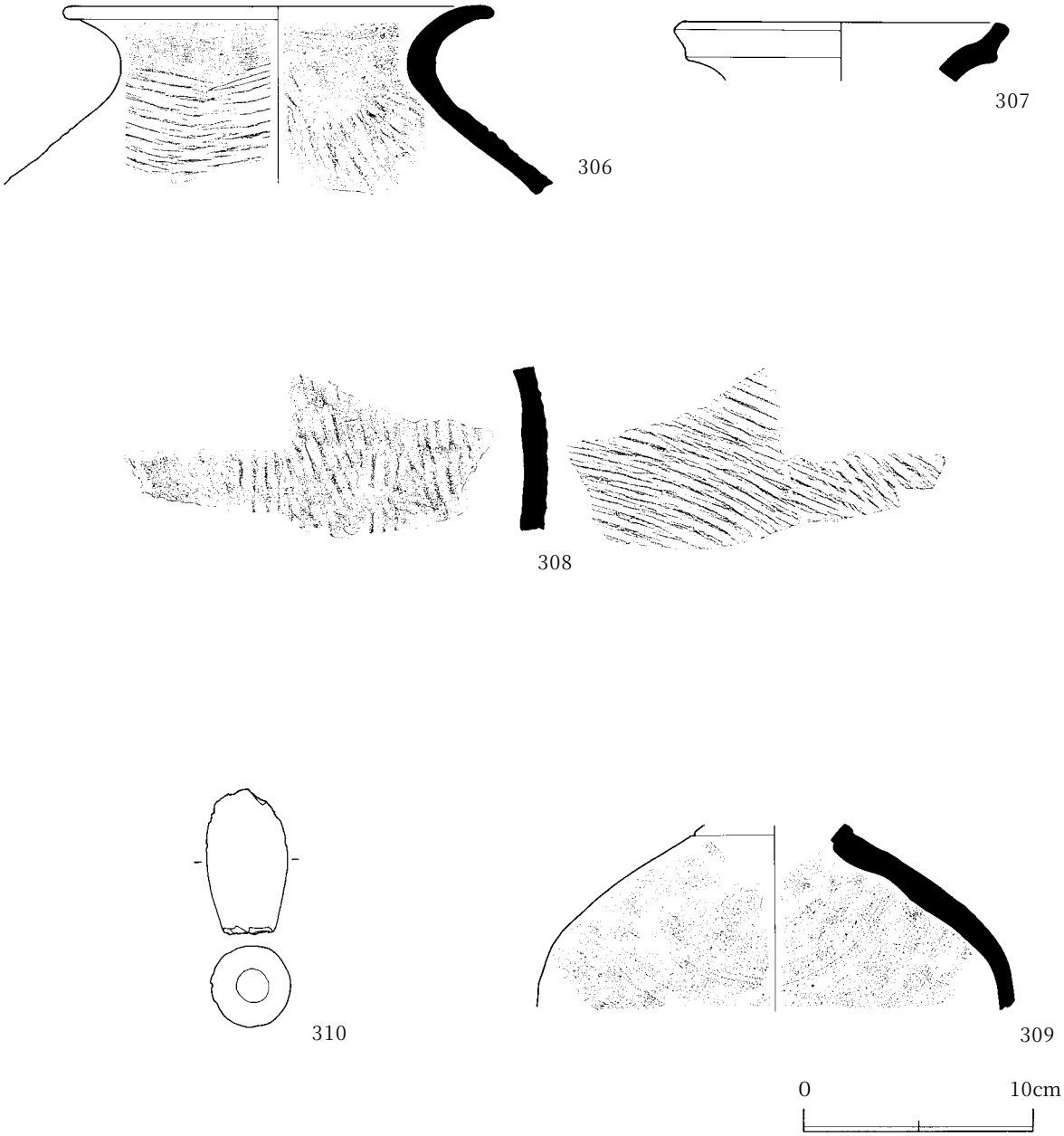
第45図　遺構内出土遺物（２）



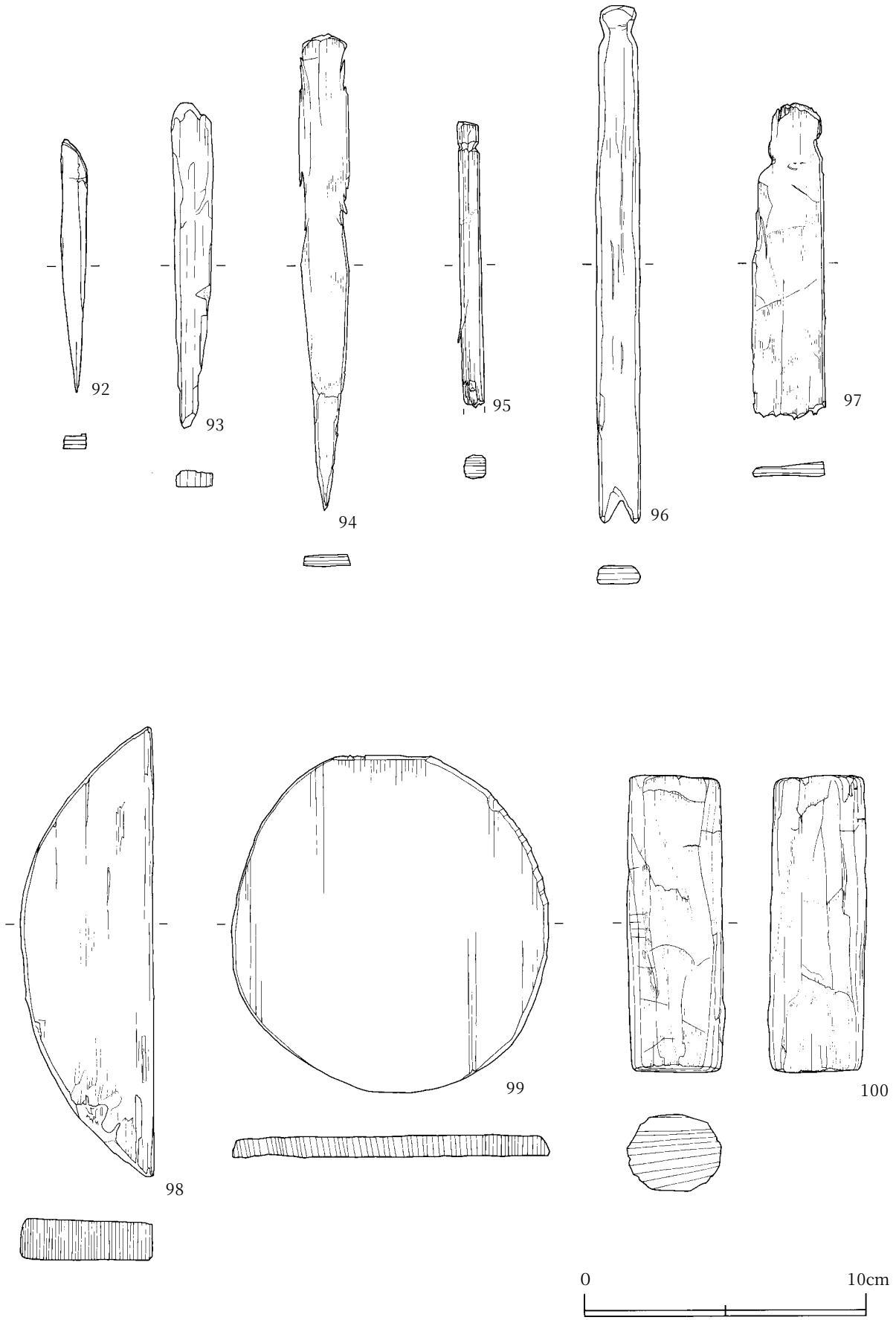
第46図　遺構外出土遺物（１）



第47図　遺構外出土遺物（２）



第48図　遺構外出土遺物（３）



第49図　遺構外出土遺物（４）

第３表－１　出土遺物一覧

（単位：cm）

出土地点	挿図－番号	種別	口径	底径	器高	油煙	口縁部打ち欠き
ST27	10－1	土師器坏	11.9	4.8	4.6	●	
	10－2	土師器坏	11.8	4.9	5.0		
	10－3	土師器坏	12.6	5.6	4.5	●	
	10－4	土師器坏	12.1	4.6	4.7	●	
	10－5	土師器坏	12.1	4.3	4.6		
	10－6	土師器坏	12.5	5.2	5.5	●	▽
	10－7	土師器坏	11.2	4.8	4.8		▽
	10－8	土師器坏	11.5	4.9	4.6	●	▽
	10－9	土師器坏	13.0	5.3	4.4		▽
	10－10	土師器坏	11.2	6.0	5.8	●	▽
	10－11	土師器坏	12.0	5.6	6.1		
	10－12	土師器坏	12.0	4.8	3.9		
	10－13	土師器坏	11.6	4.7	3.9	●	▽
	10－14	土師器坏	12.7	6.3	4.4		▽
	10－15	土師器坏	12.1	5.0	5.2		
	10－16	土師器坏	12.1	5.3	5.2		▽
	10－17	土師器坏	12.4	5.4	5.4		▽
	10－18	土師器坏	11.5	4.1	4.8		▽
	10－19	土師器坏	11.2	4.8	4.9		
	10－20	土師器坏	12.4	5.0	4.9		
	10－21	土師器坏	11.8	5.3	4.8	●	
	11－22	土師器坏	11.4	5.0	4.8		▽
	11－23	土師器坏	11.4	4.2	4.7	●	
	11－24	土師器坏	11.9	5.6	4.8	●	▽
	11－25	土師器坏	12.5	4.4	4.8		▽
	11－26	土師器坏	11.4	4.4	4.3		
	11－27	土師器坏	11.8	4.8	4.8		
	11－28	土師器坏	11.6	4.6	4.9		▽
	11－29	土師器坏	12.4	5.0	4.7		▽
	11－30	土師器坏	12.0	5.2	4.3		
	11－31	土師器坏	11.5	4.6	4.5		▽
	11－32	土師器坏	11.8	5.2	4.8		▽
	11－33	土師器坏	10.7	4.3	4.9		▽
	11－34	土師器坏	10.8	4.3	4.7		
	11－35	土師器坏	11.4	5.2	4.9		
	11－36	土師器坏	11.7	4.6	3.9		
	11－37	土師器坏	11.6	4.8	4.2		▽
	11－38	土師器坏	11.0	5.4	4.4	●	▽
	11－39	土師器坏	12.5	4.8	4.8		▽
	11－40	土師器坏	12.1	6.0	4.5	●	▽
	11－41	土師器坏	12.6	5.0	5.2	●	▽
	11－42	土師器坏	11.4	5.0	6.2	●	▽
	12－43	土師器坏	11.4	4.4	5.7		
	12－44	土師器坏	11.0	4.2	5.5		
	12－45	土師器坏	11.2	5.2	4.9		
	12－46	土師器坏	11.8	5.1	5.9	●	▽
	12－47	土師器高台付き坏	11.6	6.3	5.5		
	12－48	土師器高台付き坏	14.4	7.2	7.6		
	12－49	土師器高台付き坏	(10.0)	9.2	(4.3)		
	12－50	土師器高台付き坏	－	7.8	(3.5)		
	12－51	土師器高台付き坏	(8.2)	6.4	(2.8)		
	12－52	土師器高台付き坏	(7.0)	7.0	(3.7)		
	12－53	土師器坏	－	(5.6)	(4.1)	●	
	12－54	土師器坏	12.3	5.6	4.9		
	12－55	土師器坏	－	－	－		
	12－56	土師器坏	－	－	－		
	12－57	土師器	－	－	－		
	12－58	土師器	10.2	－	(8.2)		
	12－59	土師器	22.0	－	(5.1)		
	12－60	土師器	4.8	3.4	4.2		
	12－61	土師器	(10.8)	7.6	(6.0)		

第３表－２　出土遺物一覧

（単位：cm）

出土地点	挿図－番号	種別	口径	底径	器高	油煙	口縁部打ち欠き
ST27	12－62	土師器	11.4	－	(5.7)		
	13－63	土師器	20.4	－	(7.8)		
	13－64	土師器	19.4	－	(8.6)		
	13－65	土師器	30.0	－	(10.0)		
	13－66	土師器	(20.4)	(24.5)	－		
	13－67	須恵器	－	－	－		
	13－68	砥石	長さ（4.5）×幅3.0×厚さ1.8				
	13－69	砥石	長さ（10.5）×幅6.0×厚さ3.3				
ST30	23－70	土師器坏	11.8	5.7	5.1		
	23－71	土師器坏	13.2	4.6	5.6		
	23－72	土師器坏	11.8	4.6	5.0	●	
	23－73	土師器坏	12.3	5.0	5.0		
	23－74	土師器坏	12.7	4.6	4.8		
	23－75	土師器坏	11.2	4.4	3.8		
	23－76	土師器坏	12.2	4.4	4.9	●	
	23－77	土師器坏	11.2	4.3	5.3		▽
	23－78	土師器坏	11.8	4.9	5.7		
	23－79	土師器坏	12.5	4.6	5.3		
	23－80	土師器坏	11.5	4.5	5.3	●	▽
	23－81	土師器坏	12.9	4.8	4.5	●	▽
	23－82	土師器坏	12.0	5.2	5.2		▽
	23－83	土師器坏	12.5	4.8	5.5		▽
	23－84	土師器坏	12.2	5.2	5.5		
	23－85	土師器坏	12.0	4.0	4.5	●	
	23－86	土師器坏	12.8	6.0	4.0		
	23－87	土師器坏	12.2	4.2	4.3	●	▽
	23－88	土師器坏	12.7	4.3	4.2	●	
	23－89	土師器坏	13.2	5.2	4.6		▽
	23－90	土師器坏	12.6	5.2	4.5		
	24－91	土師器坏	12.6	5.2	4.6		
	24－92	土師器坏	11.3	4.7	4.2		
	24－93	土師器坏	14.6	5.4	5.4		
	24－94	土師器坏	12.1	4.3	4.4		
	24－95	土師器坏	12.2	4.2	4.7		
	24－96	土師器坏	12.7	5.0	4.5		▽
	24－97	土師器坏	11.5	4.4	4.5		
	24－98	土師器坏	11.2	4.5	4.0	●	▽
	24－99	土師器坏	12.2	4.8	4.2		▽
	24－100	土師器坏	12.0	3.8	5.1	●	
	24－101	土師器坏	11.3	4.6	5.2		▽
	24－102	土師器坏	11.2	4.3	4.9		
	24－103	土師器坏	11.4	4.6	4.2	●	
	24－104	土師器坏	14.0	5.4	5.2		▽
	24－105	土師器坏	13.4	5.0	4.6	●	
	24－106	土師器坏	11.8	5.2	5.0	●	▽
	24－107	土師器坏	11.5	4.4	4.4		
	24－108	土師器坏	11.9	4.8	4.6		
	24－109	土師器坏	11.4	4.8	5.6	●	
	24－110	土師器坏	11.5	4.1	4.7	●	
	24－111	土師器坏	11.2	4.4	4.6		
	25－112	土師器坏	11.6	5.0	4.9		
	25－113	土師器坏	13.0	4.8	5.4		
	25－114	土師器坏	11.8	4.4	4.4		
	25－115	土師器坏	12.0	4.4	4.6	●	
	25－116	土師器坏	12.0	3.8	5.0		▽
	25－117	土師器坏	12.0	5.3	5.1	●	
	25－118	土師器坏	11.8	4.1	4.4	●	
	25－119	土師器坏	11.6	4.9	4.9		▽
	25－120	土師器坏	11.5	5.6	4.7		▽
	25－121	土師器坏	14.5	6.6	6.2		▽
	25－122	土師器坏	11.0	4.4	5.0		
	25－123	土師器坏	11.5	4.9	4.8		▽
	25－124	土師器坏	11.6	4.3	4.7		

第３表－３　出土遺物一覧

（単位：cm）

出土地点	挿図－番号	種別	口径	底径	器高	油煙	口縁部打ち欠き
ST30	25－125	土師器坏	11.5	4.6	4.7	●	▽
	25－126	土師器坏	11.4	5.2	4.3		▽
	25－127	土師器坏	12.4	5.6	4.5	●	▽
	25－128	土師器高台付き坏	(5.6)	6.7	(2.6)		
	25－129	土師器高台付き坏	－	8.2	(2.8)	●	
	25－130	土師器皿	14.2	5.8	2.7	●	
	25－131	須恵器　？	－	－	－		
	26－132	土師器	12.0	－	(8.0)		
	26－133	土師器	22.6	－	(6.6)		
	26－134	土師器	13.4	－	(7.0)		
	26－135	土師器	17.0	－	(13.7)		
	26－136	土師器	21.8	－	(6.8)		
	26－137	土師器	21.4	－	(9.9)		
	26－138	土師器	(20.0)	12.6	(6.0)		
	26－139	土師器	(7.0)	4.8	(3.6)		
	26－140	土師器	(11.6)	6.6	(5.4)		
	26－141	土師器壺	8.6	－	(5.5)		
	26－142	砥石	長さ（6.6）×幅5.8×厚さ4.2				
ST40	36－143	土師器坏	11.9	4.8	5.2		▽
	36－144	土師器坏	12.0	4.9	4.8		
	36－145	土師器坏	12.2	5.0	4.8		
	36－146	土師器坏	12.5	5.0	4.9		▽
	36－147	土師器坏	11.4	4.5	5.5	●	▽
	36－148	土師器坏	11.7	4.6	5.5		▽
	36－149	土師器坏	11.6	4.6	5.1		
	36－150	土師器坏	11.8	4.4	5.0		▽
	36－151	土師器坏	11.2	4.0	5.0		
	36－152	土師器坏	12.0	4.8	4.6	●	
	36－153	土師器坏	12.6	5.6	4.4		
	36－154	土師器坏	12.4	5.6	5.1	●	▽
	36－155	土師器坏	11.4	5.4	4.6		
	36－156	土師器坏	12.0	5.5	5.0		
	36－157	土師器坏	12.8	5.4	5.1		
	36－158	土師器坏	11.9	5.0	4.7	●	
	36－159	土師器坏	11.7	5.5	5.4		
	36－160	土師器坏	13.1	5.8	4.5		▽
	36－161	土師器坏	11.8	5.1	4.6		▽
	36－162	土師器坏	12.5	4.6	4.7		▽
	36－163	土師器坏	12.9	5.2	4.7	●	▽
	37－164	土師器坏	12.8	5.0	4.9		
	37－165	土師器坏	12.6	6.4	4.9		
	37－166	土師器坏	12.3	4.4	5.1		
	37－167	土師器坏	12.4	5.8	5.2		▽
	37－168	土師器坏	11.9	4.6	4.6		
	37－169	土師器坏	12.0	4.8	5.3		▽
	37－170	土師器坏	12.2	5.0	4.4	●	
	37－171	土師器坏	12.7	4.4	5.1		
	37－172	土師器坏	12.6	5.0	5.1	●	
	37－173	土師器坏	13.4	5.2	5.6	●	
	37－174	土師器坏	12.0	5.0	5.1		▽
	37－175	土師器坏	12.3	5.8	4.9		
	37－176	土師器坏	12.9	5.4	4.7	●	▽
	37－177	土師器坏	13.1	5.6	4.5	●	▽
	37－178	土師器坏	12.8	5.3	4.5	●	▽
	37－179	土師器坏	12.3	4.7	4.4	●	
	37－180	土師器坏	(12.2)	－	(3.8)	●	
	37－181	土師器坏	13.5	5.4	4.5		
	37－182	土師器坏	(13.0)	5.7	(4.4)	●	
	37－183	土師器坏	11.6	4.2	4.0	●	
	37－184	土師器坏	13.2	4.6	5.0		
	38－185	土師器坏	11.0	4.6	5.1		
	38－186	土師器坏	12.7	5.3	5.5		

第３表－４　出土遺物一覧

（単位：cm）

出土地点	挿図－番号	種別	口径	底径	器高	油煙	口縁部打ち欠き
ST40	38－187	土師器坏	12.3	4.9	5.3		▽
	38－188	土師器坏	12.6	5.1	5.1		
	38－189	土師器坏	12.0	6.0	5.1		
	38－190	土師器坏	12.5	4.4	4.8		▽
	38－191	土師器坏	13.0	4.6	4.5		▽
	38－192	土師器坏	13.3	4.0	4.8		▽
	38－193	土師器坏	11.6	4.3	4.5	●	▽
	38－194	土師器坏	12.3	4.9	5.4		
	38－195	土師器坏	12.7	4.2	4.9		▽
	38－196	土師器坏	13.0	5.0	4.5		▽
	38－197	土師器坏	13.2	5.6	5.3		
	38－198	土師器坏	11.6	5.7	5.0	●	
	38－199	土師器坏	11.9	4.4	4.6		▽
	38－200	土師器坏	11.8	4.2	5.1		
	38－201	土師器坏	13.0	6.2	5.5		▽
	38－202	土師器坏	11.8	4.6	4.9		
	38－203	土師器坏	11.2	4.7	5.5		▽
	38－204	土師器坏	11.2	4.8	4.9		
	38－205	土師器坏	12.4	5.2	4.3		
	39－206	土師器坏	13.2	5.6	4.4		
	39－207	土師器坏	11.8	5.5	4.8	●	
	39－208	土師器坏	12.8	6.6	4.5		
	39－209	土師器坏	12.2	4.3	4.4	●	
	39－210	土師器坏	12.5	5.1	4.9		▽
	39－211	土師器坏	11.9	6.1	5.0	●	▽
	39－212	土師器坏	12.9	6.4	5.3		
	39－213	土師器坏	12.9	6.9	5.9		▽
	39－214	土師器坏	12.0	4.9	6.1		
	39－215	土師器坏	13.5	5.8	5.5		
	39－216	高台付き坏	12.6	6.0	6.5		
	39－217	高台付き坏	(8.6)	8.2	(2.8)		
	39－218	高台付き坏	(7.5)	7.6	(2.9)		
	39－219	高台付き坏	－	6.6	(2.5)		
	39－220	土師器坏	(8.0)	5.2	(1.7)		
	39－221	土師器坏	10.9	6.7	5.4	●	
	39－222	土師器坏	12.4	5.0	4.6		
	39－223	土師器坏	12.4	6.2	5.2	●	
	39－224	土師器坏	11.8	5.2	4.7	●	
	39－225	土師器坏	－	－	－		
	40－226	土師器	21.8	－	(6.7)		
	40－227	土師器	12.8	－	(6.0)		
	40－228	土師器	22.0	－	(11.5)		
	40－229	土師器	(12.9)	7.0	(7.3)		
	40－230	土師器	20.5	－	(12.6)		
	40－231	土師器	20.3	－	(7.8)		
	40－232	土師器	23.4	－	(8.1)		
	40－233	土師器	13.8	6.4	(14.0)		
	41－234	土師器	20.2	－	(20.8)		
	41－235	土師器	20.6	－	(16.1)		
	41－236	土師器	(19.4)	－	(12.5)		
	41－237	土師器	(21.6)	－	(11.6)		
	41－238	土師器壺	(5.2)	－	(4.4)		
	41－239	須恵器	－	－	－		
	41－240	須恵器壺？	(7.6)	4.6	(2.7)		
	42－241	須恵器壺	17.5	13.4	38.0		
	42－242	須恵器壺	(7.8)	10.2	(22.8)		
	42－243	砥石	長さ（6.0）×幅5.8×厚さ1.8				
	42－244	砥石	長さ（3.3）×幅3.6×厚さ2.7				
SE08	44－245	土師器坏	11.5	4.8	4.9		
	44－246	土師器坏	11.5	4.5	4.8		▽
SD22	44－247	土師器坏	14.2	6.1	5.7		
	44－248	土師器坏	14.6	7.0	6.7		

第３表－５　出土遺物一覧

（単位：cm）

出土地点	挿図－番号	種別	口径	底径	器高	油煙	口縁部打ち欠き
SK06	44－249	土師器坏	12.3	4.2	5.2		
	44－250	土師器坏	11.4	4.4	4.6		
	44－251	土師器坏	12.8	6.6	4.3		
	44－252	土師器坏	11.6	5.1	4.5	●	
	44－253	土師器坏	13.4	5.6	5.3		
	44－254	土師器坏	12.2	4.6	4.7		
	44－255	土師器坏	12.9	5.0	4.9		
SKP21	44－256	土師器坏	12.2	5.1	4.5		
	44－257	土師器坏	12.0	4.9	4.8		
	44－258	土師器坏	11.8	5.2	4.8		
	44－259	土師器坏	10.6	5.2	5.3	●	
SK06	44－260	土師器	22.4	－	(19.4)		
	44－261	土師器	14.8	－	(7.0)		
SD22	45－262	土師器	(20.4)	－	(16.1)		
	45－263	土師器	(13.0)	9.0	(4.8)		
SKP21	45－264	土師器	10.8	－	(8.1)		
	45－265	土師器	20.8	－	(7.3)		
SD22	45－266	土師器	(21.2)	10.8	(8.8)		
遺構外－LR49	46－267	土師器	11.8	4.2	4.5		
LO50	46－268	土師器	12.2	5.0	5.3		
LT51	46－269	土師器	12.2	5.5	5.3	●	▽
ME53	46－270	土師器	12.8	4.6	4.5	●	▽
LT51	46－271	土師器	11.5	4.1	5.0		
LS53	46－272	土師器	12.3	4.8	4.7	●	▽
LP50	46－273	土師器	12.8	5.2	4.5	●	▽
LS52	46－274	土師器	(11.4)	5.2	(4.3)	●	▽
－	46－275	土師器	12.2	5.6	5.1		▽
LP49	46－276	土師器	11.8	4.6	4.9		
－	46－277	土師器	11.8	5.2	5.1		▽
LQ49	46－278	土師器	11.0	4.0	4.6		
LT51	46－279	土師器	12.2	5.0	4.5		
LT51	46－280	土師器	12.5	5.3	4.8		▽
LT51	46－281	土師器	12.2	4.9	5.1		
LS52	46－282	土師器	11.4	5.1	4.3		
LT51	46－283	土師器	14.0	4.5	5.6	●	
LS52	46－284	土師器	12.9	6.0	4.2		
LQ49	46－285	土師器	11.2	4.6	4.2	●	
－	46－286	土師器	11.3	5.6	5.1		▽
LP49	46－287	土師器	－	4.4	(4.4)		▽
LO49	47－288	土師器	12.2	5.6	4.0		
LS52	47－289	土師器	13.2	6.4	4.0		
LS52	47－290	土師器	12.4	5.8	4.1		
LS52	47－291	土師器	12.2	5.4	3.5		
LS53	47－292	土師器	11.5	4.6	4.2		▽
LT51	47－293	土師器	12.4	4.8	4.7		▽
LR49	47－294	土師器	12.0	5.4	5.1		
LP48	47－295	高台付き坏	(10.0)	7.2	(5.0)		
範確トレンチ	47－296	高台付き坏	－	8.0	(4.5)		
ME53	47－297	高台付き坏	9.0	6.0	5.4		
LO50	47－298	高台付き坏	(5.9)	7.6	(3.9)		
MC49	47－299	高台付き皿	12.0	6.2	3.1		
LQ49	47－300	高台付き皿	－	6.8	(3.9)		
範確トレンチ	47－301	土師器皿	12.0	4.8	3.1	●	
－	47－302	土師器坏	11.6	5.6	4.4		▽
LP50	47－303	土師器坏	12.2	5.2	5.3		
LQ50	47－304	土師器	14.0	－	(7.7)		
LS46	47－305	土師器	20.0	－	(6.4)		
LP49	48－306	須恵器壺	18.8	－	(7.7)		
LR52	48－307	須恵器壺	13.7	－	(2.5)		
LS・LQ48	48－308	須恵器壺	－	－	－		
LR48	48－309	須恵器壺	(6.2)	－	(8.1)		
MC49	48－310	土錘	長さ6.0×直径3.3、重さ67.5g				

第４表－１　出土木製品一覧

（単位：cm）

出土地点	挿図－番号	種別	長さ	幅	厚さ	樹種
ＳＴ27	14－1	斎串Ａ	12.1	1.2	0.5	スギ科スギ属スギ
	14－2	斎串Ａ	12.7	1.4	0.5	スギ科スギ属スギ
	14－3	斎串Ａ	13.1	1.4	0.4	スギ科スギ属スギ
	14－4	斎串Ａ	10.5	1.5	0.5	スギ科スギ属スギ
	14－5	斎串Ａ	13.3	0.7	0.4	スギ科スギ属スギ
	14－6	斎串Ａ	12.8	1.2	0.4	スギ科スギ属スギ
	14－7	斎串Ａ	12.7	1.2	0.3	スギ科スギ属スギ
	14－8	斎串Ａ	12.1	1.2	0.4	スギ科スギ属スギ
	14－9	斎串Ａ	12.0	1.5	0.6	スギ科スギ属スギ
	14－10	斎串Ａ	12.9	0.9	0.5	スギ科スギ属スギ
	14－11	斎串Ａ	12.8	1.3	0.5	スギ科スギ属スギ
	14－12	斎串Ａ	13.2	1.3	0.3	スギ科スギ属スギ
	14－13	斎串Ａ	13.3	1.1	0.3	スギ科スギ属スギ
	14－14	斎串Ａ	10.0	1.5	0.3	スギ科スギ属スギ
	15－15	斎串Ａ	14.5	1.5	0.4	スギ科スギ属スギ
	15－16	斎串Ａ	12.6	1.0	0.3	スギ科スギ属スギ
	15－17	斎串Ａ	15.8	1.2	0.4	スギ科スギ属スギ
	15－18	斎串Ａ	15.8	1.3	0.5	スギ科スギ属スギ
	15－19	斎串Ａ	16.3	1.7	0.3	スギ科スギ属スギ
	15－20	斎串Ｂ	19.1	1.9	0.3	スギ科スギ属スギ
	15－21	斎串Ｂ	18.6	1.7	0.5	スギ科スギ属スギ
	15－22	斎串Ｂ	18.1	2.1	0.4	スギ科スギ属スギ
	15－23	斎串Ｂ	19.0	1.9	0.6	スギ科スギ属スギ
	16－24	斎串Ｃ	45.0	1.0	0.8	スギ科スギ属スギ
	16－25	斎串Ｃ	29.5	2.1	1.9	スギ科スギ属スギ
	16－26	ヤス状木製品	長さ10.8、直径1.0			ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ
	16－27	箆	21.5	3.3	1.1	スギ科スギ属スギ
	16－28	箆	15.6	3.0	0.6	スギ科スギ属スギ
	17－29	下駄	19.4	9.8	1.8	ウコギ科ハリギリ属ハリギリ
	17－30	曲物	13.8	－	2.0	スギ科スギ属スギ
	18－31	刀子	15.1	2.8	2.2	マツ科マツ属(二葉松類)
	18－32	鞘	20.0	5.6	2.5	スギ科スギ属スギ
ＳＴ30	27－33	斎串Ａ	13.3	1.2	0.4	スギ科スギ属スギ
	27－34	斎串Ａ	13.1	1.5	0.3	スギ科スギ属スギ
	27－35	斎串Ａ	13.6	1.3	0.3	スギ科スギ属スギ
	27－36	斎串Ａ	12.3	1.0	0.7	スギ科スギ属スギ
	27－37	斎串Ａ	13.4	1.3	0.4	スギ科スギ属スギ
	27－38	斎串Ａ	14.2	1.3	0.4	スギ科スギ属スギ
	27－39	斎串Ａ	13.3	1.1	0.5	
	27－40	斎串Ａ	13.4	1.0	0.4	
	27－41	斎串Ａ	13.4	1.0	0.5	
	27－42	斎串Ａ	13.6	1.2	0.3	
	27－43	斎串Ａ	6.0	1.4	0.2	スギ科スギ属スギ
	27－44	斎串Ａ	10.7	1.3	0.3	スギ科スギ属スギ
	27－45	斎串Ａ	5.8	2.5	0.3	スギ科スギ属スギ
	27－46	斎串Ａ	8.1	2.3	0.3	スギ科スギ属スギ
	28－47	斎串Ａ	14.0	1.7	1.3	
	28－48	斎串Ａ	8.5	1.2	0.8	スギ科スギ属スギ
	28－49	斎串Ｂ	20.6	1.8	0.3	スギ科スギ属スギ
	28－50	斎串Ｃ	31.5	1.2	1.0	

第４表－２　出土木製品一覧

（単位：cm）

出土地点	挿図－番号	種別	長さ	幅	厚さ	樹種
ＳＴ30	28－51	斎串？	21.7	1.1	0.6	
	28－52	斎串Ｂ	19.1	1.6	0.3	スギ科スギ属スギ
	28－53	斎串Ｂ	20.2	1.7	0.5	スギ科スギ属スギ
	28－54	斎串Ｃ	18.2	1.3	0.6	スギ科スギ属スギ
	29－55	檜扇	28.6	3.1	0.3	スギ科スギ属スギ
	29－56	檜扇	28.7	3.2	0.3	スギ科スギ属スギ
	29－57	檜扇	28.8	3.3	0.3	スギ科スギ属スギ
	29－58	檜扇	28.7	2.7	0.4	スギ科スギ属スギ
	29－59	檜扇	28.8	2.4	0.3	スギ科スギ属スギ
	30－60	檜扇	28.8	2.7	0.3	スギ科スギ属スギ
	30－61	檜扇	28.7	3.2	0.3	スギ科スギ属スギ
	30－62	檜扇	28.5	2.7	0.3	スギ科スギ属スギ
	30－63	檜扇	28.8	3.3	0.3	スギ科スギ属スギ
	30－64	檜扇	28.5	2.7	0.3	スギ科スギ属スギ
	31－65	ヤス状木製品	長さ10.5、直径1.2			ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ
	31－66	ヤス状木製品	長さ13.4、直径1.3			ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ
	31－67	木札状木製品	12.8	3.4	0.4	スギ科スギ属スギ
	31－68	箆	33.8	6.0	1.6	ヒノキ科アスナロ属
	32－69	曲物底板	直径12.8、厚さ0.8			スギ科スギ属スギ
	32－70	曲物底板	直径12.2、厚さ0.7			スギ科スギ属スギ
	32－71	曲物底板	直径7.5、厚さ0.7			スギ科スギ属スギ
	32－72	刳り物	直径14.4			ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	32－73	刳り物	直径12.0			ニレ科ケヤキ属ケヤキ
	33－74	棒状木製品	60.5	1.7	1.6	
	33－75	アカスクイ状木製品	26.7	14.3	8.4	ヒノキ科アスナロ属
	34－76	木製容器	39.1	32.7	12.8	ヒノキ科アスナロ属
	35－77	楔状木製品	5.6	3.1	1.7	
	35－78	楔状木製品	4.6	3.5	1.5	
	35－79	栓状木製品	12.7	2.0	1.6	
	35－80	栓状木製品	16.5	3.0	3.0	バラ科サクラ属
	35－81	把手	15.2	4.2	5.0	スギ科スギ属スギ
	35－82	棒状木製品	20.2	2.2	2.0	
	35－83	粗形？	5.6	3.8	2.2	
ＳＴ40	43－84	斎串Ａ	9.0	0.6	0.3	スギ科スギ属スギ
	43－85	斎串Ｂ	13.7	1.5	0.4	スギ科スギ属スギ
	43－86	斎串Ａ	14.8	0.8	0.6	スギ科スギ属スギ
	43－87	ヤス状木製品	10.7	1.1	1.0	ユキノシタ科アジサイ属ノリウツギ
	43－88	斎串Ｃ	23.7	2.2	1.6	スギ科スギ属スギ
ＳＤ22	45－89	斎串Ａ	13.1	1.4	0.3	スギ科スギ属スギ
	45－90	斎串Ｂ	18.9	1.8	0.5	スギ科スギ属スギ
	45－91	箆	19.8	5.9	1.1	スギ科スギ属スギ
遺構外－ＭＥ48	49－92	斎串Ａ	9.0	0.9	0.5	
ＭＥ48	49－93	斎串Ａ	11.6	1.3	0.6	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
範確トレンチ	49－94	斎串Ｂ	17.0	1.8	0.5	
ＬＴ48	49－95	斎串Ｃ	10.2	0.8	0.8	スギ科スギ属スギ
ＬＴ48	49－96	斎串Ｃ	18.4	1.6	0.6	スギ科スギ属スギ
ＬＰ48	49－97	斎串？	11.3	2.6	0.5	スギ科スギ属スギ
範確トレンチ	49－98	曲物底板	16.0	4.7	1.5	スギ科スギ属スギ
範確トレンチ	49－99	曲物底板	12.0	11.3	0.8	スギ科スギ属スギ
範確トレンチ	49－100	木製品	10.6	3.5	3.0	

第５章　自然科学分析

第１節　放射性炭素年代測定

山形　秀樹（パレオ・ラボ）

１　はじめに

樋口遺跡(３ＴＧ)より検出された木片の加速器質量分析法(ＡＭＳ法)による放射性炭素年代測定を実施した。

２　試料と方法

試料は、ＳＥ08より採取した木片１点、ＳＴ20・ＭＥ52－ＳＷ・Ⅴ層より採取した木片１点、ＳＴ20・ＭＣ52－ＳＥ・Ⅷ－ｃ層より採取した木片１点の併せて３点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(ＡＭＳ)にて測定した。測定した^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した^{14}Ｃ濃度を用いて^{14}Ｃ年代を算出した。

３　結果

第５表に、各試料の同位体分別効果の補正値(基準値－25.0‰)、同位体分別効果による測定誤差を補正した^{14}Ｃ年代、^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}Ｃ年代値(yrBP)の算出は、^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差(±１σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の^{14}Ｃ年代が、その^{14}Ｃ年代誤差範囲内に入る確率が68％であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5,568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動、および半減期の違い(^{14}Ｃの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、^{14}Ｃ年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と^{14}Ｃ年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて^{14}Ｃ年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版）を使用した。なお、暦年代較正値は^{14}Ｃ年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、１σ暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその１σ暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10％未満についてはその表示を省略した。１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

４　考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した１σ暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

第５表　放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 （測定法）	試料データ	δ^{13}C (‰)	^{14}C年代 （yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正値	１σ暦年代範囲
PLD-2842 （AMS）	木片 3TG SE08 試料1	-28.5	1,065±30	cal AD 985	cal AD 905 - 915 (16.8%) calAD975-1,015(77.9%)
PLD-2843 （AMS）	木片 3TG ST20 ME52-SW・Ⅴ層 試料2	-26.0	1,135±35	cal AD 895 cal AD 925 cal AD 935	cal AD 890 - 905 (20.4%) cal AD 910 - 975 (79.6%)
PLD-2844 （AMS）	木片 3TG ST20 MC52-SE・Ⅷ-c層 試料3	-28.2	1,305±35	cal AD 690	cal AD 670 - 720 (68.8%) cal AD 745 - 765 (31.1%)

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代、ｐ．３－20.

第２節　テフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

能代市に所在する樋口遺跡は、米代川下流域の支流である檜山川左岸に広がる段丘の斜面上に位置する。この段丘は、小池・町田編(2001)によれば、最終間氷期(下末吉海進時)に形成された海成段丘に区分されている。今回の発掘調査では、平安時代の捨て場とされる遺構が検出され、木製品を含んだ有機物層が厚く堆積していることが確認された。また、この有機物層からは、火山灰(テフラ)と考えられる堆積物が認められている。

今回の分析調査では、有機物層中に認められたテフラと考えられる堆積物について、その性状を明らかにし、テフラである場合には、噴出年代の明らかにされている指標テフラとの対比を行う。その対比により、有機物層中に包含される遺物の年代および捨て場の形成時期に関わる資料を作成する。

２　試料

試料は、平安時代の捨て場遺構とされたＳＴ20の下位の覆土であるⅧ層より採取された。Ⅷ層は、黒褐色を呈する腐植質の土壌であり、植物遺体を含む土層とされている。木製品、土師器、須恵器などの遺物を多量に含む遺物包含層である。

採取された試料は、Ｎｏ.１～４までの試料番号が付されている。Ｎｏ.１は、ＳＴ20MA52グリッドⅧ－３層下層より採取された火山灰塊とされ、暗褐色の砂混じりシルトである。Ｎｏ.２～４の３点は、いずれも層位方向に厚さ20ｃｍの柱状ブロックとして採取されたものであり、採取位置は、順に、ＳＴ20ＢベルトⅧ－２～３層、ＳＴ20Ｃベルト Ⅷ－１～ＳＤ22－３層、ＳＴ20Ｃベルト Ⅷ－２～３層とされている。

Ｎｏ.２については、柱状ブロックの上部に認められた厚さ２cmほどのにぶい黄褐色を呈する砂混じりシルト層、Ｎｏ.３については、柱状ブロックの中部に認められた厚さ１cmほどのにぶい黄褐色を呈する砂混じりシルトのレンズ状ブロック、Ｎｏ.４については、柱状ブロックの中部に認められた厚さ２cmほどのにぶい黄褐色を呈する砂混じりシルトのレンズ状ブロックをそれぞれ分析試料として採取した。

３　分析方法

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のＭＡＩＯＴを使用した温度変化法を用いた。

４　結果

Ｎｏ.１は多量の火山ガラスと少量の軽石が含まれる。火山ガラスは無色透明であり、バブル型と塊状の軽石型が混在する。バブル型の方がやや多い状況である。軽石は、径１～２mm、白色を呈し、発泡は比較的良好である。軽石の中には、斜方輝石を包有しているものも認められた。

Ｎｏ.２はほとんど火山ガラスにより構成されるが、微量ｊの軽石も認められる。火山ガラスおよび軽石の特徴は、Ｎｏ.１と同様である。

Ｎｏ.３とＮｏ.４はともに、石英や長石および岩石片が多く、テフラの本質物質としては、火山ガラスが微量認められるのみであった。火山ガラスは、無色透明のバブル型が多く、繊維束状の軽石型も僅かに認められる。

各試料中の火山ガラスの屈折率測定結果を図50に示す。Ｎｏ.１とＮｏ.２はほぼ同様のレンジを示し、ともにｎ1.517～1.522である。一方、Ｎｏ.３とＮｏ.４も互いにほぼ同様のレンジを示し、Ｎｏ.３はｎ1.496～1.501、Ｎｏ.４はｎ1.496～1.500である。

５　考察

Ｎｏ.１およびＮｏ.２より検出された多量の火山ガラスは、上記の特性(形態と屈折率)と遺跡の地理的位置およびこれまでに研究された東北地方におけるテフラの産状(町田ほか(1981；1984)、Ａｒａｉ　ｅｔ　ａｌ.（1986)、町田・新井(2003)など)との比較から、

白頭山苫小牧テフラ(Ｂ－Ｔｍ)に由来すると考えられる。Ｂ－Ｔｍは、中国と北朝鮮の国境にある白頭山を給源とし、１０世紀頃に噴出したとされるテフラであり、日本の東北地方から北海道南部にかけての地域では細粒の火山ガラスからなるテフラとして各地で確認されている(町田ほか，1981)。また、Ｂ－Ｔｍの噴出年代については、早川・小山(1998)による詳細な調査によれば、西暦947年と考えられている。

一方、Ｎｏ.１およびＮｏ.２に混在する軽石は、その粒径から、Ｂ－Ｔｍに由来するものではない。軽石の特徴と上述の東北地方におけるテフラの産状から推定されることとして、Ｂ－Ｔｍの噴出よりも30年ほど前の西暦915年に、十和田カルデラより噴出した十和田ａテフラ(Ｔｏ－ａ)に由来する軽石である可能性がある。おそらく、ＳＴ２０の位置する斜面上に降灰したＴｏ－ａの砕屑物が、その後のⅧ層の堆積過程において撹乱を受け、上位のＢ－Ｔｍに混交したと考えられる。なお、Ｔｏ－ａにも火山ガラスは含まれるが、その屈折率はｎ1.496～1.508であり（町田・新井，2003)、Ｂ－Ｔｍとは明瞭に区別される。Ｎｏ.１やＮｏ.２の火山ガラスの中にも含まれていると考えられるが、少量のために屈折率測定時には検出されなかったものと考えられる。

Ｎｏ.３とＮｏ.４については、処理後に得られた砂分の状況から、テフラ層ではないと考えられる。おそらく、段丘斜面の上方の堆積物に由来する砂分が、洗い出されて斜面上に堆積したものであると考えられる。したがって、これらの堆積物中に含まれていた火山ガラスは、Ⅷ層堆積以前にすでに段丘上に堆積しているテフラ層に由来するものであり、Ⅷ層の時間指標とはならない。由来するテフラとしては、前述のように遺跡背後の段丘は最終間氷期の海成段丘であることと、その段丘の地理的位置および火山ガラスの形態と屈折率から、約11万年前頃に北海道の洞爺カルデラから噴出した洞爺テフラ（Ｔｏｙａ：町田ほか，1987）である可能性がある。

以上述べたＮｏ.１～Ｎｏ.４までのテフラの産状から、Ⅷ層の堆積時期は、Ｔｏ－ａとＢ－Ｔｍの降灰を挟む、その前後の時期と言うことができる。上述したこれらのテフラの降灰年代に従えば、10世紀前半の30年間以上にわたる時期といえる可能性があるが、詳細な時期の推定は、遺物の年代や産状および周辺のテフラの産状等を含めて検討する必要がある。

引用文献

Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K,1986,Catalog for late quaternary marker-tephras in JapanⅡ-Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No.21,223-250.

古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123－133.

早川由紀夫・小山真人，1998，日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－．火山，43，403－407.

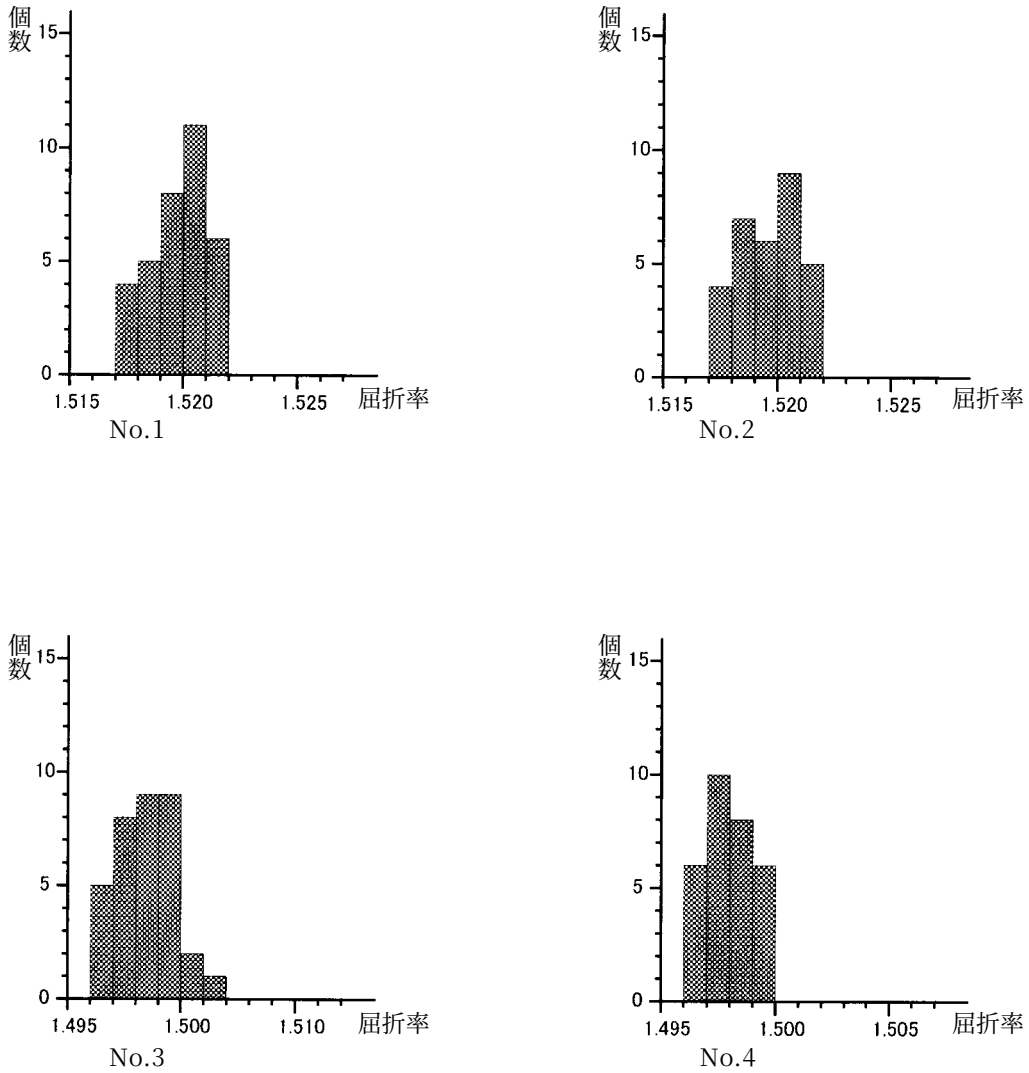
小池一之・町田　洋（編)，2001，日本の海成段丘アトラス，東京大学出版会，ＣＤ－ＲＯＭ.

町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336ｐ.

町田　洋・新井房夫・森脇　広，1981，日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，562－569.

町田　洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦，1984，テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－．古文化財に関する保存科学と人文・自然科学．865－928，渡辺直経編，同朋舎.

町田　洋・新井房夫・宮内崇裕・奥村晃史，1987，北日本を広く覆う洞爺火山灰．第四紀研究，26，129－145.



第50図　火山ガラスの屈折率

第６章　まとめ

樋口遺跡で確認された遺構と遺物は、火山ガラスの屈折率測定結果から、Ⅷ層でサンプリングされた資料により、十和田ａテフラ(Ｔｏ-ａ)と白頭山苫小牧テフラ(Ｂ-Ｔｍ)の降下前後の時期と位置付けられる。さらに、ＳＤ22での火山灰の堆積状況や、土師器坏の特徴から白頭山苫小牧テフラの降下年代とされる西暦947年前後かそれ以降の年代が考えられ、遺構と遺物の広がりや出土状況からは遺跡が営まれた時期も10世紀中葉から後半で、それも短期間であったとの推定ができる。

調査では、調査区のほぼ中央部の緩斜面全域で遺物の広がりが認められ、遺物が集中する３箇所を捨て場遺構として認識したが、出土する遺物の種類などから見て調査区の全域が一つの捨て場として捉えることも可能である。

捨て場から出土した遺物には、土師器の坏が圧倒的に多く、灯明用として使われた坏が、220点(高台付き坏も含む)のうち69点で、口縁部が打ち欠かれた坏は90点である。さらに、両者に含まれるものが30点である。この両者に含まれる坏は、口縁部が打ち欠かれた後に灯明用として使用されている。木製品には、斎串をはじめとして多くの木製品が出土しているが、農具の出土は無く、むしろ日常的な容器である刳物、曲物などが多い。また、檜扇は、県内では大仙市の四十二館、秋田城跡に次いで３例目の発見である。木製品は、器種により使用される材質が確定される傾向が見られる。斎串や檜扇、曲物の底板などには圧倒的にスギを利用するが、刳物にはアスナロやケヤキが、下駄にはハリギリが使用されており、ヤス状木製品とした４点では、アジサイ属のノリウツギが利用されているが、ヤス状とはしたものの、用途は不明である。

秋田県内で見つかった祭祀遺跡には、五城目町の中谷地遺跡がある。年代的には９世紀の前半とされる祭祀場を中心とする遺跡であるが、祭祀にかかわる遺物には、刀子形、鏃形など武器の形代が多いのが特徴で、律令国家による領域的支配の前線地として捉えている。一方で、樋口遺跡から北東2.2kmの幟山丘陵地にある鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡は、10世紀初頭の防御性集落として考えられている。このことからも、少なくともこの地域が、10世紀前半ころまでは、まだ、不安定な地域であったことがうかがえる。また、「野代営」の擬定地である大館跡は、昭和46年～昭和51年の六次にわたる調査で、十和田ａ火山灰ないしは白頭山苫小牧火山灰の降下直前の竪穴住居群が検出されている。両遺跡からは、錫杖状鉄製品や鉄鏃などが見つかっている。

こうしたことから、出土遺物のみの対比ではあるが、９世紀前半に五城目地域を中心とする南秋田郡域では、国家的な祭祀の風習が執り行われているものの、まだ安定期には入っておらず、また、米代川左岸一帯、特に鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡のある幟山丘陵地では、10世紀初頭から前半期までは安定した時期ではなっかたことが想定される。

樋口遺跡の祭祀的な木製品には武器の形代が皆無である。この事実は、およそ１世紀半を経て、五城目町を含む南秋田郡域から少なくとも、樋口遺跡を中心とする米代川の左岸一帯は、ある程度安定した時期を迎えていたことの証左になるのかも知れない。

1 遺跡遠景（西から）

2 遺跡近景

1 ＳＴ27捨て場

2 ＳＴ30捨て場

1 ＳＤ22溝跡

2 ＳＤ22溝跡

1

4

6

13

21

29

33

43

出土遺物（1）

46

74

75

76

78

79

88

94

出土遺物（2）

101

103

110

124

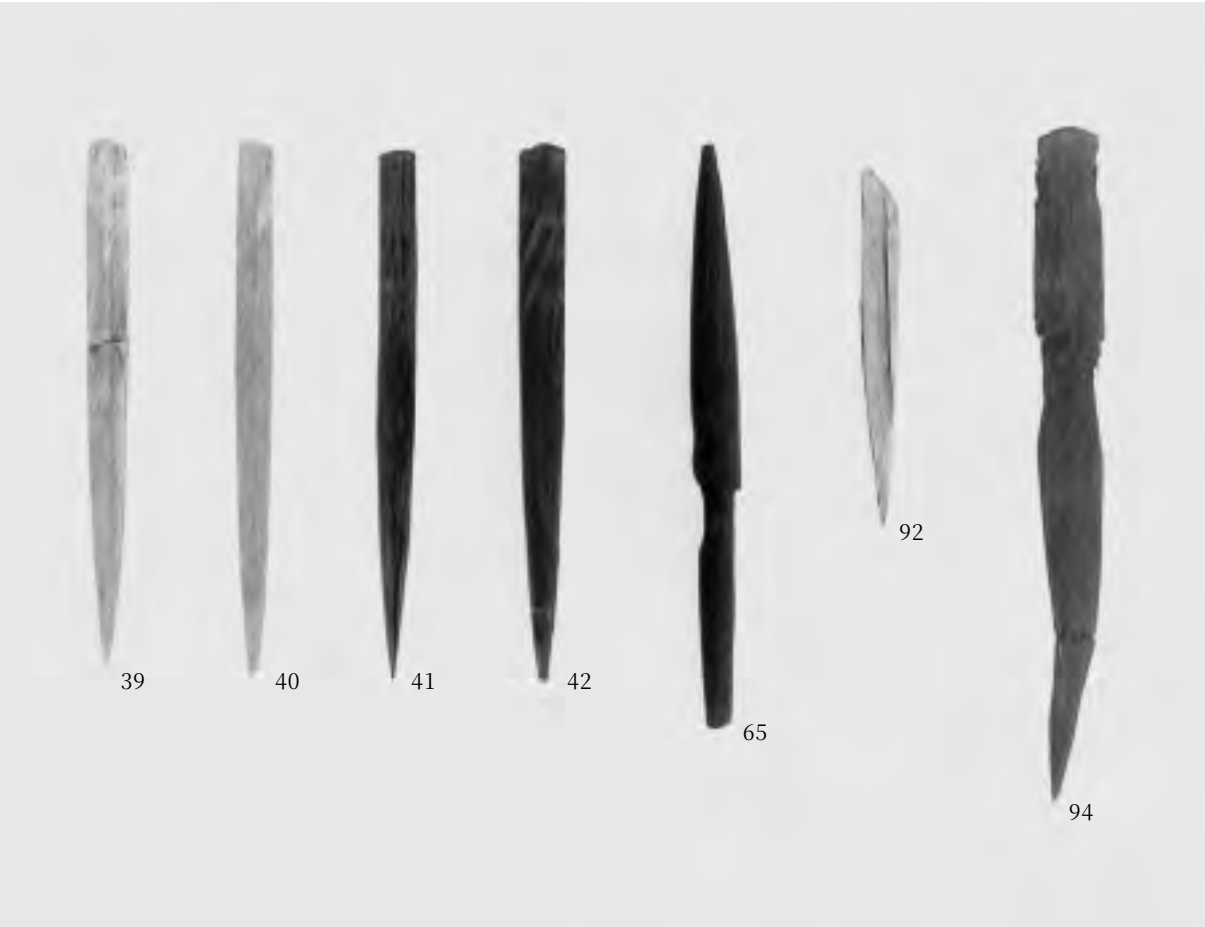
125

126

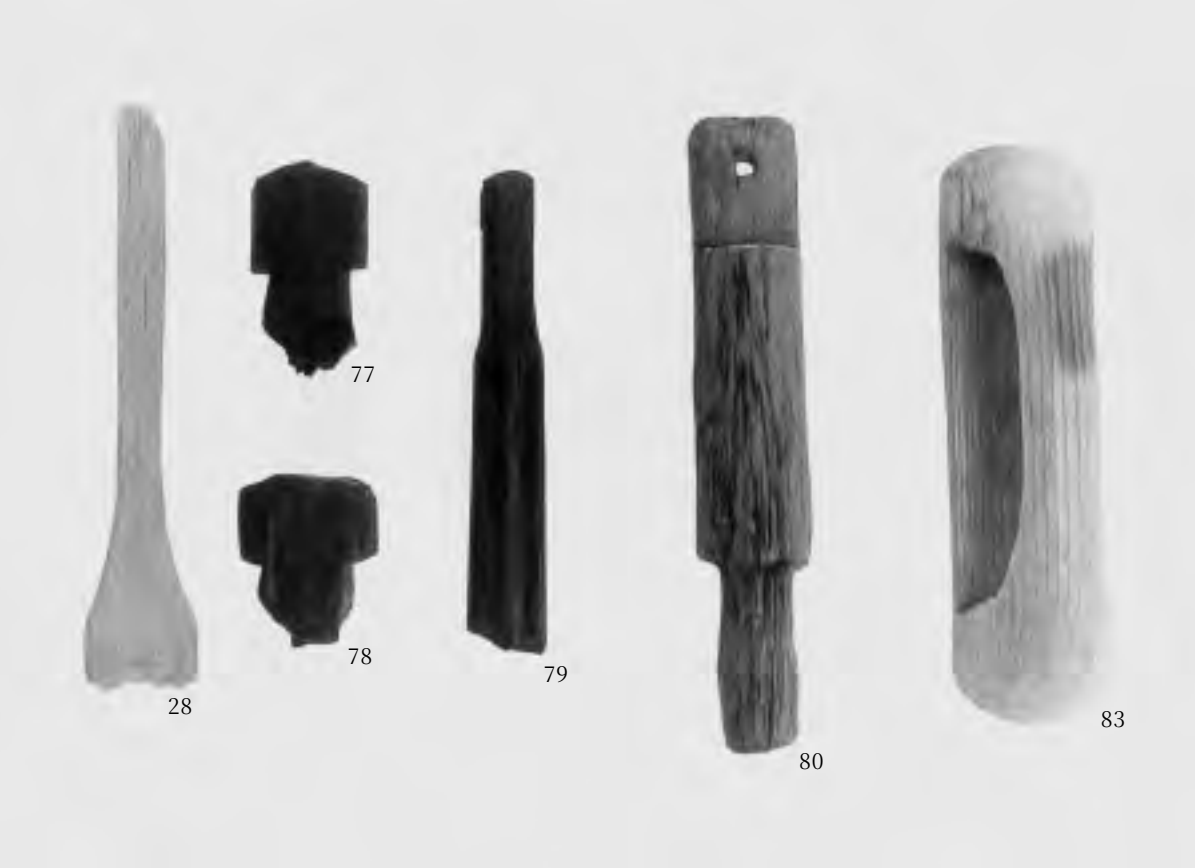
147

156

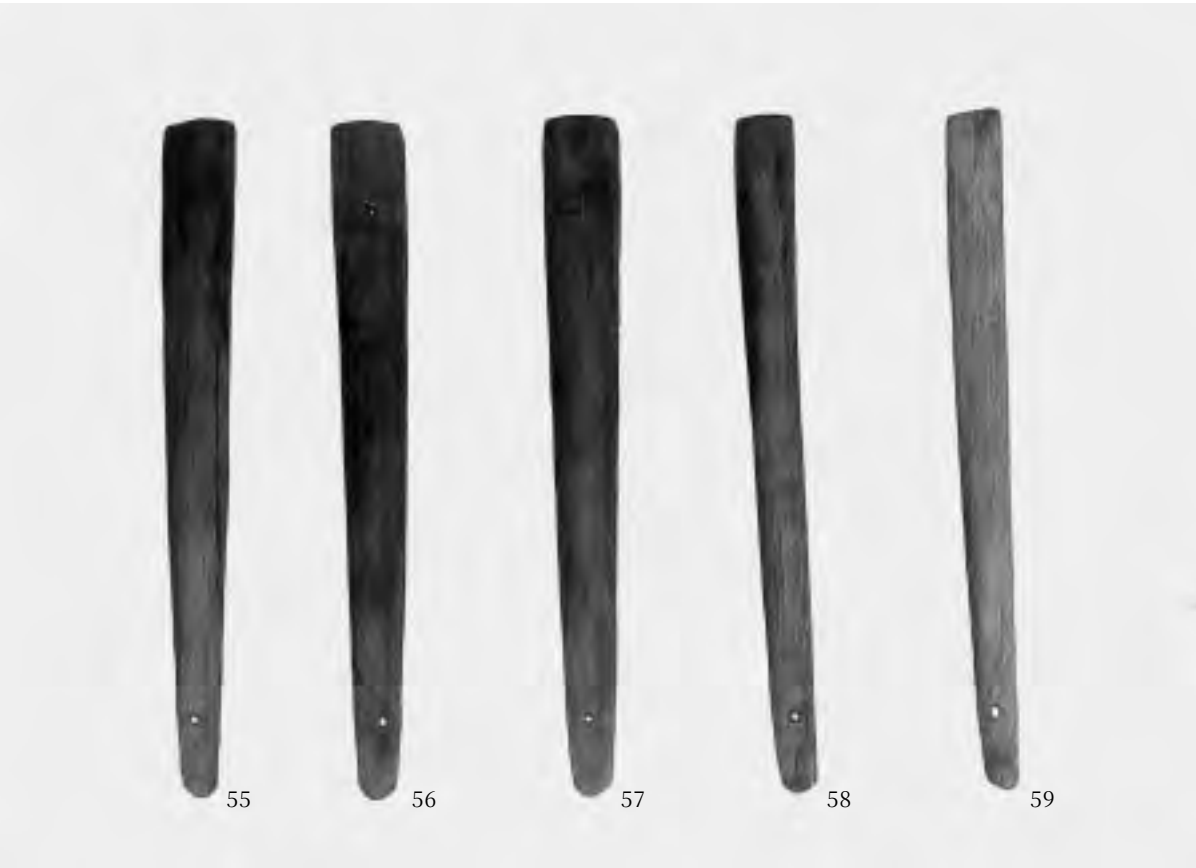
出土遺物（3）



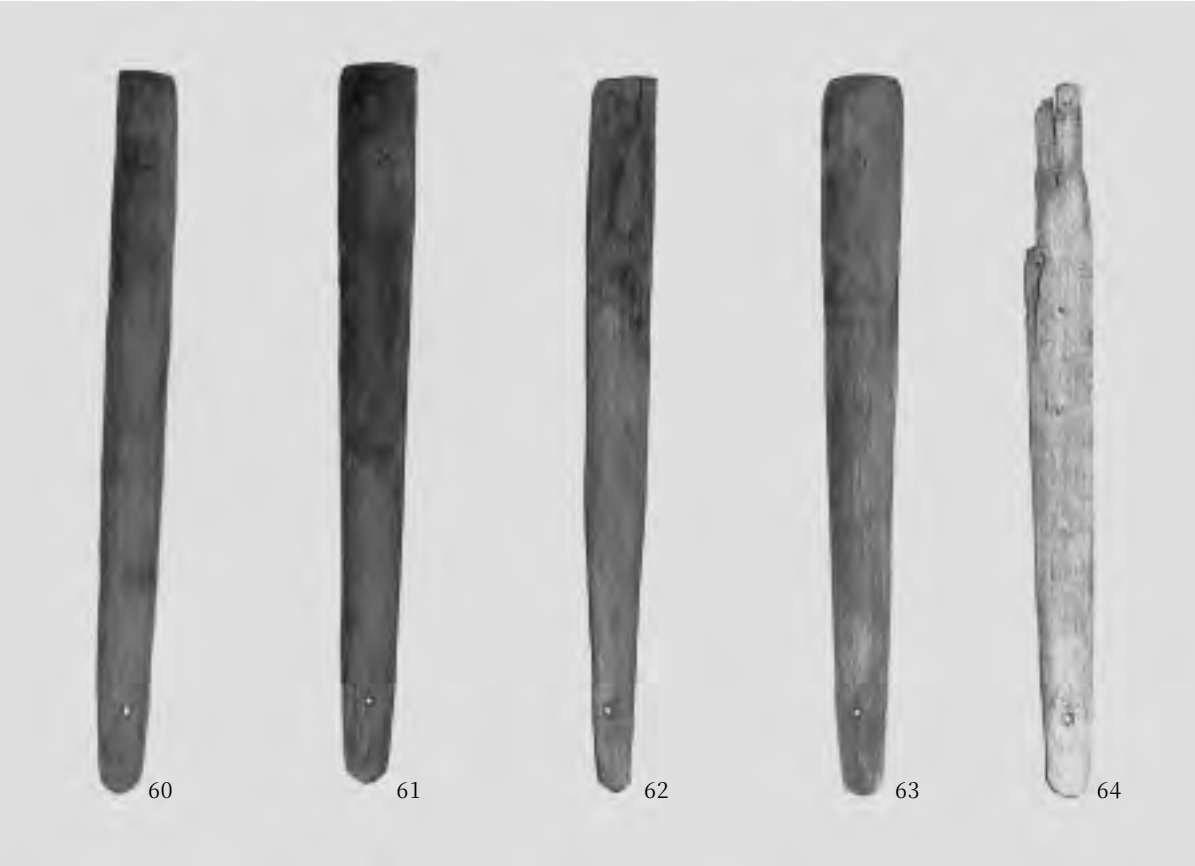
出土遺物（4）



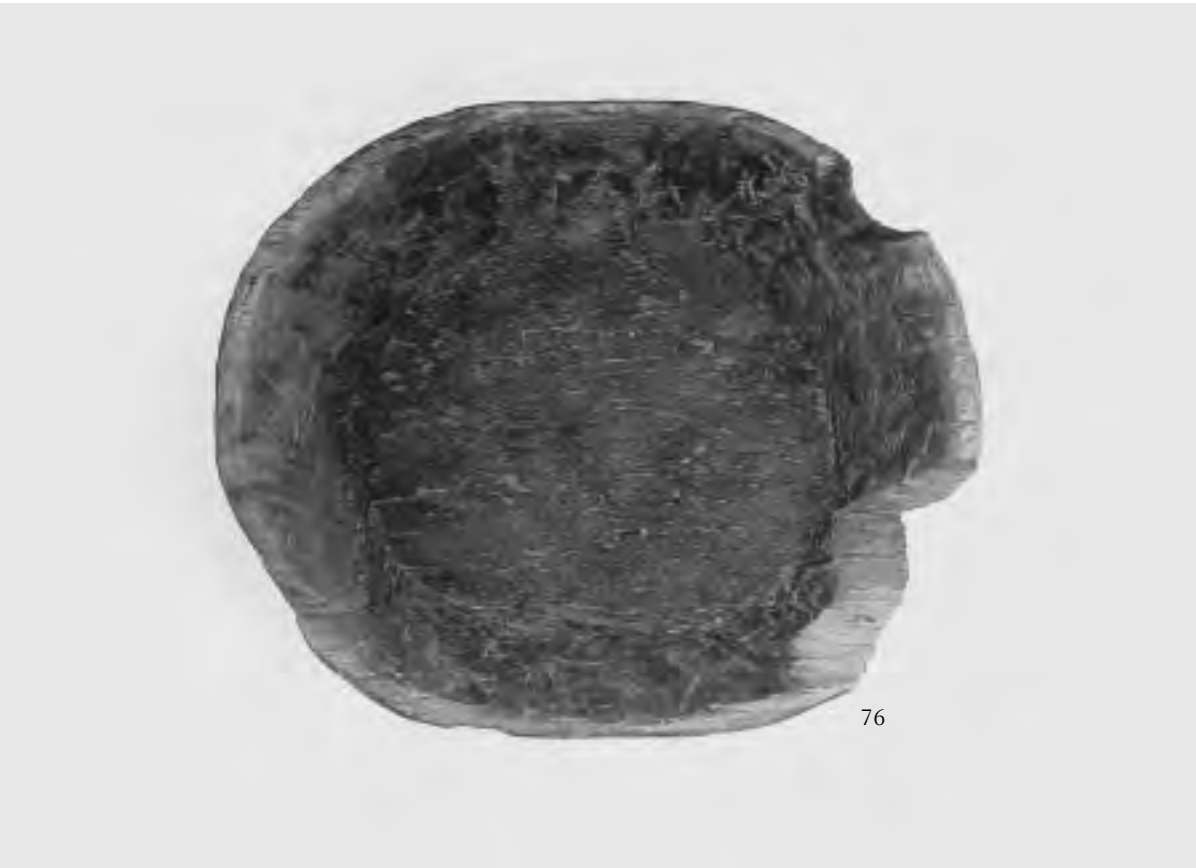
出土遺物（5）



出土遺物（6）

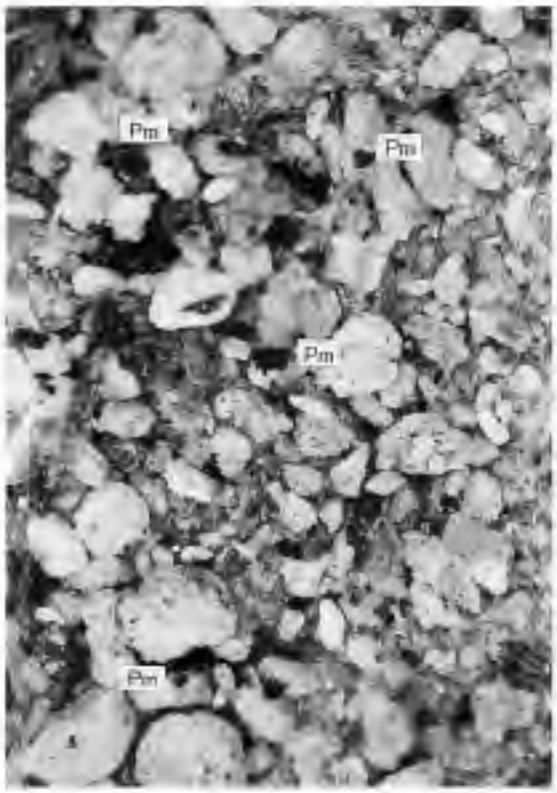


出土遺物（7）

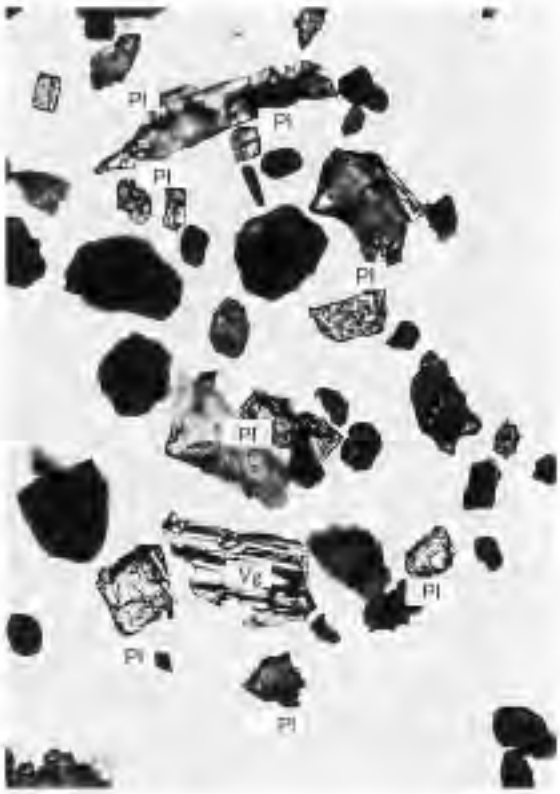


出土遺物（8）

1.B-Tmの火山ガラス
No.1　ST20MA52　グリッドⅧ－3層上層



2.To-aの軽石
No.1　ST20MA52　グリッドⅧ－3層上層



3.Tayaの火山ガラス
No.3　ST20c　ベルトⅧ－1～SD22-3層

Vg：火山ガラス.
Pm：軽石.
Pl：斜長石.

0.2mm　1.3
2mm　2

テフラ

報　告　書　抄　録

ふりがな	とよぐちいせき
書名	樋口遺跡
副書名	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第411集
編著者名	高橋忠彦　山田　子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014－0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地 TEL0187－69－3331
発行年月日	西暦2006年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	樋口遺跡					
樋口遺跡（とよぐちいせき）	秋田県能代市（あきたけんのしろし） 扇田字樋口（おうぎたあざとよぐち） 58－1他	05202	2-199	40° 10′ 55″	40° 5′ 34″	20030520 ～ 20030808	1,500㎡	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樋口遺跡	祭祀場	平安時代	捨て場 井戸跡 溝跡 土坑 杭列 柱穴様ピット	土師器 須恵器 木製品 土製品 石製品	平安時代の祭祀が行われた場所であり、灯明用に転用された土師器坏・斎串などの出土から、水辺の祭祀が執り行われた場所と考えられる。

秋田県文化財調査報告書第411集
樋　口　遺　跡
――一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ－
印刷・発行　平成18年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802 大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187)69－3331　ＦＡＸ(0187)69－3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580 秋田市山王３丁目１番１号
電話(018)860－5193　ＦＡＸ(018)860－5886
印　　刷　株式会社 塚田美術印刷